

長野県松本市

MATSUMOTOJŌ ŌTEMONMASUGATA-ATO

松本城大手門枳形跡

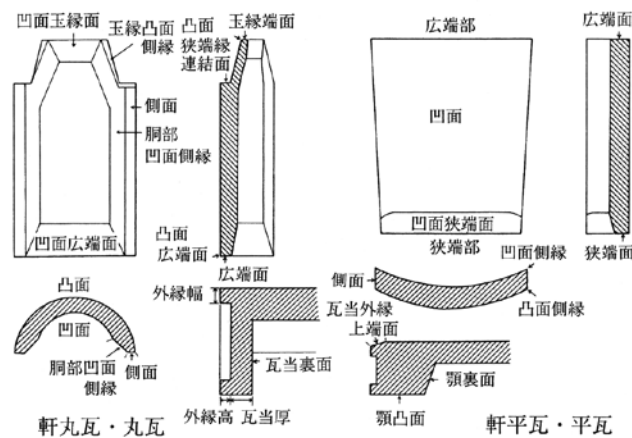
— 発掘調査報告書 —

2015.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成24年7月30日から同年12月28日に実施された松本市大手3丁目67-ニ-2、67-10、67-11、77-12、77-14に所在する松本城大手門枳形跡及び総堀の一部の発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は、松本城大手門枳形跡広場（多目的歴史広場）整備に伴い、将来的な遺跡保存を前提とした発掘調査として松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は第Ⅲ章第2節・第4節3・5：原田健司、第Ⅲ章第4節4：山田梨恵、第Ⅳ章第3節：鈴木仁美、第Ⅲ章第4節6：パリノ・サーヴェイ株式会社、その他を竹内靖長が担当した。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：中澤温子、佐々木正子、内田和子
遺物保存処理・接合・復元：竹平悦子、洞沢文江
瓦拓本：竹平悦子、中澤温子、三澤栄子
遺物実測トレース・版組（陶器・土器・瓦） 柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、安田津由紀
（金属製品） 洞沢文江
（石製品・木製品） 荒井留美子
遺構図整理トレース：荒井留美子
写真撮影（遺構） 福沢佳典、原田健司、山田梨恵
（遺物） 宮島洋一
総括・編集：竹内靖長
- 5 図中で用いた方位記号は真北で、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。また、標高・水平基準は、東京湾平均海水面水準である。
- 6 土層色名・混入物については、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 7 遺構図はS = 1/80、陶器・土器1/4、瓦1/4、石製品1/3・1/4、金属製品1/2、木製品1/3・1/4
- 8 土器・陶器実測図において、陶器は断面黒塗り、土器は白抜きとした。
- 9 本書で用いる瓦の部位名称は、『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 に準じて用いている。



- 10 本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒399-0823長野県松本市中山3738-1 電話0263-86-4710 FAX0263-86-9189）に収蔵・保管されている。

目 次

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経緯

- 第1節 調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第Ⅱ章 遺跡の環境

- 第1節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 第2節 地形・地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第Ⅲ章 調査結果

- 第1節 地中レーダー探査による事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
- 第2節 発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 第3節 遺構
 - 1 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
 - 2 石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
 - 3 石列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
 - 4 総堀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 第4節 遺物
 - 1 陶器・土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
 - 2 瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
 - 3 石器・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
 - 4 金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
 - 5 木製品・植物繊維製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
 - 6 松本城大手門枡形跡出土骨の同定・・・・・・・・・・・・・・ 58

第Ⅳ章 調査のまとめ

- 第1節 調査成果の総括
 - 1 大手門枡形跡の遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
 - 2 出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
- 第2節 大手門枡形の破却について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
- 第3節 災害等による修理と瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

写真図版

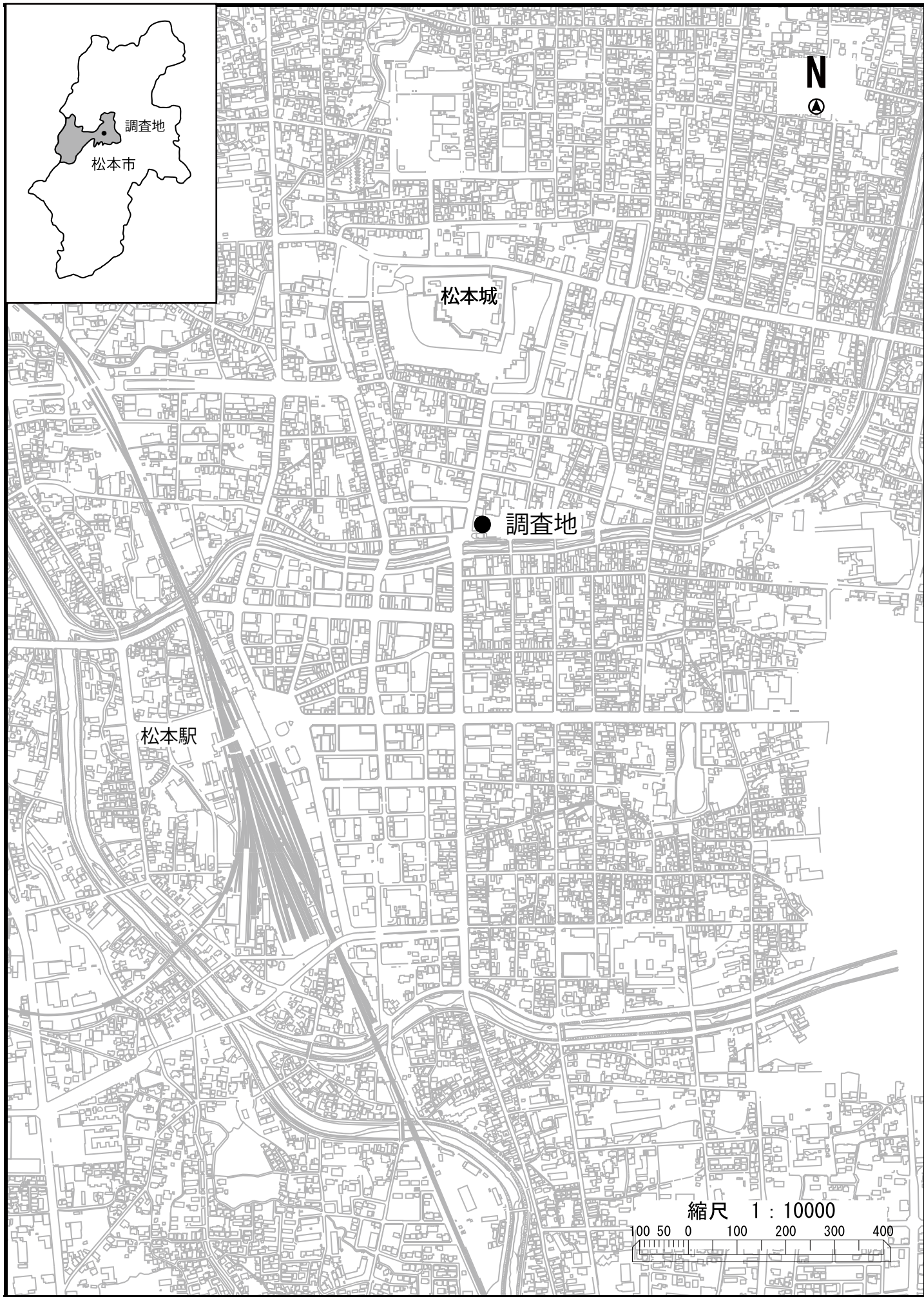
報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地の位置	第19図	瓦(4) 39
第2図	調査区の位置 2	第20図	瓦(5) 40
第3図	A・B地区70MHzアンテナ による成果平面図(部分) 13	第21図	瓦(6) 41
第4図	A・B地区70MHzアンテナ による成果平面図 13	第22図	瓦(7) 42
第5図	遺構全体図 17・18	第23図	瓦(8) 43
第6図	トレンチ1遺構図 19	第24図	瓦(9) 44
第7図	トレンチ1出土図 20	第25図	石器・石製品、 金属製品 53
第8図	トレンチ2・3・4遺構図 21	第26図	木製品(1) 56
第9図	トレンチ2・3出土図 22	第27図	木製品(2) 57
第10図	トレンチ3出土図 23	第28図	ニホンジカの骨格 59
第11図	トレンチ1・2土層断面図 24	第29図	絵図にみる調査位置(推定) . . 64
第12図	トレンチ1・2・4土層断面図 25		
第13図	南トレンチ遺構図 29		
第14図	南トレンチ割石出土図 30		
第15図	南トレンチ遺物出土図 31		
第16図	陶器・土器・瓦(1) 36		
第17図	瓦(2) 37		
第18図	瓦(3) 38		

表目次

第1表	土層一覧 26	第7表	石器・石製品一覧表 52
第2表	陶器・土器観察表 45	第8表	金属製品一覧表 52
第3表	軒丸瓦観察表 45	第9表	木製品・植物繊維製品観察表 . . 55
第4表	丸瓦観察表 46	第10表	検出動物分類群の一覧 58
第5表	軒平瓦観察表 49	第11表	骨同定結果 61
第6表	平瓦観察表 50	第12表	災害と普請の記録 72



第1図 調査地の位置

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査経過

松本城三の丸にある城郭への虎口（出入口）は、東門、北門、北不明門、西不明門、大手門の5ヶ所あり、このうち南側中央部にあり、最も規模が大きく正門にあたるものが大手門である。大手門枡形付近は、幕末・維新期を経て大手門及び門台等が取り壊され、市街地化の開発が進められる中で、昭和38年頃には大型商業ビルが建てられ現在に至っていた。こうした中、平成22年3月にこの商業ビル（旧・鶴林堂ビル）の土地・建物が松本市に寄付された。これを受け、松本市として近隣の商業ビル（旧・武富士ビル・旧・ノセビル）の土地建物も買収し、跡地を将来的な遺跡の保存を前提とした仮称・多目的歴史公園（松本城大手門枡形跡広場）として整備することとなった。この多目的広場の整備事業にあたり、大手門枡形跡の遺構残存状況や構造を明らかにするため、保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。調査に先立ち、平成22年12月13～14日には、地中レーザを用いた遺構確認調査を実施し、ビル以外の構造物が地下に残存している可能性が高いことが判明した。遺構の残存状況を確認するため平成24年7月30日から同年12月28日まで発掘調査を実施し、調査終了後は遺構を砂等で保護しながら埋め戻した。

平成22年度

- 3月 旧鶴林堂ビルの土地・建物が松本市に寄付される。
- 9月 9月議会にて市長提案説明及び総務委員会で言及
- 11月 史跡松本城整備研究会で説明及び『松本城およびその周辺整備計画』に位置づけを了承。
- 12月13～15日 大手門枡形の遺構の有無について、地中レーダー探査を実施。石垣等の構造物が残存している可能性があることが判明。

平成23年度

- 4月 旧武富士ビル・旧ノセビルの土地・建物を取得

9月

～平成24年6月 3棟の建物を解体

平成24年度

- 7月13日 発掘調査の土地承諾書
- 7月30日 発掘調査開始
- 10月2日 県教育委員会文化財・生涯学習課
指導主事現地指導

10月26・29・30日 現地見学会実施

- 11月21日 文化庁 佐藤正知調査官 発掘現場視察
- 1月23日 埋蔵物発見届及び埋蔵文化財保管証の提出
- 2月14日 文化財の認定
- 3月4日 終了報告書の提出
- 8月5日 出土文化財譲与申請
- 8月19日 出土文化財の譲与認定

平成25年度

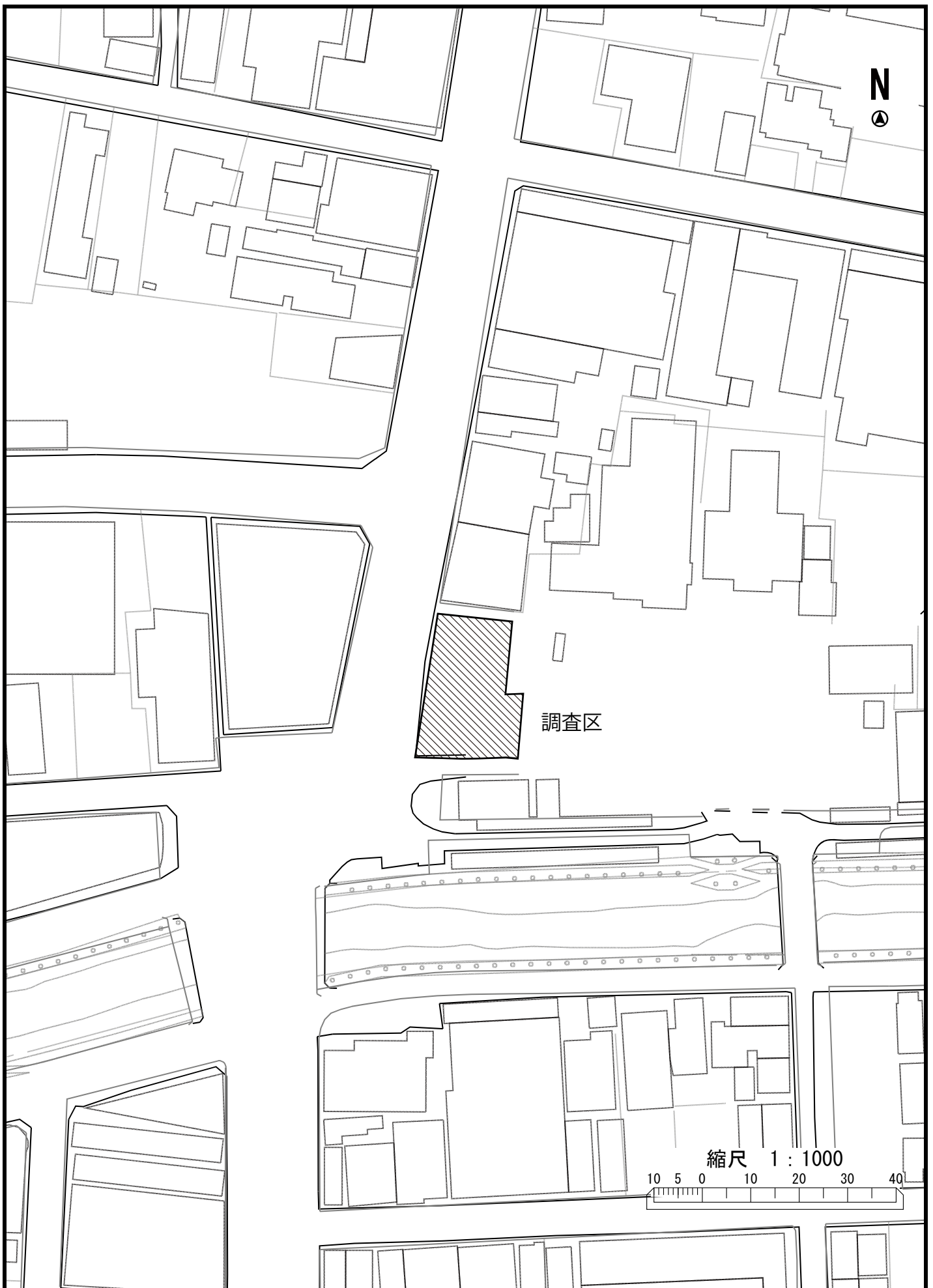
- 4月 松本城大手門枡形跡広場整備



写真1 解体されるビル



写真2 開智小学校6年生の見学



第2図 調査区的位置 (S=1/1,000)



写真3 調査前（ビル解体前・H16年）空中写真

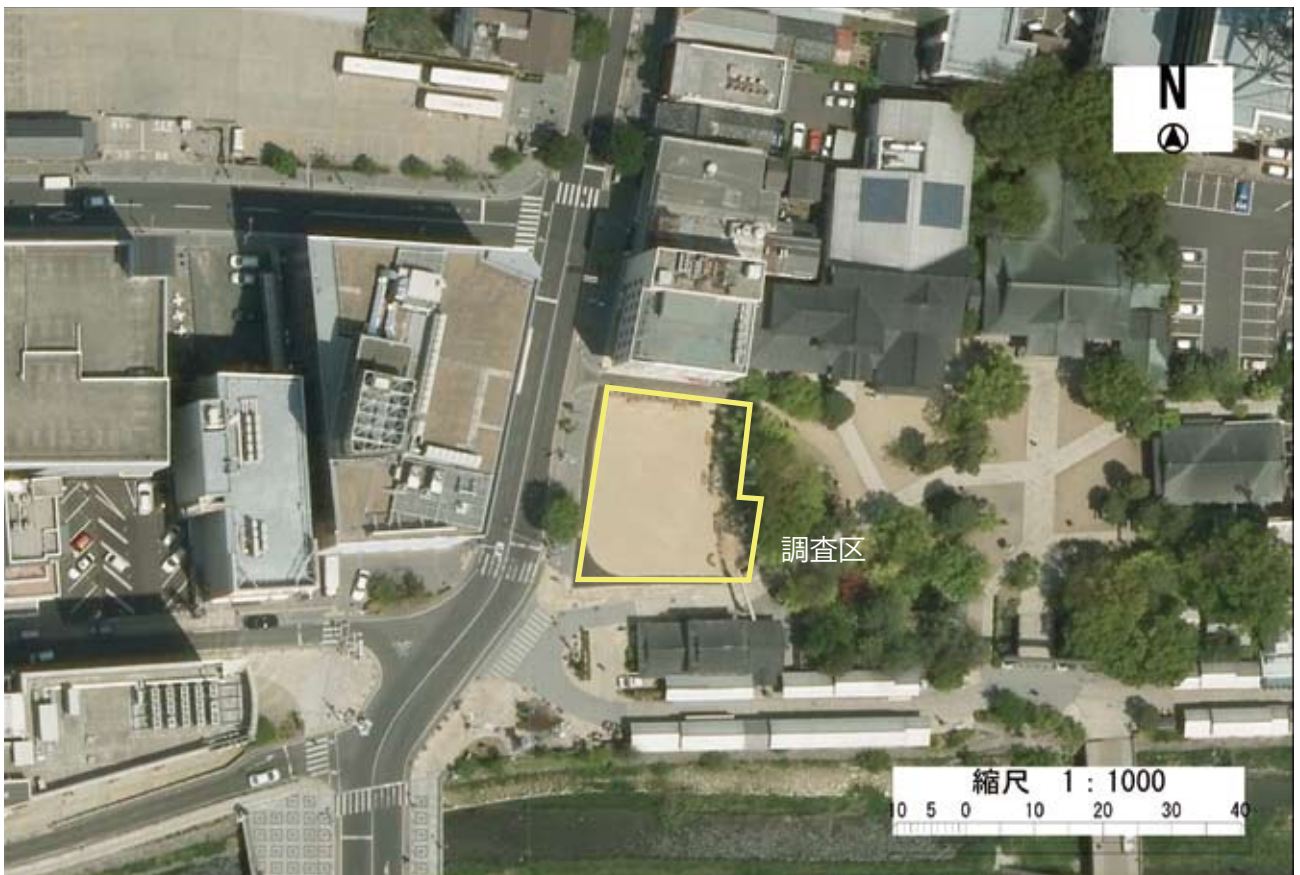


写真4 調査後（公園整備・H25年）空中写真

第2節 調査体制

調査団長：吉江 厚（松本市教育長）

<平成24年度（発掘調査）>

調査担当者：福沢佳典、原田健司、山田梨恵

発掘協力者：井口方宏、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、坂口ふみ代、清水陽子、関谷昌成、鳥井和幸、
西牧まり子、林 秋好、宮沢昭敬、宮沢文雄、山崎素行、渡辺順子

整理協力者：内田和子、佐々木正子、白鳥文彦、中澤温子、前沢里江、三沢栄子、八板千佳、安田津由紀

<平成25年度（整理作業）>

整理協力者：市川二三夫、内田和子、柏原佳子、佐々木正子、白鳥文彦、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、
三沢栄子、八板千佳

<平成26年度（報告書刊行）>

報告書作成：竹内靖長、原田健司、山田梨恵、鈴木仁美

調査員：宮島洋一

整理協力者：内田和子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、村山牧枝、
三沢栄子、八板千佳、安田津由紀

事務局：松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長 ～平成26年3月）、内城秀典（同 平成26年4月～）、

大竹永明（課長補佐 埋蔵文化財担当係長 ～平成25年3月）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、

竹原 学（同）、三村竜一（主査 ～平成26年3月、埋蔵文化財担当係長 平成26年4月～）、

竹内靖長（埋蔵文化財担当係長 平成26年4月～）、久保田 剛（主査 ～平成25年3月）、

櫻井 了（主査 平成25年4月～）、柳澤希歩（嘱託 ～平成26年3月）、

吉見寿美恵（同 平成26年4月～）



写真5
作業状況

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 歴史的環境

1 松本城の略史

(1) 深志城時代

松本城は、その前身である深志城を基盤として築城されたと言われている。水野氏時代に編纂された『信府統記』によれば、永正元年（1504）小笠原氏の一族である島立右近貞永が、坂西氏の居館の跡を整備して、本丸のみであったところを整備し、二ノ曲輪を設け、家臣の邸宅を建て、小笠原氏の拠点である井川の館の北の守りとして深志城を築いたとされ、昭和8年発行の『松本市史』においてもこの記述を採用し、坂西氏居館跡を基盤として深志城を整備したとしている。しかし、『二木家記』によれば、天文19年（1550）武田信玄が小笠原氏を府中から追ってこの地を手中にしたとき、「坂西が罷りあり候 深志の城を取立て・・・」とあり、深志城には坂西氏が在城していたとみられる。また、武田氏側の記録である『高白斎記』では、「子の刻大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所自落、島立・浅間降参、・・・」とあり、島立氏は浅間の赤沢氏とともに武田氏に下っている。このような様々な記録があり、深志城期のことについては、実際のところほとんど判然としないが、小笠原氏の本城である林城の支城にすぎなかったことは確かなようである。天文20年（1550）に武田晴信が松本平に侵攻して以後、深志城は32年間にわたり武田氏の信濃侵攻の拠点となった。

一方、発掘調査においては平成13年に実施された松本城三の丸跡土居尻第2次調査において、16世紀前半までさかのぼる幅5.5mの薬研堀が、長さ23mにわたって発見された。また、松本城三の丸跡大名町第1次調査では、16世紀後半の松本城築城直前に埋め戻された幅5.4m以上、深さ2mの片薬研堀が発見されている。このような深志城期の堀は、文書記録や絵図などにも一切記録がみられないもので、深志城期の解明において重要な資料となっている。

(2) 小笠原氏の松本城の初期整備

天正10年（1582）武田氏の滅亡を機に、小笠原長時の三男貞慶が旧領である安曇・筑摩郡を回復し、深志城を松本城と改め、城郭の整備にとりかかった。『信府統記』によれば、

「大二普請ヲ企テ、天正十三年乙酉年ヨリ今ノ宿城地割シテ、同十五年丁亥年マテニ、市辻泥町辺ノ町屋残ラズ本町江引移シ、東町・中町ヲ割り、麻葉町ヲ安原ト改メ、西口ヲ伊勢町ト名ツケ、通り筋ヲ定メ、家ヲ建テケ（中略）枝町ヲモ地割アリ、和泉町・横田町・飯田町・小池町・宮村町・馬口旁町等ノ名ハ定リケレトモ、家居ハ村々ノ如クニテ、町並軒端ハ未ツラナラザリシト云フ、三ノ曲輪繩張シテ、壘ヲホリ土手ヲ築キ、四方ニ五ヶ所ノ大城戸ヲ構ヘ、南門ヲ追手ト定メ、小路ヲ割り、土屋舗ヲ建テ泥町ノ跡ヲ柳町ト号ス、然レ共、家居ハ未立続カサリシト云フ・・・」

貞慶は、三の丸の市辻と呼ばれた地蔵清水から大柳町にかけての地域にあった町屋を、女鳥羽川の南側の地に移し、武家地と町人地をしっかりと分けした。また、三の丸には堀を掘り、土手を築いて5か所の大城戸を築き、大手門を南に構え、侍屋敷を整備した。この時、町人町の本町・中町と枝町の道筋を整え松本城下町の基本が形成された。

(3) 石川数正・康長の城郭整備期

天正18年（1590）、豊臣秀吉が小田原の戦いで後北条氏に勝利して天下を手中にすると、徳川家康を関東に移した。松本には、秀吉方の石川数正が8万石で入封した。数正は早速城普請に着手し、二の丸に簡山寺御殿を造営したが、文禄元年（1592）朝鮮出兵中に他界し、同年12月に京都で葬儀が行われた。その後、数正の子康長は秀吉の命を受けて、文禄2～3年（1593～94）にかけて、関東の家康を監視する城として松

本城天守を築いたとされる。

『信府統記』には、「父康昌（数正）ノ企テル城普請ヲ継、天守ヲ建、惣堀ヲサラヘ、幅ヲ広クシ、岸ノ高クシテ石垣ヲ築キ、渡り矢倉ヲ造ル、黒門・太鼓門ノ門樓ヲ立、堀ヲカケ直シ、三ノ曲輪ノ大城戸五ヶ所共ニ門樓ヲ造ル、其外矢庫々々、惣堀大方建ツ、城内ノ屋形修造アリ、郭内ノ土屋鋪ヲ建テ続ケ、郭外ニモ土屋鋪ヲ割ル、亦枝町ノ家ヲツケ、並ヲ能シ、宮村町ノ辺ニ歩士ノ屋鋪ヲ造ル・・・」とある。

数正の意志を継いだ康長は、天守を建て、総堀を深くし、土塁を築き、本丸を石垣で防備した。また、三の丸の入口5か所には門樓を造り、土堀・隅櫓・太鼓門・黒門を造り、城内の館の修造、郭内外の侍屋鋪の建造を行い、近世城郭としての松本城が成立した。

(4) 小笠原秀政時代

石川氏が改易されると、慶長18年（1613）に小笠原秀政が飯田から再び入封した。このころは、城下町の町割りができている、まだ空き地や空き家が多かったが、飯田から従った人々や、城下町の再整備により集住が進んだようである。『信府統記』には「当時ハ軒端立チツラナリ、繁盛昔ニ越ケルトナリ」と記されており、城下町の充実がみられた。伊勢町一帯の発掘調査においても、城下町最下層の築城当時と考えられる検出面では、まだ短冊形地割が成立しておらず、人為的な整地面があっても遺構がほとんど確認できない箇所が多くみられた。17世紀初頭段階で短冊形地割が見られ始め、遺構も密に確認できるようになるため、『信府統記』の記述と発掘調査での所見に同じ様相がみられる。

(5) 戸田氏・松平氏統治時代

元和3年（1617）、戸田康長が入封し、安原町西側に徒土町・足軽町を建設している。

その後、寛永10年（1633）に、家康の孫にあたる松平直政が入封した。この時『寛永十四年大工・木挽・鍛冶 豊師役銀之事』によれば、「御本城御殿・天守・四方御門・矢倉・惣御囲御修復・御本城当方へ長多門立、二之丸へ御殿立、同御城米蔵立、大手御門外西へ大御馬屋立、惣木戸数十ヶ所新キ立・・・」とあり、天守閣の修復が行われ、辰巳附櫓と月見櫓が新たに付設された。さらに二の丸には、幕府の非常用米蔵を保管するために、八千俵蔵を建て、六九には厩が設置された。

(6) 堀田氏・水野氏時代

寛永15年（1638）堀田正盛が入封したが短期間であったため、上土の蔵を建設した程度であった。

寛永19年（1642）水野忠清が入封し、松本城北の堀や石垣の破損を修復し、辰巳隅櫓の建て替えを行った。城下町は、水野氏時代にほとんど完成したと考えられる。

(7) 戸田氏時代

享保12年（1727）閏正月元旦、905坪の広さがあった本丸御殿が焼失した。戸田氏はこれを再建することができず、政庁は二の丸御殿に移された。しかし、二の丸御殿は狭かったため、郡所や町所などは六九に移された。元文4年（1739）、二の丸御殿は手狭であったらしく、新御殿が古山地御殿西側に増築された。明治維新後、二の丸御殿は筑摩県の県庁となっていたが、明治9年（1874）に焼失した。

2 大手門枡形について

(1) 大手門枡形の概略

松本城は本丸・二の丸・三の丸の城郭部分と、その外側の城下町で構成され、城郭の各郭を内堀・外堀・総堀が囲む。三の丸にある城郭への虎口（出入口）は、東門、北門、北不明門、西不明門、大手門の5ヶ所あり、このうち南側中央部にあり、最も規模が大きく正門にあたるものが大手門である。大手門以外の門は、馬出しの形態であるが、大手門だけは枡形の形態をしている。

大手門枡形は、門・番所・堀の建物と、石垣、枡形の空間地、堀（総堀）で構成される。城下町から千歳

橋を渡ると、東側には縄手、西側には六九の通りがあった。六九には、江戸後期に松本藩の地方行政機関が集中してあった。『嘉永七年家中名前付図』（1854）をみると、幕末段階では六九の通り北側には、東から郡所（町所を併合）、表勘定所、預所の順で並び、通りの南側には蔵、射場、蔵役所、木場役所、炭所が置かれていた。蔵のあった場所は、安永5年（1776）の火災以前には、東西157間余（約283m）の規模の54疋立ての外厩（六九厩）があり、町の名称の由来となった。

大手門枅形の東側には総堀があり、絵図などから南北約55mの幅があったと推定される。枅形西側には、二の門に入るための空間地があり、外番所があった。

二の門は西向きに開く門である。様式などの詳細は不明であるが、後藤新門が明治30年（1897）に明治初年の状況を思いおこして描いた原図をもとに着色されたとされる『松本城見取り図』には、薬医門の形式が見て取れる。二の門を入ると枅形の空間地になっていた。この枅形は約220坪あり、松本城にある3カ所の枅形（黒門枅形・太鼓門枅形・大手門枅形）の中で最大規模であった。枅形の周囲には石垣が積まれ、その上には屋根付きの土塀が巡り、枅形南東隅には、内番所が置かれていた。

枅形の北奥には左右に門台の石垣が積まれ、一の門が設けられていた。門台石垣には、総堀北側にある土塁と、その上にあった土塀が接続していた。門台石垣の上には、櫓門（太鼓門や黒門と同様）形式の一の門が設けられていて、規模は桁行10間5尺、梁間は5間あった（太鼓門は桁行10間、梁間3間半である）。絵図資料などをみると、一の門・二の門・土塀の屋根には瓦が葺かれていたことが見て取れる。一の門を通り北へ進むと、三の丸内の武家屋敷が位置する大名町通りへと通じていた。



写真6 松本城見取り図に描かれた大手門枅形（松本市立博物館所蔵）

(2) 史料に記された大手門

水野氏時代に編纂された『信府統記』の中から、大手門枅形についての記述を抜き出してみる。

小笠原貞慶時代の城郭の整備では、「・・・三ノ曲輪繩張りシテ、壘ヲホリ土手ヲ築キ四方ニ五ヶ所ノ大城戸ヲ構へ、南門ヲ追手ト定メ、・・・」とあり、南門を大手と定めた。

石川氏時代には、「・・・父康昌の企てたる城普請を継ぎ、天守を建て、惣堀を浚え、幅を広くし、岸を高くして石垣を築き、渡り矢倉を造る・・・三の曲輪の大城戸五カ所共に門楼を造る・・・」とあり、この時に大手門台石垣や門が作られたものと考えられる。

松平直政時代の寛永10～15年（1633～1638）には、「此時天守並に門々修復あり・・・」とあり、いく

つかの門が対象となった中で、大手門も修理されたかもしれない。

(3) 明治期に破却された大手門

明治維新後の明治4年(1871)頃には、大手門の取り壊しが行われた。取り壊された後の様子は、『明治6年 筑摩県博覧会の錦絵』(1873・写真20)の中に、大手門跡として門が無く門台石垣のみが描かれている図に見て取れる。明治9年頃には、門台の石垣も取り壊され、その石が使われて大手橋が石橋となり、千歳橋と改名された。明治11年、四柱神社建設が許可となり、大手門枳形東側にあった総堀が払い下げられ、埋め立てられている。明治13年(1880)には四柱神社御幸橋に、大手門台の石垣が利用された。また、明治11年(1878)には、本町南端の緑橋の架け替えに際し、大手門台石垣が利用された。明治13年に描かれた『明治十三年六月御巡幸松本御通図』(写真21)の明治天皇行幸の錦絵では、門台石垣は無くなり、東に四柱神社、西に警察署・電信局・本願寺が建設されている。総堀もほとんど埋め戻され、わずかに四柱神社南側に残るだけとなっている。

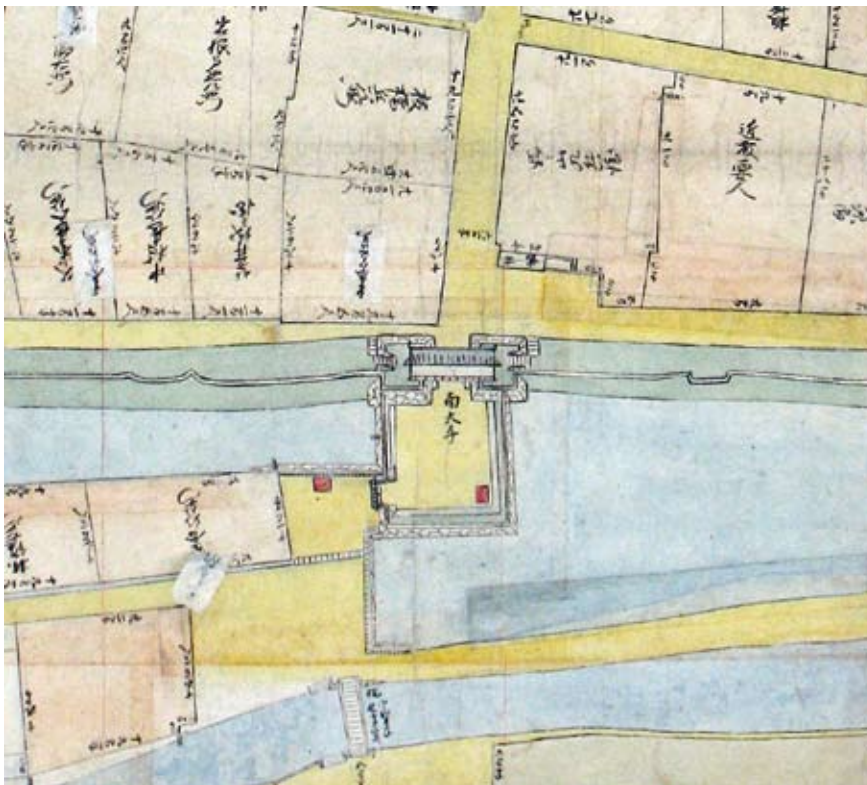
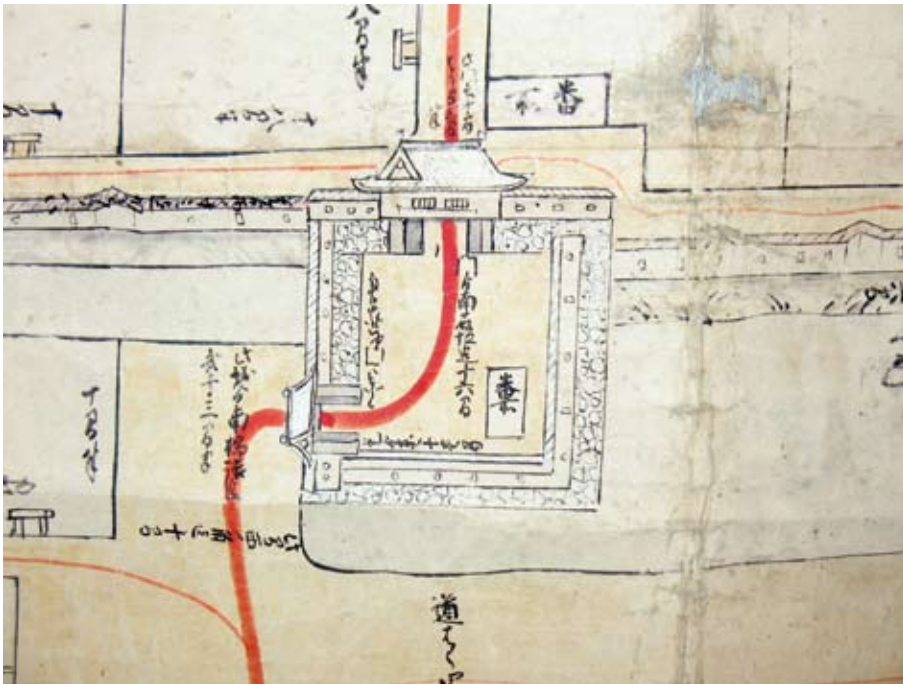


写真7 享保十三年秋改松本城下絵図(松本城管理事務所所蔵)

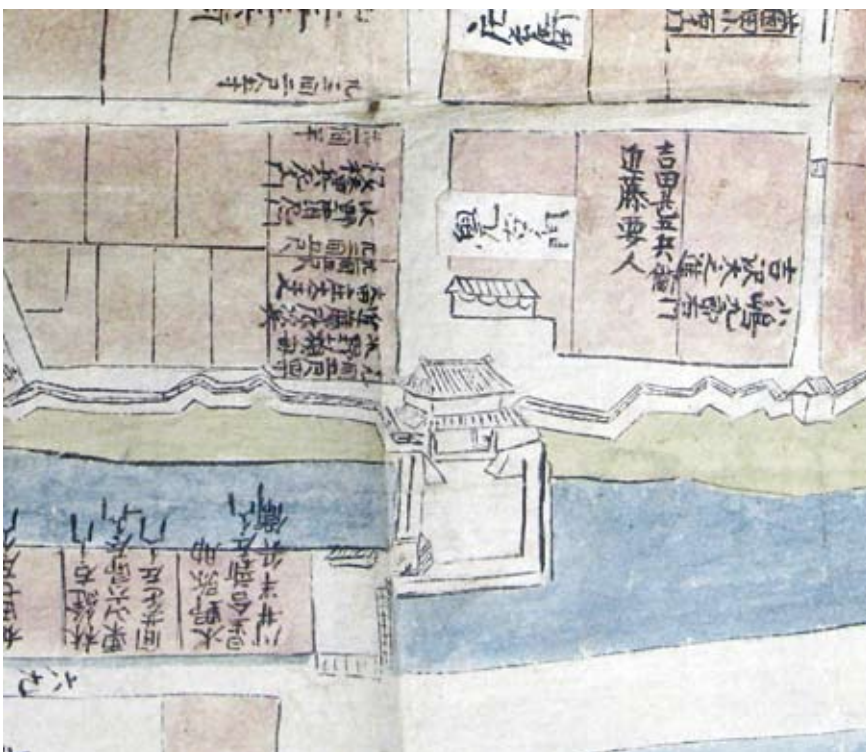
大手門枳形の周囲には石垣が積まれており、「南大手」と記載されている。大手門枳形の二の門は、薬医門のようである。

赤い印は番所で、枳形内に1か所、二の門西側に1か所見られる。



大手門が入母屋造りに描かれている。門より南石垣まで16間との記載があり、枳形内の南北が16間(29.12m)ほどであったことが推定できる。

写真8 水野氏時代松本城下図



大手門枳形内には番所が無く、二の門西側と大手門北側に番所のような表現がみられる。

写真9 享保年間松本城下町古図

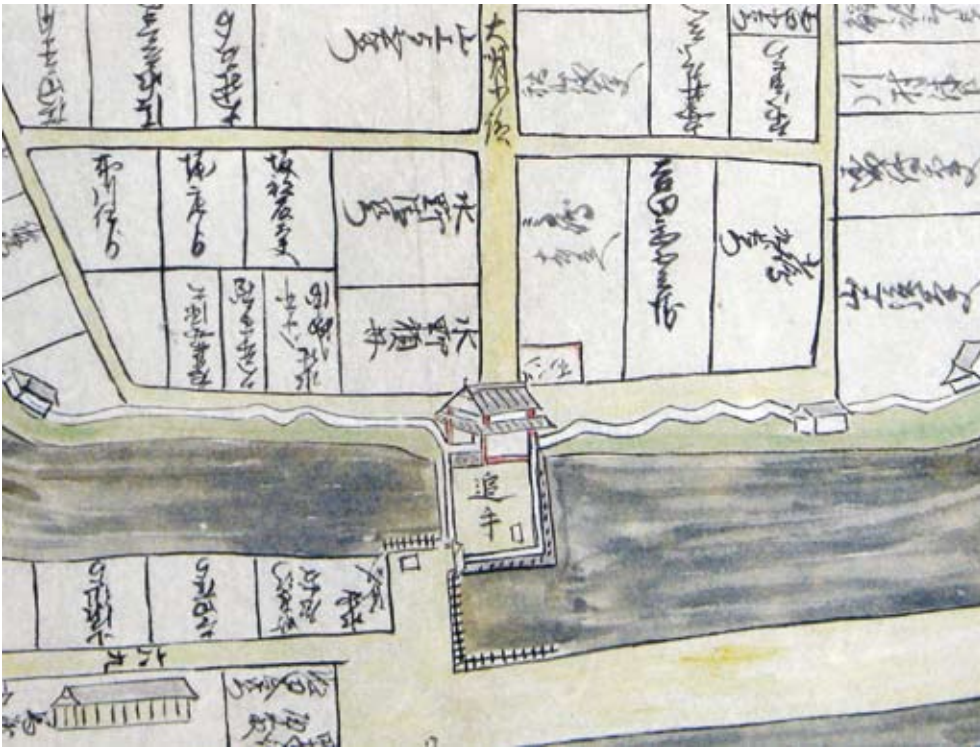


写真10 文化十二年信州松本図

外番所・内番所が描かれ、大手門枳形は「追手」と表記されている。



写真11 文化文政松本藩屋敷割図

※写真8～11は松本市立博物館所蔵

第2節 地形・地質

調査地は、松本盆地中央東寄りの松本城の南側約400mに位置している。標高は587～588mで南南西方向に緩く傾斜している。松本盆地は、南北に長い構造的な盆地で、西部と南部は飛騨山地で中・古生層とそれを貫く花崗岩や、その他の火成岩からなっている。これらの岩石は、主に梓川系により浸食され、大量の土砂が盆地の南半部を埋めている。さらに南から北流する奈良井川・鎖川などの河川による堆積物も加わり、広大な複合扇状地を形成している。いったん盆地が形成された後、洪積世後期後半頃から松本市街地周辺に局部的な地質変動に、松本盆地の東端の一部が沈降して湖沼化し、西側は逆に傾動しながら隆起し、城山山系を形成した。このため、古深志湖と呼ばれる湖沼化の進行に伴い、低地には四方から河川が流入し、それらの河川が形成した扇状地の扇端付近は、必然的に地下水位が高く、湧水が豊富にみられる。それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は、南西から南東へ流れを変え、洪積世末の第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層をのせて山地化し、隆起の進行とともに、右岸に三段の段丘面を形成しつつ市街地東部を流れるようになった。

こうしたことから調査地周辺の地下には、中・古生代の松本盆地形成期と洪積世後期の局部的構造盆地形成期の堆積物が、市街地のボーリング調査の結果からわかっている。地下40～50mより深いところには梓川水系を主とする中・古生代からの砂礫層が堆積しており、上部には局部的な盆地形成に伴う筑摩山系の土砂が女鳥羽川・薄川により堆積している。女鳥羽川系の堆積物にみられる岩石は、玢岩、砂岩、石英閃緑岩、第三紀層から出た粘板岩、チャートの小礫である。薄川系は、緑色火山岩類、安山岩、石英閃緑岩、砂岩、玢岩などがみられる。両者の堆積物の違いは、女鳥羽川系堆積物は玢岩が多く、安山岩は角閃安山岩とガラス質安山岩が含まれることと、薄川系堆積物には白っぽい石英閃緑岩がみられる点である。

松本城付近の堆積は、古深志湖の北から北東部分の堆積物であり、北からの女鳥羽川扇状地と東からの薄川扇状地の複合扇状地の堆積物である。女鳥羽川と薄川が形成した扇状地は東は湯川付近で接し、流路の首振りとともに、両者の堆積物が互層状か混成して堆積し、複合扇状地を形成していった。

現在の女鳥羽川は、中央3丁目付近で不自然に90°向きを変えているが、これは中世末頃に人為的に曲げられたものと考えられている。この無理な改修のため、市街地付近は度々洪水の被害を受けている。

大手門枡形跡の地形層より下層の現地地表下230～300cm以下が地山で、漆黒色粘土層・灰白色シルト層・砂礫層などが互層的に堆積しているのが観察された。そこには、古深志湖の沼沢地に扇端を形成しながら堆積する流路が首振りをしながら、近ければ砂礫、遠ければ漆黒色粘土の堆積を繰り返してきたものと考えられる。築城前の地山には、アシなどの植物質が混ざっており、起伏のある微高地に、アシなどが生えていた場所であったとみられる。



写真12
調査地トレンチ1の地山土層

第Ⅲ章 調査結果

第1節 地中レーダー探査による事前調査

1 目的

発掘調査を実施する前に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室）により、地中レーダーおよび電気探査を実施し、松本城大手門枳形跡の遺構の残存状況や位置・深さ・分布などの把握を行った。調査は、平成22年12月13日～12月15日に実施した。

2 探査の方法

今回の調査は、地中レーダー探査（GPR探査）と電気探査を実施した。遺跡の探査には、複数の方法があるが、今回の調査地は現地に市街地の建物が建っていることや、石垣・堀という大形の遺構の把握が中心ということから、この方法が選択された。

機器は、地中レーダーがSIR-3000（アメリカGSSI社）、アンテナは中心周波数70および200MHzのものが使用された。電気探査はRM-15（イギリス Geoscan社）と、桜小路電気製リレー式電極切り替え機を用いた。調査地は、建物内が花崗岩およびリノリウム、外部はアスファルトとコンクリートの部分があり、通常使用しているステンレス製の電極の打設が困難であるため、応用地質（株）製のジオゲル電極を使用し取得した。取得したデータの解析は、GPR-Sliceおよび桜小路電機製ソフトウェアを用いた。

3 調査区の設定

調査は、A～C区の3か所を設定して実施した。

A地区は、旧武富士ビル建物内部である。建物内部で探査が実施されることは極めて少ないが、今回は探査対象物が大形であるため実施することとし11×11mを実施範囲とした。しかし建物内部は、ノイズ源や建物構造物が存在することは確実であり、条件としては極めて悪い。

B地区は、旧武富士ビルの北側道路および駐車場部分である。この部分は、アスファルト及びコンクリート舗装があり、また水道管や電線などノイズ源が多いため、条件は極めて悪い。

C地区はビル西側の四柱神社園路部分である。この部分は、A・B区の比較対照と堀の探査として実施した。地下レーダー探査の測線距離は1654m、測線間隔は200MHzアンテナ0.5m、70MHzアンテナ1mである。



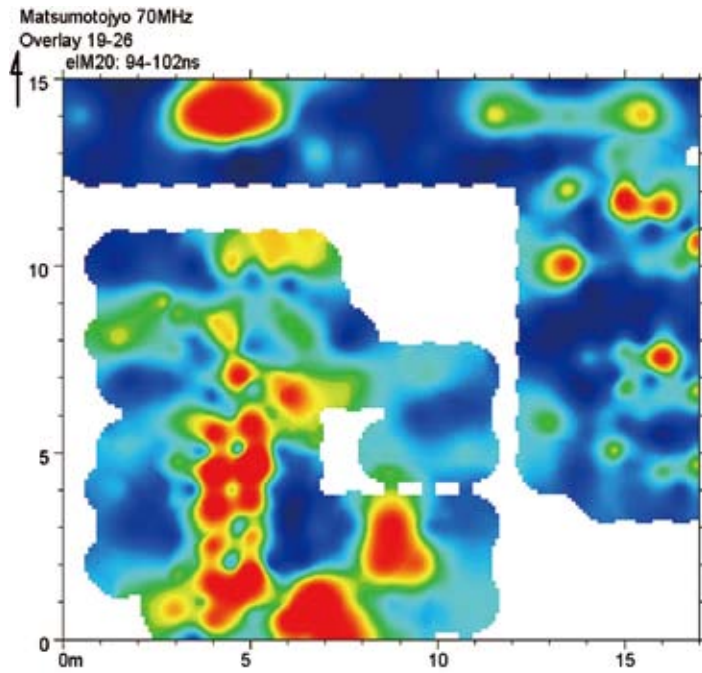
写真13

A地区（旧武富士ビル建物内部）
地下レーダー探査実施の様子
（H22年12月14日撮影）

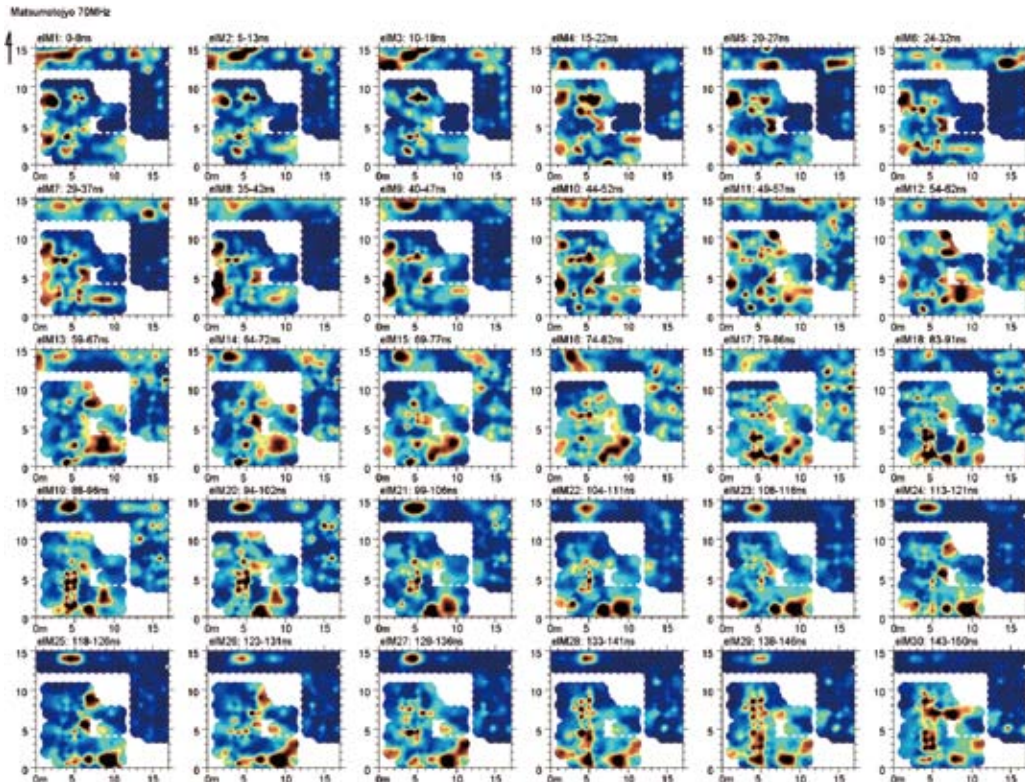
4 探査結果

電気探査はA地区で試みたが抵抗値を記録することが十分ではなく、継続を断念した。

地下レーダー探査では、200MHzの成果で、やや深い部分79ns（想定値約2.4m以下）のX（横軸）= 5m付近に存在する南北方向の線状の反射が石垣などビル以外の構造物である可能性が指摘された。70MHzの成果においても同様の反射が確認されており、浅い部分にこれに関連する反射をみる事ができないため、やはり下部に何らかの構造物がある可能性が指摘された。



第3図
A・B地区 70MHz アンテナによる成果平面図（部分）



第4図 A・B地区70MHz アンテナによる成果平面図

第2節 発掘調査の方法

1 調査の目的と方法

(1) 調査区の設定とトレンチの配置

本調査は松本城大手門枡形跡の保存を前提とした発掘調査である。従って、調査に際しては大手門枡形の残存状況や構造を確認することを目的として、トレンチにより最小限の範囲で調査を実施することにした。

トレンチは、地下レーダー探査の結果や、絵図（『享保十三年秋改松本城下絵図』）と現在の都市計画図との重ね合わせから、大手門枡形石垣の位置を推定し、それに直交するように東西方向に、2本設定した。トレンチ1・2はそれぞれ調査区の北端と中央に設定し、石垣と総堀の検出を予想した。さらに石垣の残存状況を把握するために、トレンチ1・2の間に南北に延びるトレンチ3を追加した。また、トレンチ1の西端に石列を検出したため、その石列の続きを確認するために、トレンチ4を設定した。南区では、西半が旧商業建物により、遺構が破壊されていることが予想されたため、東半を面的に掘り下げ、トレンチ5とともに攪乱と石垣の残存状況を確認した。

(2) 調査の手順

調査はまず、重機を用いて、客土（厚さ120～150cm）を除去し、明治21年の大火で形成されたと考えられる焼土層を検出し、ここを調査開始面としてトレンチを設定し、以後人力作業によって層位的な掘り下げを行った。トレンチ1の東側では、総堀の底を確認するために掘り下げた。その際、深くなるため犬走りを設け、また、壁面崩落を防ぐ土止めを施した。その結果、堀底の基盤は水生植物を多く含む湿地性の自然堆積層であることがわかった。

調査で出土した遺物については、近世・近代の時期差にかかわらず、極力出土地点を記録して取り上げた。また、調査区北東に測量用基準点を設定した後、調査区全域を覆う3mメッシュを設けた。遺構図・遺物出土図の測量は簡易遣り方測量で行い、基本的に1/20で作成した。

調査終了後は遺構保護の目的のため、トレンチは砂で埋め戻し、さらに遺構検出面全体を10cm程度砂で被覆し、その上に発生土を戻した。

2 調査の概要

遺跡名	松本城大手門枡形跡
所在地	松本市大手3丁目67-ニ-2、67-10、67-11、77-12、77-14
調査期間	平成24年7月30日～12月28日
調査面積	215.5㎡
検出遺構	大手門枡形東辺部分：石垣、整地土、石列、総堀
出土遺物	

近世～近代：土器・陶磁器、瓦（水野・戸田家紋瓦ほか）、金属製品（小柄、釘ほか）、石製品（硯、砥石ほか）、木製品（漆器、建築材ほか）、植物繊維製品（草鞋か）

第3節 遺構

1 概要

大手門枡形跡の残存状況や位置・構造を確認するため、トレンチ1～4及び南区トレンチを設定し、調査を行った。この結果、大手門枡形の東端を区画する石垣と石列、および総堀跡が確認できた。以下、発見された各遺構について記述する。

2 石垣

トレンチ1・3と南区において、調査区中央部分に南北19mにわたって直線的に通る石垣列が発見された。石垣は、現地表下1.2～1.5mにおいて、築石2段と基底部の根石1段の計3段が確認された。地表面から石垣検出面までの間は、近代以降の攪乱層である。発見された石垣残存高は、最大1.7mを測る。この石垣列は、東側に石垣面、西側に石尻が向く。築石の幅は0.5～1mで、石垣小口から石尻までの控え長は比較的短く、50～70cm程度のものが多い。それぞれの築石には矢穴が全く見られず、自然石を活かして積む野面積の手法が用いられている。

築石と築石の間には、間詰石として割石が詰められていた。石垣の裏込めは、幅1.2～1.5mの範囲に拳大の礫が入れられており、そのほとんどが荒く割られた割石である。トレンチ3の東端では、根石の下に胴木が敷かれているのが確認され、根石の下部には破碎されていない拳大の円礫が詰められていた。この礫は、石垣裏込めの破碎された礫とは形状が異なり、根石下部のグリ石と考えられる。

石垣から東側部分では、総堀の掘り方とそこに堆積した埋土が観察された。築石小口面から東側1.2～1.5mの範囲には、瓦や木製建築材などの遺物が集中して出土した。特に瓦が多く、約500点の出土点数があった。これらの瓦は、すべて本瓦葺で棧瓦は出土していない。この遺物集中箇所出土層位をみると、上層に瓦・建築材が集中する遺物包含層があり、その下層に破碎された礫層、その下部に再び遺物包含層がみられた。瓦は、おそらく大手門枡形の門や土塀の屋根に載せられていたものとみられ、破碎礫は石垣の裏込めに使用されていたものに類似している。このことから、この遺物集中地点で出土したものは、明治期に大手門枡形の門や土塀などが破却された際に投棄されたものと考えられる。

南区においても石垣が直線的に伸びているのが確認された。ただし、南区南端部分では旧・商業ビルの基礎が入れられた影響で石垣が消失していた。南区北端部から1.4m部分の築石は、他と比べて比較的小形のものが多く、築石の規模と形状が異なる。また、この小形の築石部分には杭が2本打たれていた。1本は南側の大形の築石全面部分、もう1本は小形から大形に形状が変わる部分である。このことから、小形の築石部分には、改修が施されている可能性が考えられる。

今回の調査で確認された石垣列は、絵図との照合から大手門枡形の東縁を区画する石垣とみられる。絵図から推定すると、総堀から石垣が積まれ、石垣上面には土塀が構築されていたものと考えられるが、明治期の破却により築石2段と根石1段が残るのみで、大半が失われている。

調査の所見から、石垣の構造については次のように考えられる。胴木の上に根石を置き、その下部は根固め用のグリ石（円礫）で充填している。根石の上には築石を積み、築石の石間には破碎された礫を用いた間詰石が入れられていた。また築石の背面には、破碎礫を用いた裏込めが詰められていた。

なお、石垣を構築する築石や間詰石の石材は、玢岩（閃緑斑岩）系が主体で、この材質は天守や太鼓門の石垣とも類似している。また裏込石として用いられた礫は、安山岩・緑色凝灰岩・玢岩などがみられ、こうした石材は付近を流れる女鳥羽川や薄川に多くみられるものである。

3 石列

トレンチ1の西端とトレンチ4において石列が確認された。トレンチ1では、南北2mの間に3個の築石、

トレンチ4では1mの間に2個の築石が検出された。両箇所ともに発見された築石は1段のみである。築石小口面を西側、石尻は東側を向く。両トレンチで確認された築石は、東側で確認された石垣列と平行し、直線状に並ぶ。この石列には、築石小口から50～60cmほどの幅で、裏込め石が詰められていた。石列を確認した2か所では、築石下部に胴木などは検出されておらず、人為的整地土（地形層）の上に掘り方が掘られ、10～15cm大の円礫を根固め用のグリ石に用い、築石を設置していた。

石垣と石列が並行して通り、両方の遺構の間に裏込めがあることや絵図との照合などから、これらの遺構は大手門枡形土塀の基礎を構築するものと考えられる。調査で確認した石垣列と石列の間隔は、残存部分で幅5.5m（約3間）を測る。ただし、石列裏込めから18世紀代に比定される陶器が出土しており、この時期以降に改修された可能性も考えられる。

4 総堀

トレンチ1の石垣築石前面から東側において、総堀の落ち込みが確認できた。堀の埋め土と考えられる土層を除去し、漆黒色粘土層・灰白色シルト層・砂礫層などが互層的に堆積する地山面を掘り込んだ掘り方が確認された。堀底面の状況は、石垣小口面から1.2m程の範囲では、ほぼ平坦に掘り方を削平しているが、そこから東側では、傾斜角15°程の落ち込みが確認された。

<参考文献>

松本城管理事務所 2011 「資料 松本城 大手門枡形の歴史の変遷」

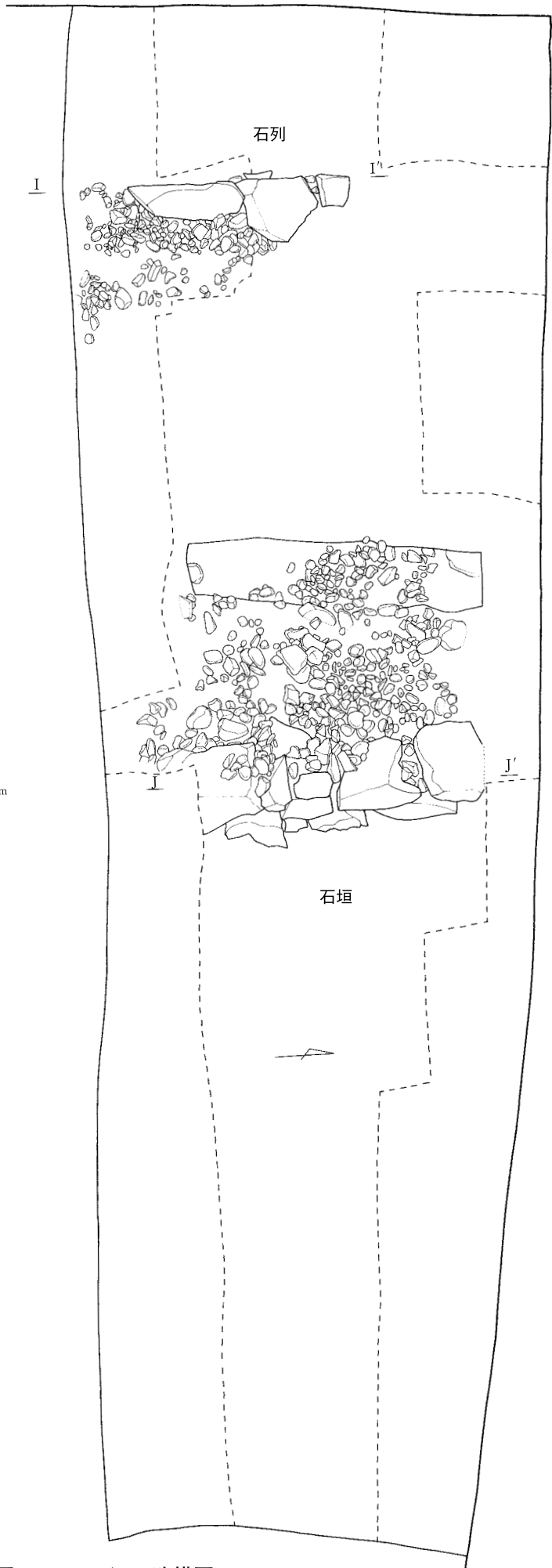
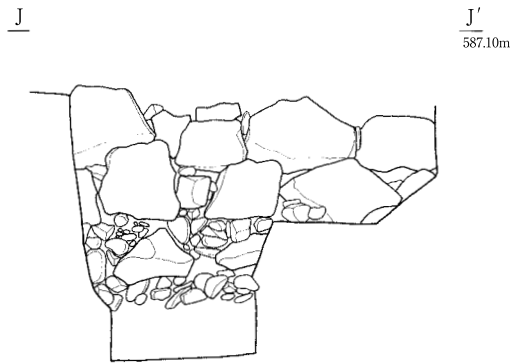
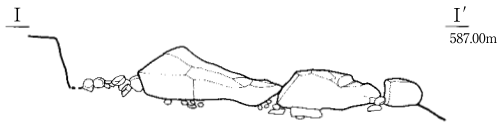


写真14
調査区の配置



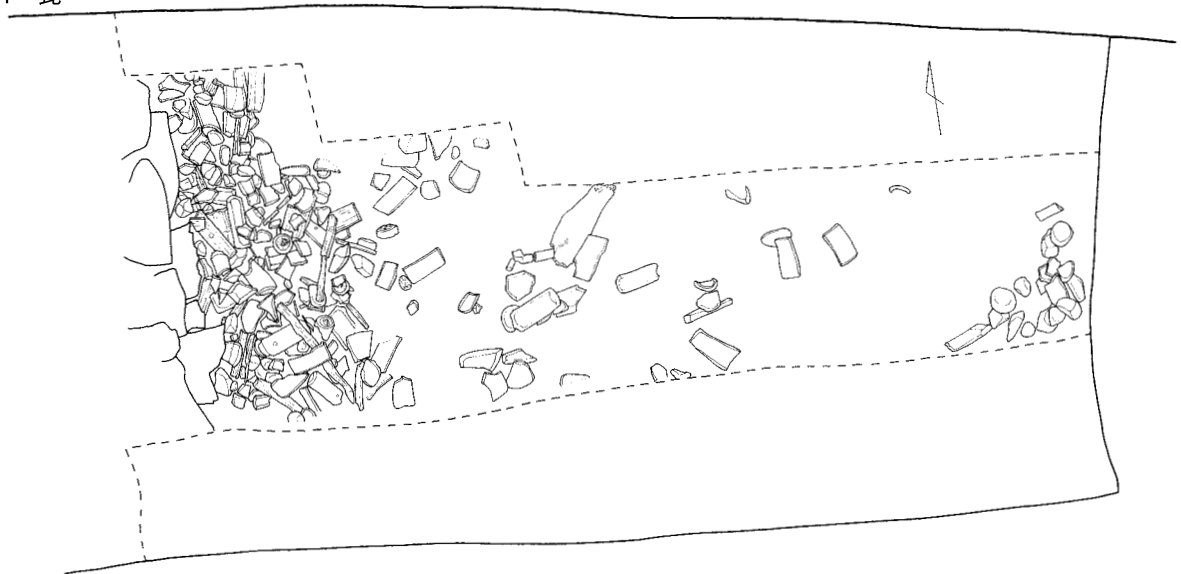
第5図 遺構全体図

トレンチ1 石垣・石列

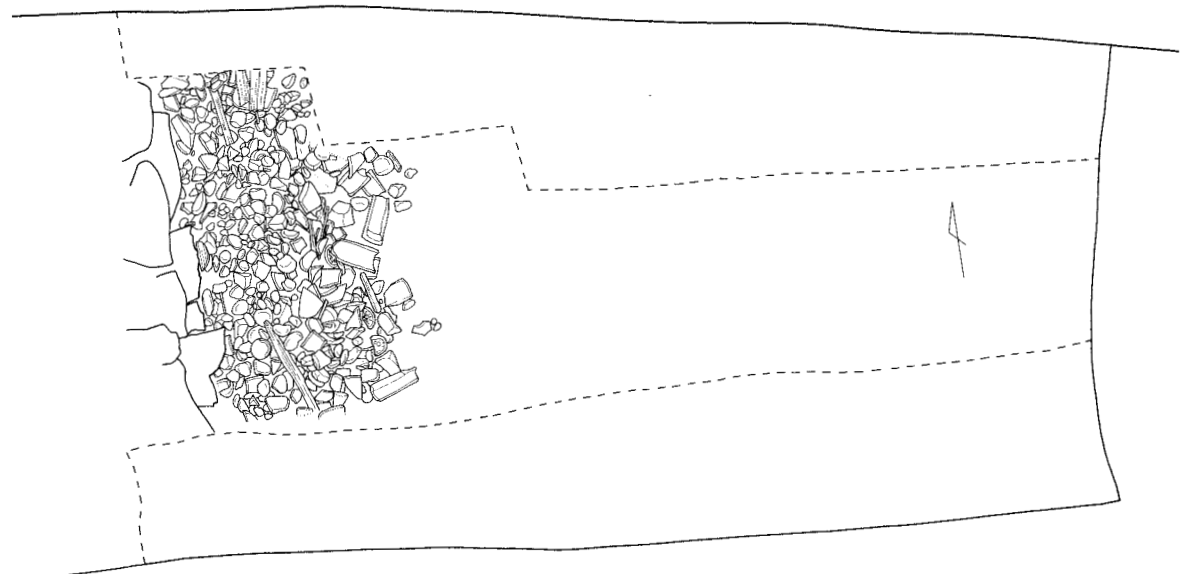


第6図 トレンチ1 遺構図

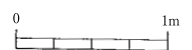
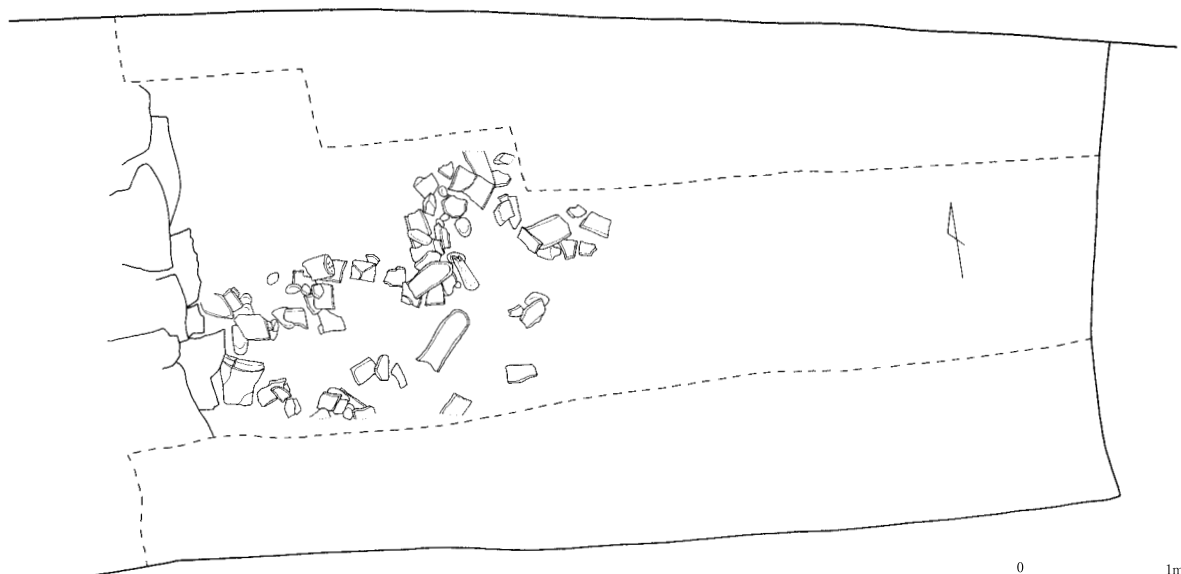
トレンチ1 瓦



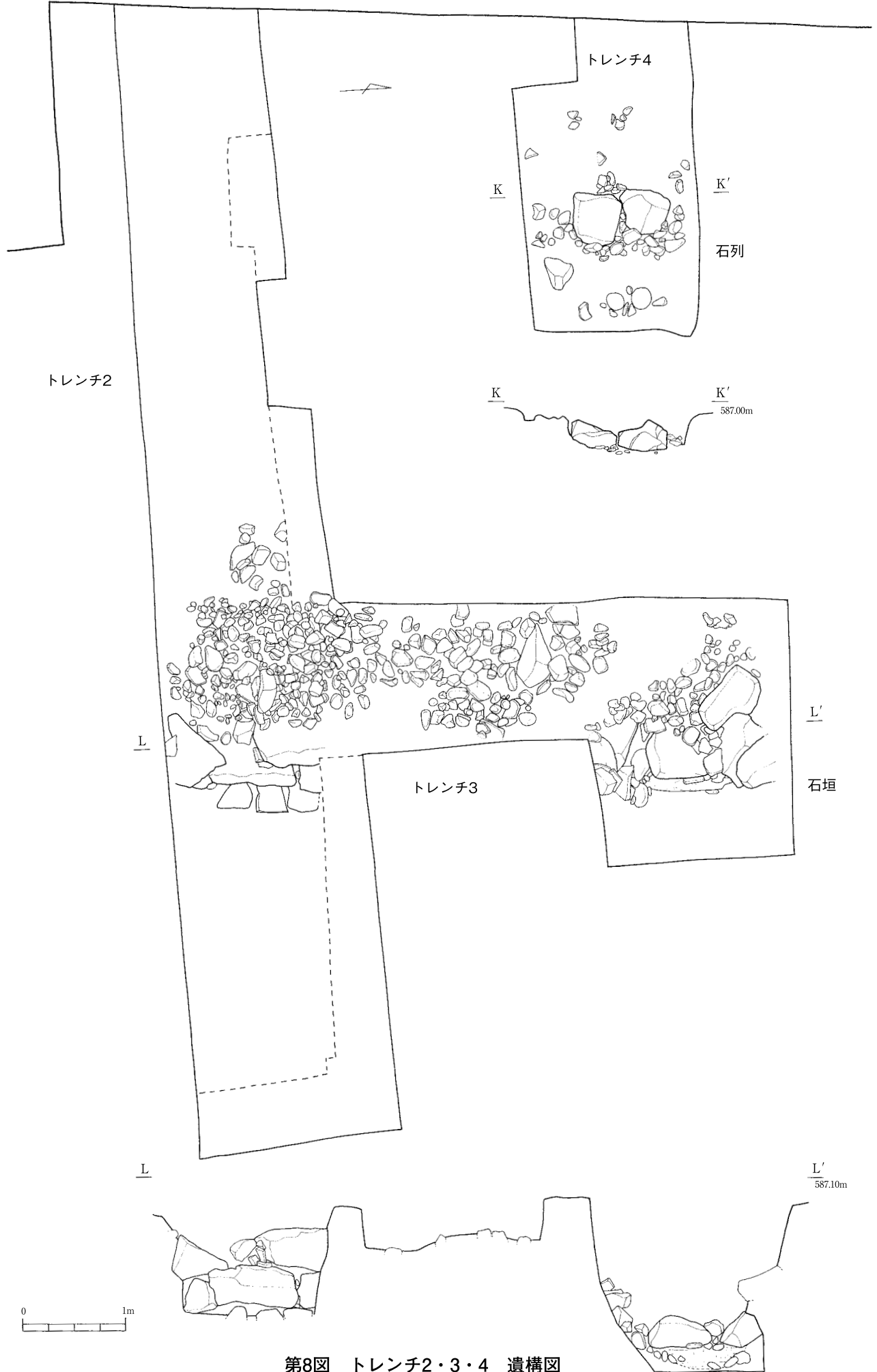
トレンチ1 根固め



トレンチ1 根固め下層

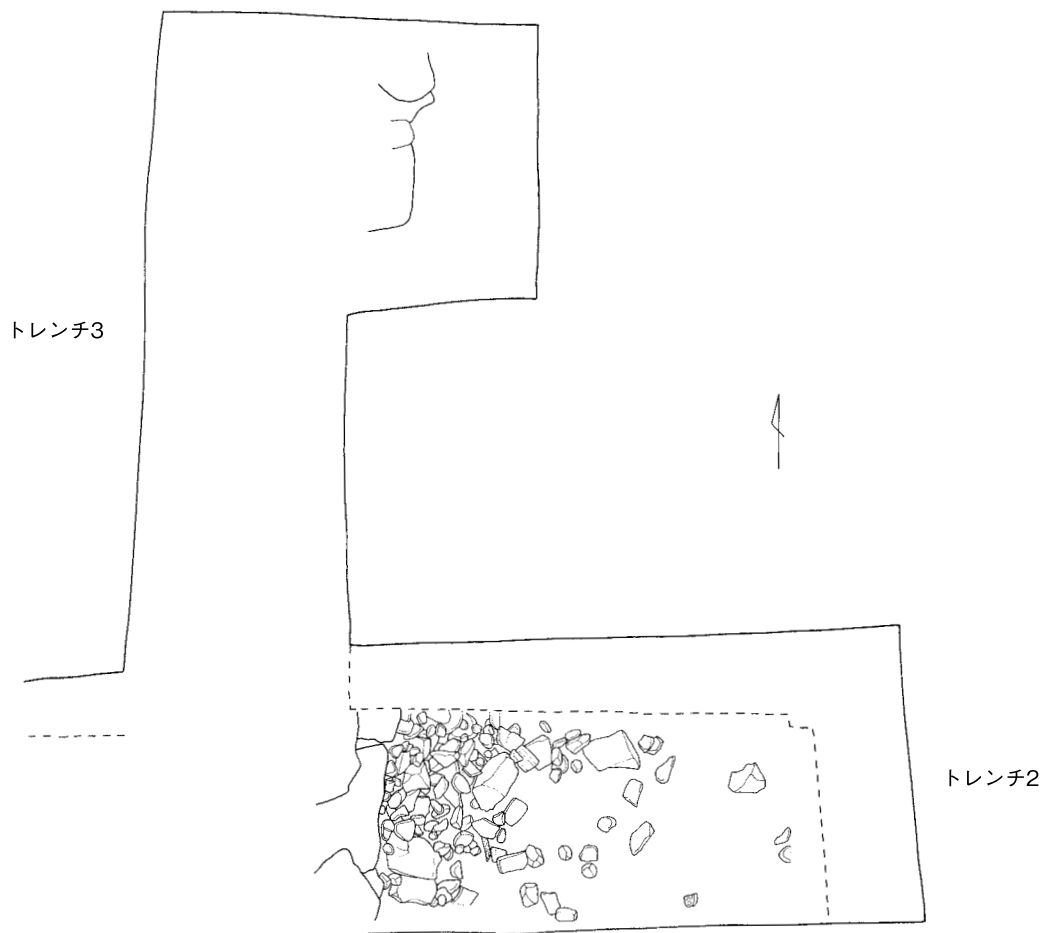


第7図 トレンチ1 出土図



第8図 トレンチ2・3・4 遺構図

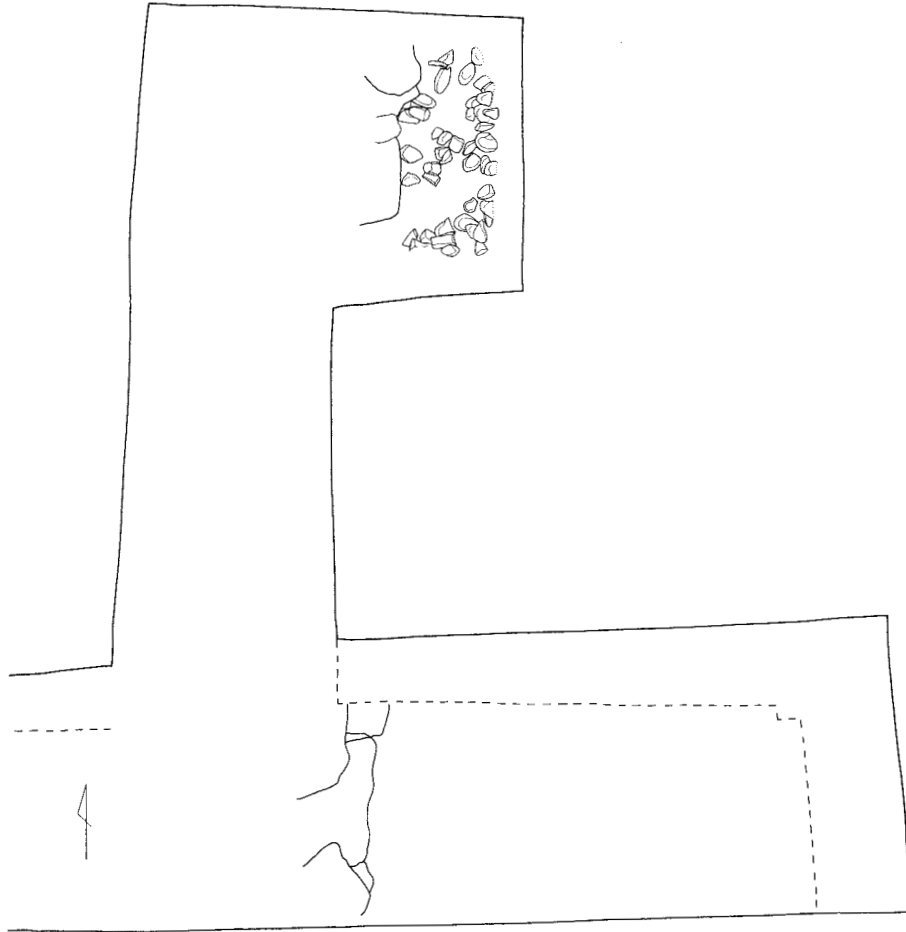
トレンチ2 割石



トレンチ2・3 根固め



第9図 トレンチ2・3 出土図



第10図 トレンチ3 出土図

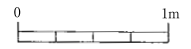


写真15
T2 瓦出土状況

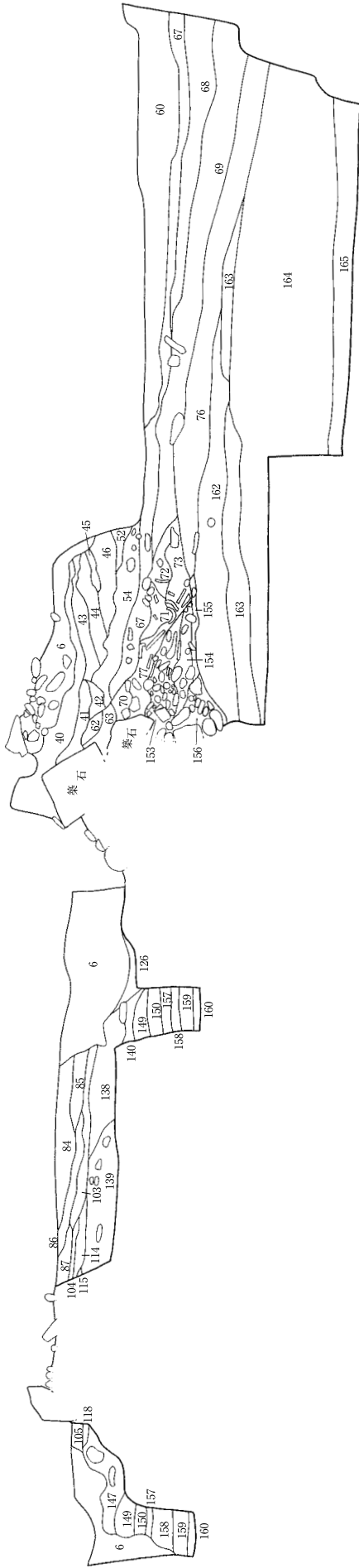


写真16
T2 瓦出土状況
(北から)

トレンチ1

A

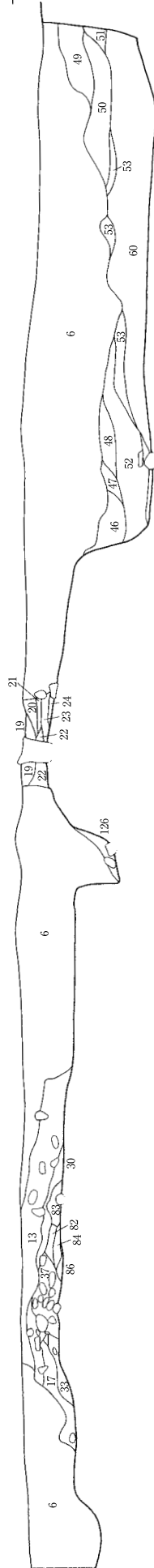
A' / 587.10m



トレンチ1

B

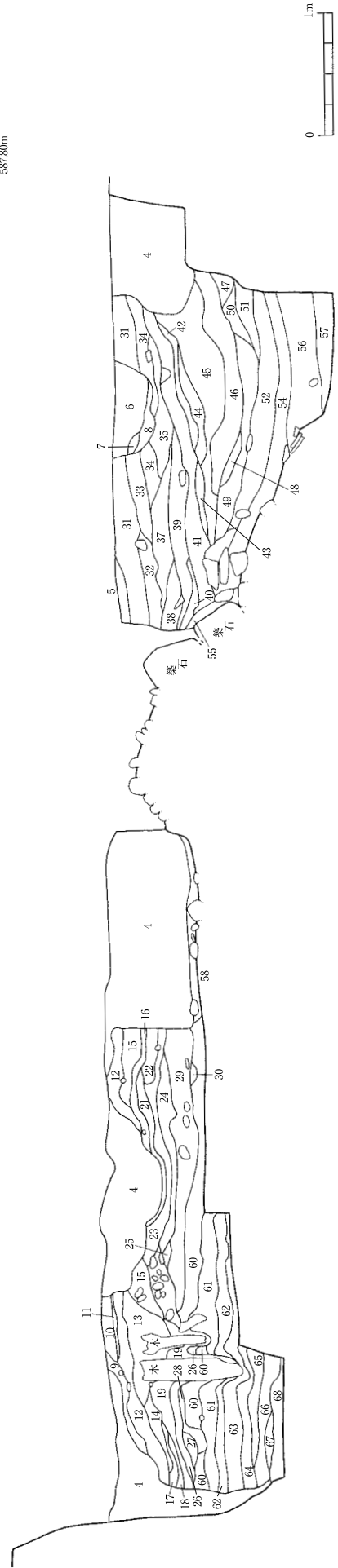
B' / 587.00m



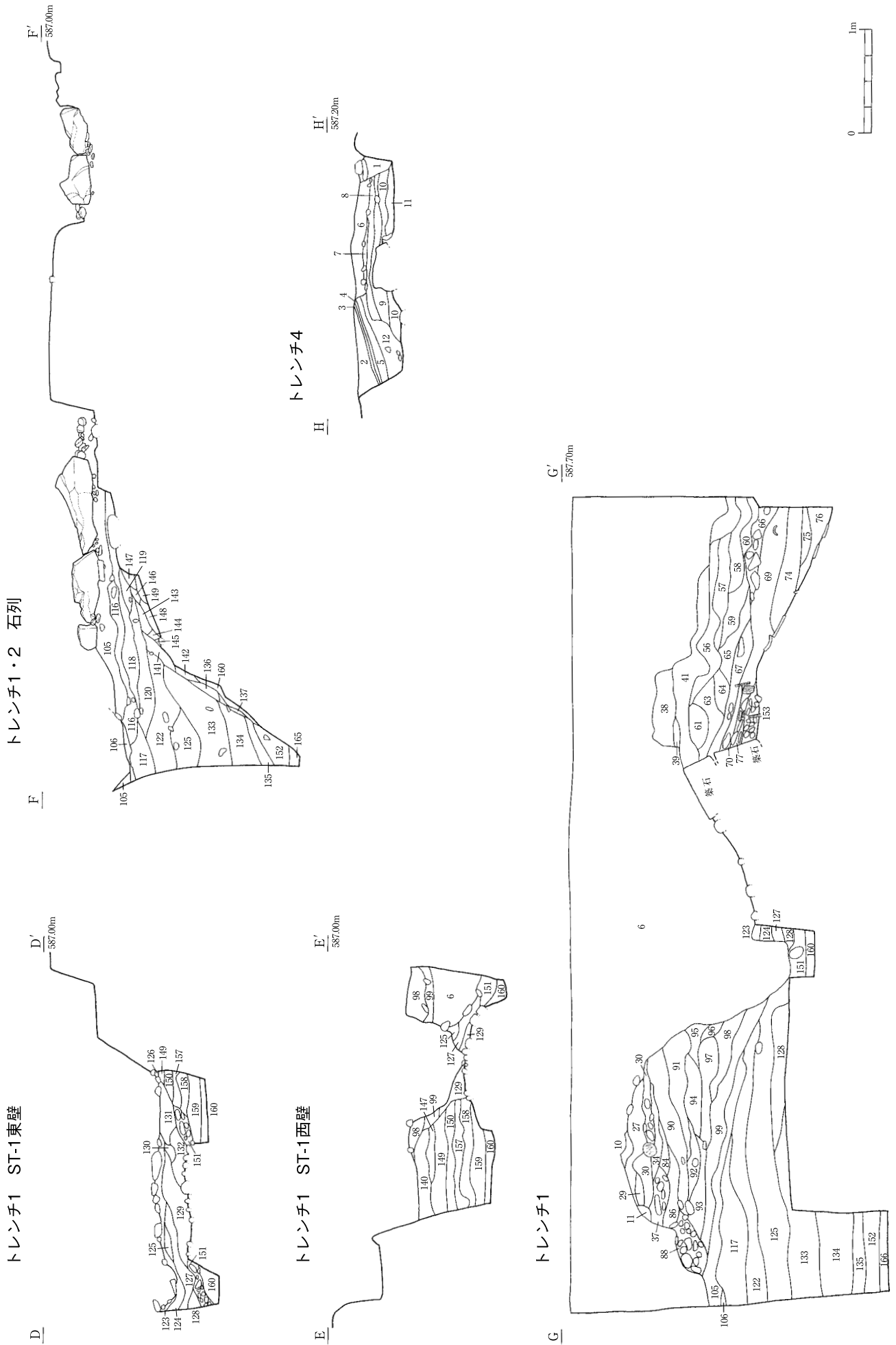
トレンチ2

C

C' / 587.80m



第11図 トレンチ1・2 土層断面図



第12図 トレンチ1・2・4 土層断面図

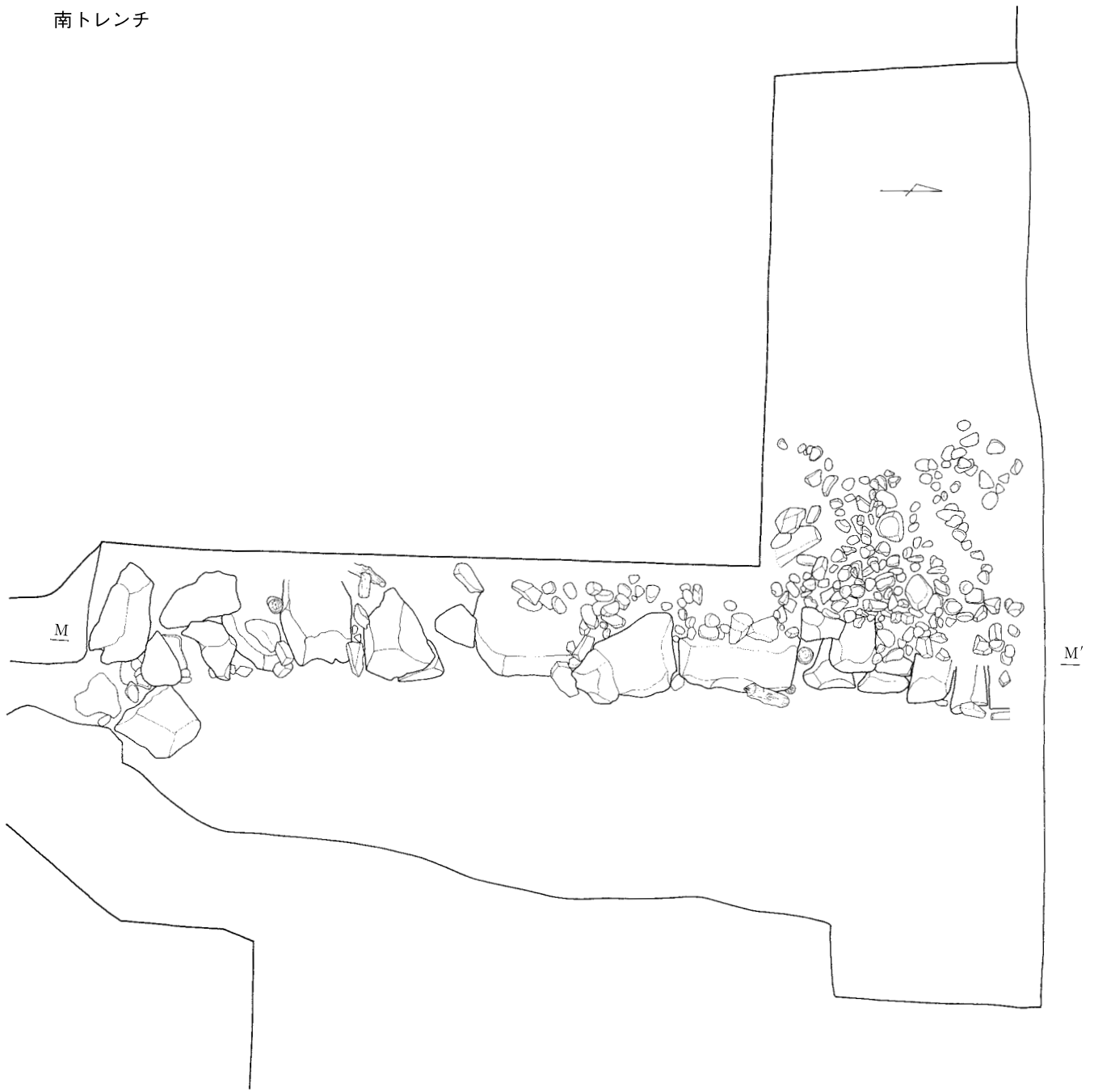
第1表 土層一覧

土層No.	土色	含有物
トレンチ1		
1		
2		
3	欠番	欠番
4		
5		
6	25Y3/2	解体時攪乱、コンクリート多量
7	5Y2.5/1	シルト(粘性やや強い)、砂混入多い、暗オリーブ褐色シルト塊(小)3%、黒褐色粘質土塊(小)5%、～3cm大礫2%
8	5Y3/1	シルト(粘性やや強い)、暗オリーブ褐色シルト塊(極小)3%、黒褐色粘質土塊(小)2%、灰オリーブ色シルト塊(小)2%
9	5Y2.5/1	シルト(粘性やや強い)、砂混入多い、暗オリーブ褐色シルト塊(極小)2%、黒褐色粘質土塊(小)1%、灰オリーブ色シルト塊(小)2%、焼土粒(極小)1%
10	5Y4.5/1	黒褐色土塊、灰色土塊
11	5Y4/1	黒褐色土塊
12	欠番	欠番
13	7.5Y4/1.5	
14	5Y4/2	
15	5Y4/3	
16	5Y5/2	
17	5Y3/1	
18	5Y4/3	
19	5Y3/1	弱粘、～5cm大礫3%、黒色粘土粒(大)5%、明黄褐色シルト粒(大)15%
20	2.5Y4/1	弱粘、～1cm大礫3%、炭化物粒(中)2%
21	5Y5/4	砂質土、～1cm大礫5%
22	5Y3.5/1	弱粘、灰白色シルト粒(大)15%
23	5Y3/1	弱粘、明黄褐色シルト粒(大)20%
24	5Y3/1	～5cm大礫混入、灰白色シルト粒(小)10%
25	10YR2.5/2	シルト(弱粘)、粗砂30%
26	10YR4/3	シルト(弱粘)、焼土塊(大)30%、炭化物1%、～20cm大礫混入、グリ石が入る層
27	10YR3/2	シルト(弱粘)、焼土塊(小)5%、炭化物(小)1%、粗砂30%、～20cm大礫混入、グリ石が入る層
28	10YR3.5/2	
29	10YR5/1	
30	2.5Y4/3	粗砂、～2cm大礫10%
31	5Y3/2	粘質土、黒色土塊(中～大)20%、灰オリーブ色土塊(小)10%、～10cm礫混入、グリ石が入る層
32		
33	欠番	欠番
34	7.5Y2.5/1	粘質土、～10cm大礫30%
35	5Y2/1	シルト(粘性)、暗オリーブ褐色土塊(小)3%、黄褐色土塊(極小)1%、～1cm大礫3%
36	5Y3/2	粘質土、黒色土塊(中～大)20%、灰オリーブ色土塊(小)10%、～10cm礫混入、グリ石が入る層
37	2.5Y5/1	
38	5Y4.5/1	黒褐色土塊、褐色土塊
39	5Y4/1	
40	7.5Y3/2	シルト(弱粘)、～1cm大礫2%、黒色・灰白色土粒(中～大)25%(瓦片混じる)、砂多量
41	7.5Y3/1.5	シルト(弱粘)、～2cm大礫1%、黒色・灰白色土粒(大～極大)25%、砂多量
42	2.5Y2.5/1	シルト(弱粘)、黒色・灰白色土粒(中)7%
43	2.5Y3/1	シルト(弱粘)、～2cm大礫2%、黄色砂粒(小)3%、黒褐・灰白色シルト粒(大～極大)10%
44	5Y2/2	砂質土(粗砂)、黄色粗砂、～0.5mm大砂利非常に多い、～3cm大礫5%、黒褐・灰オリーブ色シルト粒10%
45	5Y2.5/2	シルト(弱粘)、黄色粗砂少量、黒褐・灰オリーブ色シルト粒(極大)50%
46	5Y3/1.5	シルト(弱粘)、黒褐・灰オリーブ色粘土塊(大～極大)20%、～5cm大礫5%
47	2.5Y2.5/1	シルト、黒色植物質5%、灰オリーブ色粘土粒(大)3%
48	5Y3/1.5	シルト、砂粒15%、～1cm大礫2%
49	2.5GY4/1	シルト、～5cm大礫15%、砂質土層
50	2.5GY3.5/1	砂礫層、～4cm大礫15%、～10cm大礫も混じる、中砂多量
51	N3.5/1	粘質土、黒褐・灰色粘土粒(小)10%、黄褐色砂粒(小)5%、～10cm大礫混入
52	2.5Y3/1	シルト(弱粘)、黒褐・灰オリーブ粘土塊(大)30%、黄色粗砂5%
53	5Y2/2	シルト(弱粘)、～3cm大礫3%、暗青灰いろ粘土粒(小)2%
54	5Y2.5/1	粘土、黒褐・灰オリーブ・暗青灰粘土塊(極大)50%、暗褐植物痕塊(極大)2%、黄色粗砂塊(極大)10%、～5cm大礫5%
55	7.5Y4.5/1	灰色土塊
56	7.5Y3.5/1.5	灰色土粒、黒褐色土粒
57	7.5Y5/1	黒褐色土塊、灰オリーブ土塊、灰色土塊
58	5Y5.5/1	黒褐色土塊
59	7.5Y5/1	黒褐色土塊、灰色土塊、淡オリーブ土塊
60	2.5GY3/1	砂礫層、～3cm大礫・中砂、～5cm大礫も混じる
61	7.5Y4/1	小礫、灰色土粒
62	7.5Y2.5/1	粘土、黒色(植物)粒3%、黒色粘土塊(極大)30%
63	5Y2/1	シルト(弱粘)、黒褐・灰オリーブ・暗青灰粘土塊15%、灰白色砂粒(小)10%
64	7.5Y5/1	灰色土粒
65	N6/0	黒褐色土塊、淡灰色土塊
66	5Y5/1	黒褐色土粒、淡灰色土粒
67	2.5Y3/1	粘質土(弱粘)、掘った直後は暗オリーブ色、鉄分多量沈着、～10cm大礫5%、炭化物粒1%、混じり少ない層
68	5Y5.5/1	
69	5Y2.5/2	粘質土(弱粘)やや目が粗い、黄褐・灰オリーブ色細砂塊(大)30%、炭化物粒(極小)1%、鉄分粒3%、漆喰片3%
70	5Y3/1	粘質土(弱粘)鉄分粒50%沈着、木質混入
71	5Y3/1.5	粘質土(弱粘)やや目が粗い、漆喰片5%、木質・瓦片混入
72	5Y3/2	粘質土(弱粘)やや目が粗い、灰オリーブ色粘土粒(大)5%、～5cm大礫2%、炭化物粒(極小)1%
73	2.5Y2.5/1	粘質土(弱粘)灰オリーブ色細砂、シルト、細砂塊(大)3%、木杭混入
74	5Y4/1	灰オリーブ土塊、黒褐色土塊
75	7.5Y6/1	黒褐色土塊、淡灰色土塊
76	5Y3/1.5	粘質土(弱粘)砂混入やや多い、木質(小枝?)1%
77	5Y3/2	粘質土(弱粘)砂混入少ない、瓦面を覆う層
78	10Y3/1	シルト(弱粘)、～6cm大礫上下に集中15%、黒色粘土、灰・黄褐色シルト粒(小)10%
79	5Y2/1	シルト(やや粘質)、～3cm大礫7%、灰オリーブ色粘土粒(大)10%
80	7.5Y3/1	シルト(やや粘質・砂多い)、～5cm大礫7%、～1cm大砂礫多量混入層
81	7.5Y2/1	シルト(粘質)、～3cm大礫10%、灰オリーブ色粘土粒(大)5%
82	7.5Y4.5/1.5	
83	7.5Y4.5/1	
84	5Y5/1	
85	5Y4/1	
86	5Y5/1.5	
87	5Y4/1	黒褐色土塊、灰色土塊
88	2.5Y5/1.5	

土層 No.	土 色	含 有 物
89	7.5Y2/1	粘質土、～5cm大礫50%、石列グリ
90	N4/0	灰オリーブ土塊、淡灰色土塊、黒褐色土塊
91	7.5Y4/1	小礫、暗灰色土塊、灰オリーブ土塊
92	7.5Y4/1.5	淡灰色土塊、黒褐色土塊
93	7.5Y5/1	淡灰色土塊、黒褐色土塊、灰オリーブ土塊
94	N5/0	黒褐色土粒、淡灰色土粒
95	5Y5/1	灰色土塊
96	5Y4/1	淡灰色土塊
97	5Y5/1.5	暗灰色土塊、淡灰色土塊
98	7.5Y5/2	小礫、暗灰色土塊
99	7.5Y5/1.5	黒褐色土塊
100	10YR1.7/1	粘土
101	7.5Y2/1	粘質土、～2cm大礫2%
102	7.5Y3/1	シルト(粘質)、～5cm大礫7%、灰オリーブ砂塊2%、黒色粘土粒(小)、黄褐色シルト粒(小)10%
103	5Y3/1	灰色土塊
104	7.5Y3/1	
105	7.5Y4/1	黒褐色土塊、灰色土塊
106	7.5Y4.5/1	黒褐色土塊、淡灰色土塊、灰オリーブ土塊
107	10Y2.5/1	シルト(弱粘)、黒色粘土粒(小)、黄褐色砂粒(極小)3%
108	10YR1.7/1	粘土、～5cm大礫下層に多い、灰オリーブ色粘土粒(大)7%
109	10YR2/1	粘土、灰オリーブ色粘土粒(小)15%、土器片含む
110	2.5Y2.5/1	粘土、黒・オリーブ灰(青)色粘土粒(大)10%
111	7.5Y4/2	中砂
112	10YR1.7/1	粘土、暗オリーブ色粘土粒(中)2%、暗オリーブ色砂粒(大)1%、比較的混入物少ない
113	7.5Y3/1	粘土、黒色粘土粒(小)5%、灰オリーブ色粘土粒(中)7%
114	7.5Y4.5/1	黒褐色土粒、灰色土粒
115	7.5Y3/1	
116	7.5Y4/1	
117	7.5Y3.5/1	黒褐色土塊、灰色土塊
118	7.5Y3/1	
119	7.5Y5/2	
120	7.5Y4/1	
121	7.5Y4.5/1	
122	N4.5/0	黒褐色土塊、灰色土塊
123	7.5Y3/1	
124	5Y3/1	灰色土塊
125	7.5Y5/1	
126	7.5Y4/1	
127	7.5Y6/1	
128	5Y3.5/1	
129	礫層	
130	5Y6/2	
131	7.5Y3/1	灰色土塊
132	7.5Y4/1	黒褐色土塊
133	5Y4.5/1	灰色土粒、黒褐色土粒
134	N4.5/0	黒褐色土粒、灰色土粒
135	N3/1	
136	5Y3.5/1	
137	5Y3/1	
138	7.5Y3/1	灰色土塊、黒褐色土塊
139	7.5Y4/1	
140	7.5Y4/1	暗オリーブ色土塊
141	5Y5/1	
142	5Y4.5/1	
143	7.5Y3/2	
144	7.5Y3.5/1	黒褐色土塊、灰色土塊
145	7.5Y3/2.5	
146	7.5Y5/1.5	
147	10Y2/1	粘土、炭化物粒(小)3%、オリーブ灰色粘土粒(大)2%、土器片含む
148	7.5Y4/1.5	
149	5Y3/1	粘土、黒色腐植物7%、オリーブ灰色粘土粒5%
150	5Y5/2	淡灰色土塊
151	5Y5/2	
152	7.5Y3/1	
153	礫層	～15cm大円礫層(やや風化の進んだ礫)、間に2.5Y3/2黒矽シルト(粗砂多い)入る
154	礫層	～15cm大円礫層(153層より大きく間が大きい)、間に2.5Y3/2黒シルト(粗砂多い)入る
155	10YR2/1	粘土(植物質・粗砂中量混じる)、木質混入、灰オリーブ中砂塊(大)1%
156	礫層	～25cm大円礫層(風化少ない)、間に7.5Y2/1黒色粘質土(粗砂多い)入る
157	5Y6/2	
158	7.5Y3/1	
159	7.5Y5/2	
160	7.5Y3/1	
161	5Y3/1	
162	2.5Y2.5/1	粘土、腐植物(水生)地下茎?5%
163	10YR1.7/1	粘土、腐植物(水生)地下茎?10%(葉も多い)、木質(枝)混入
164	5Y5/2	シルト(やや砂混じる)、植物層と黒色層が細かく堆積する層、腐植物は50%
165	2.5GY2/1	シルト(細砂混じる)、腐植物混入
166	N6/0	
トレンチ2		
1		
2	欠番	欠番
3		
4	攪乱層	
5	2.5Y2.5/1	弱粘質、～10cm大礫25%、灰白色粘土粒(大)10%、焼土粒(中)15%
6	10YR4/5	砂礫層、～5cm大礫・褐色中砂、表層に焼土粒多く被熱したような痕跡あり
7	10YR3/1	弱粘質、～0.5cm大礫1%、焼土粒(中)20%
8	10YR1.7/1	粘質土、～1cm大礫2%、焼土粒(中)5%
9	2.5Y3/1	砂質土、焼土粒(小)10%、～5cm大礫7%、炭化物粒(小～中)5%
10	2.5Y2/1	砂質土、黒色シルト粒(大)10%、～1cm大礫5%
11	5Y5/4	砂礫層(中砂・～1cm大礫層)
12	2.5Y3/1	弱粘、黒色シルト粒(大)10%、～1cm大礫3%

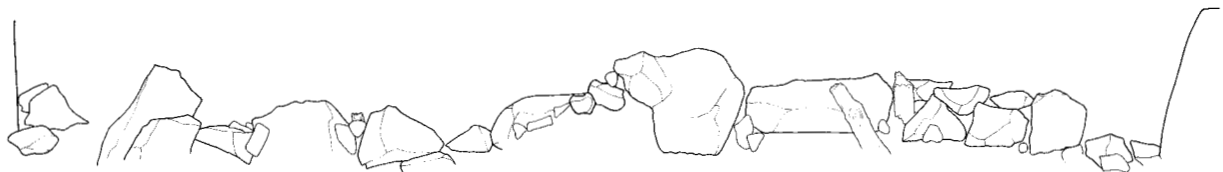
土層 No.	土 色	含 有 物
13	5Y3/1	砂質土、焼土・炭化物粒(小)3%、～1cm大礫10%
14	5Y2.5/2	砂質土、～1cm大礫15%
15	7.5Y2.5/1	シルト(弱粘)、焼土・炭化物粒(極小)5%、～2cm大礫1%
16	2.5GY2/1	シルト(弱粘)、焼土(全体的に被熱か)、黄褐色砂粒(小)5%
17	5Y2/1.5	シルト、0.5cm大礫2%
18	5Y2/2	シルト(上層より固く締まる)、黒色粘土粒帯状に混入
19	2.5Y3/2	シルト(弱粘)、黒色粘土粒(大)2%、黄砂砂粒全体的に混入
20	7.5Y2.5/1	シルト(弱粘)、～10cm大礫30%
21	5Y4/2	シルト(弱粘)、細砂多く含む、黒色シルト粒(小)3%
22	5Y4/4	シルト(弱粘)、オリブ黒色シルト塊(大)50%
23	5Y3.5/2	細砂、上層より砂粒混入多い、オリブ黒色シルト粒(小)10%
24	5Y4/2.5	細砂、オリブ黒色粘土塊部分的に50%
25	5Y5/3	シルト(弱粘)、オリブ黒色粘土粒(極小)1%
26	5Y2.5/1	シルト(弱粘)、焼土・炭化物粒(小)15%
27	5Y2/2	シルト(弱粘)、焼土・炭化物粒(小)20%、オリブ色シルト粒20%
28	5Y2/1.5	シルト(弱粘)、焼土・炭化物粒(中)25%、オリブ色シルト粒15%
29	5Y2/1.5	シルト(弱粘)、焼土粒(小)15%、炭化物粒(中)20%、～15cm大礫5%、オリブ黄色シルト粒(中)10%
30	2.5Y3/1	弱粘(固くしまる)、焼土・炭化物粒(極小)1%
31	2.5Y2.5/1	弱粘、～1cm大礫1%、黒色粘土粒(大)25%、灰色粘土粒(大)20%
32	2.5Y2/1	弱粘、黒色粘土粒(大)30%(主体)、灰色粘土粒(大)15%、黄褐色砂粒(中)2%
33	2.5Y3/1.5	砂質土(黄褐色中砂非常に多く主体)、黒褐・灰白色粘土粒(中)15%
34	2.5Y3/1	弱粘(黄褐色中砂少量混入)、黒褐色粘土粒(極大)30%、灰白色粘土粒(大)10%
35	2.5Y3/2	弱粘(暗灰黄色中砂中量混入)、黒褐・灰白色粘土粒(大)10%、鉄分粒小5%
36	5Y3/2	細砂層
37	2.5Y3/1.5	弱粘、黒褐・灰白色粘土粒(大)7%、黄灰色粘土主体
38	2.5Y3.5/1	弱粘、黒褐・灰白色粘土粒(中)5%、～15cm大礫5%、植物質混入
39	2.5Y3/1	弱粘、～10cm大礫5%、黒褐・黄灰色粘土粒(大)10%、炭化物粒(小～大)7%、黄褐色砂粒少量混入
40	2.5Y3/1	弱粘、黒褐色粘土粒(極大)混入(植物層か)、黄色砂粒少量混入
41	2.5Y2.5/1	弱粘、～10cm大礫3%、黒褐・灰白色粘土粒(中)7%
42	5Y4/2	中砂主体層、～2cm大礫2%、腐植物塊混入、黒色粘土粒(大)3%
43	2.5Y3/1	弱粘、～4cm大礫2%、黒褐色粘土粒(大)5%、腐植物層ブロック
44	2.5Y3/2	弱粘、灰白色粘土粒(大)3%
45	2.5Y2.5/1	弱粘、～5cm大礫1%、腐植物層ブロック(極大)10%
46	5Y2/1	弱粘、黒褐色粘土粒(大)7%、～5cm大礫5%
47	5Y4/2	中砂主体層、黒褐色粘土粒(大)10%、～2cm大礫2%
48	2.5Y2/1	弱粘、～3cm大礫1%、黒褐・灰白色粘土粒(小)2%
49	5Y3/2	弱粘、腐植物層ブロック(極大)15%、灰オリブ色砂粒中量、木質混入
50	7.0Y2/1	弱粘、腐植物層ブロック主体層40%、オリブ黒色粘土粒(大)20%、灰オリブ色中砂
51	5GY4/1	シルト(砂多い)、黒褐色粘土粒10%、黄褐色砂中量、木質多量(木の根)
52	10Y3/1	シルト(砂多い)、～3cm大礫3%、黄褐色砂5%混入
53	2.5GY3.5/1	シルト(弱粘)、腐植物1%(崩れた割石を覆う土)
54	5GY4/1	シルト(弱粘)、漆喰片3%
55	2.5GY4/1	シルト(弱粘)
56	10Y3/1	シルト(弱粘)、オリブ灰色砂塊(極大)3%
57	10Y3.5/1	シルト(弱粘)
58	5Y3.5/1	シルト(弱粘)、～20cm大礫30%、板材混入(上層攪乱か)
59		瓦出土面
60	7.5Y4.5/1	粘(固くしまる)、黒色土粒(小)3%
61	N2	粘(固くしまる)
62	7.5Y2/1	粘質土(柔らかい)、木質・腐植物10%、灰オリブ色粘土粒(中)10%
63	2.5Y2/1	粘質土(柔らかい)、木質・腐植物15%、下層に黄灰色粘土が多く堆積(堀底直下の地山に似る)
64	5Y3/2	シルト(弱粘)、木質・腐植物5%、黒色層として部分的に堆積
65	5Y3/1.5	シルト(弱粘)、木質・腐植物5%、黒色層として部分的に堆積
66	5Y3/1	シルト(弱粘)、中砂混入多い、植物質1%
67	10Y3.5/1	中砂、植物質3%
68	10YR1.7/1	粘土、植物質15%、堀底地山2層目に似る
トレンチ4		
1	2.5Y4/2	粗砂、～20cm大礫30%、黒褐色土塊5%
2	10YR4/3	粗砂、～5cm大礫30%、黒褐色土塊5%
3	2.5Y4/1	粘質土(しまり有)、～5mm大礫3%、白色土(石灰?)3%
4	2.5Y3/1	粘質土(しまり有)、焼土塊1%、～5mm大礫3%
5	10YR3/4	シルト質土(しまりやや弱)、焼土塊(大)40%、～5cm大礫5%、炭化物5%、黒褐色土塊3%
6	5Y2/2	粘質土(しまり有)、黒褐色土塊5%、オリブ褐色細砂5%
7	2.5Y4/6	粗砂、～5cm大礫10%
8	2.5Y2.5/1	粘質土(しまり強)、黒色土塊5%、黄灰色土塊1%、～1cm大礫
9	2.5Y3.5/1	細砂～シルト(しまり有)、～5cm大礫5%
10	5Y3/1	シルト質土(しまりやや強)、黒褐色土塊5%、～3cm大礫3%
11	5Y4/1	粘質土(しまり有)、灰オリブ色土粒10%、黒色土塊3%
12	10YR3/4	シルト質土(しまりやや弱)、焼土塊(中～大)10%、～5cm大礫5%、炭化物5%、ガラス、瓦混入

南トレンチ

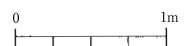
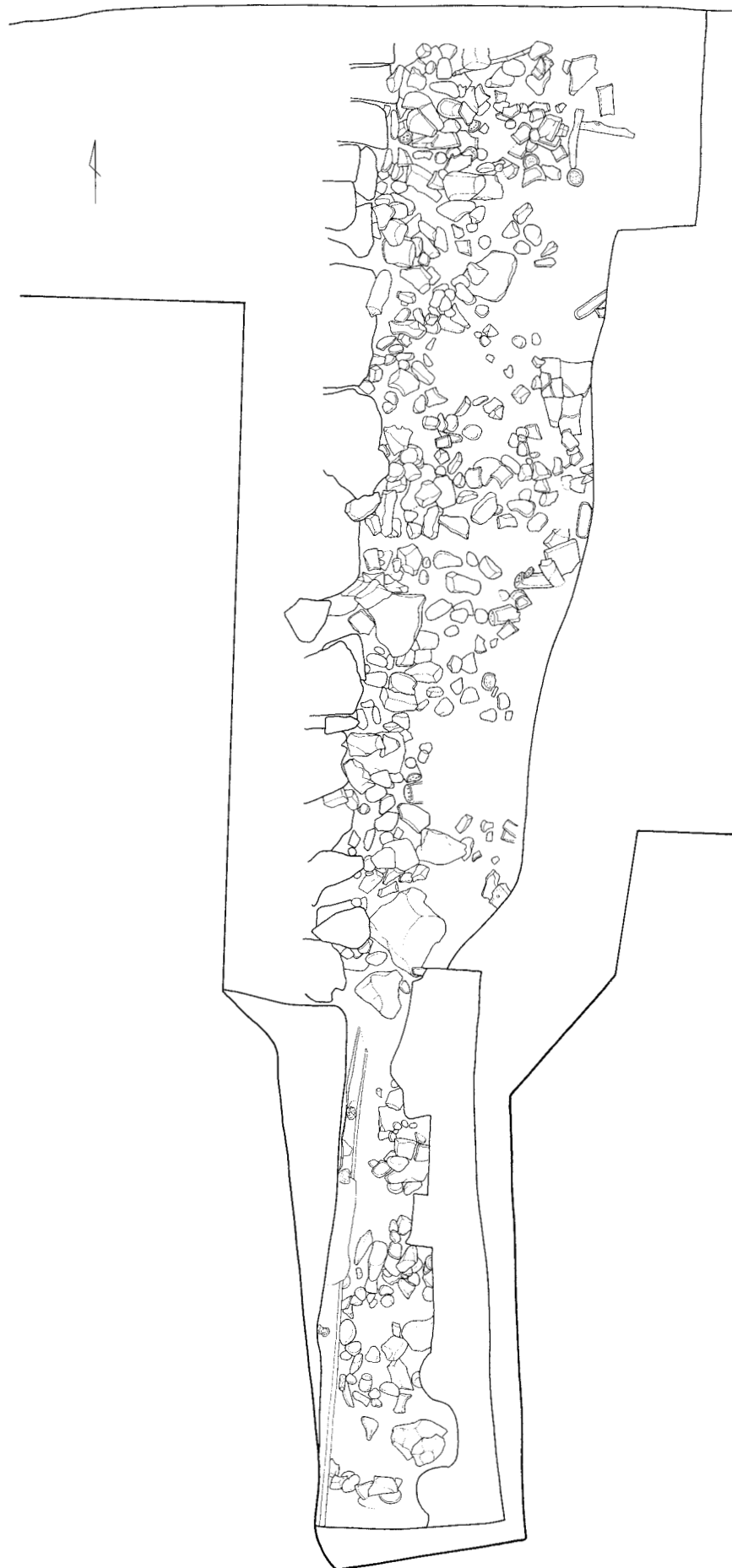


M

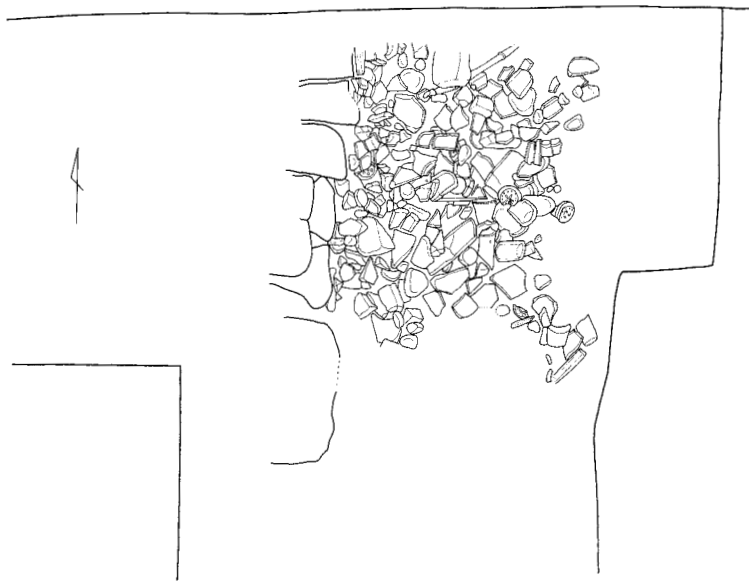
M'
587.10m



第13図 南トレンチ 遺構図



第14図 南トレンチ 割石 出土図



第15図 南トレンチ 遺物 出土図



写真17
南区北端 石垣根固め
(東から)



写真18
南区北端 石垣根固め
(北から)

第4節 遺物

1 陶器・土器（第16図、第2表）

今回の調査では、整地層および総堀埋土中より陶器・土器が出土した。このうち、枡形内の整地層および石垣・石列の裏込から出土したもので、図化可能な12点を提示した。種別の内訳は、陶器2点、土器10点（内耳鍋7点・皿3点）である。

(1) 陶器（1・2）

1は、石列裏込め際の整地土から出土した京焼小碗である。透明釉がかかり、文様はみられない。ロクロ調整で下半部は回転ヘラ削りが施される。18世紀後半の所産とみられる。2は、石垣と石列の間の整地土から出土したもので、美濃産灰釉皿の小片である。大窯Ⅳ期に比定されるものである。

(2) 土器（3～12）

図化した土器は、皿と内耳鍋である。すべて石垣と石列の間の整地層から出土した。3～5は、土師器皿である。すべてロクロ調整で、底部に回転糸切痕が残る。5は、底径が7.4cmと大きく、古い様相がみられるが、3点とも小片のため時期が判然としない。6～12は、内耳鍋である。8・11は、傾きが大きく器高が低いタイプのもので、18世紀以降の所産と考えられる。

2 瓦（第16～24図、第3～6表）

今回の調査で最も多量に出土した遺物は瓦で、総計491点を数える。これらの内訳は、軒丸瓦101点、丸瓦222点、軒平瓦12点、平瓦145点、その他2点、棧瓦9点である。棧瓦については、堀埋没土の上層面から出土しており、近代以降の可能性が高いため、報告掲載資料からは除外した。これらの瓦は、各トレンチの整地層や石垣際からまとめて出土したものである。出土したすべての瓦にID番号を付し、形状や調整などを観察し、一覧表にまとめた。ID番号は、種別ごとに頭数字を決め（軒丸瓦11、丸瓦12、軒平瓦21、平瓦22、棧瓦21、その他42）、それぞれ1から（11-1など）付した。これらの資料で、各瓦種ごとの分類では、瓦当文様を有するものは文様により、それ以外は形態と調整の特徴により分類した。特に丸瓦は、各瓦当面を有する瓦の凹部に残る叩き調整の痕跡に着目し、A～E類の5種に分類した。以下、各種別の特徴と概要を述べていく。

(1) 軒丸瓦

101点が出土した。これらのうち、瓦当文様に家紋がみられるのは2種類ある。戸田氏家紋の離れ六つ星文と水野氏家紋の立沢瀉文がみられる。家紋以外では、連珠左巻三つ巴文・連珠右巻三つ巴文がある。これらは、瓦当面の文様の特徴と凹面の叩き調整の痕跡により、さらに細分化できる。

ア A類：離れ六つ星文（13・14・35・42など）

松本藩主・戸田家の家紋である離れ六つ星文が入った軒丸瓦である。瓦当面にこの紋が残る瓦は6点出土している。戸田氏は、松本城に江戸時代前期と後期の2回入封している（前期の元和3年～寛永10年・1617～1633、後期の享保11年～慶応3年・1726～1867）。全体的に器面が緻密で、高温で焼成されており、一部に銀色に輝く銀化した部分が観察される。丸瓦凹部の調整は、布目圧痕の残る器面に、縄目叩きが行われ、その後に棒状工具による叩き調整が施されている。棒状叩きの痕跡は、全面には残らず、一部にのみ観察される。叩きの単位は、幅の狭いものと広いものの2種類みられる。瓦当面は、外縁部の幅が広く、瓦当面と胴部の接合部には、強いヨコナデがみられる。胴部凹部の側縁と側面は、それぞれ面取りされて平坦面がみられるが、側面部（端部）の方が広く側縁部は幅が狭い。釘穴は、外面から内面に向けてあけられており、内面に飛び出した粘土塊も丁寧に除去している。胴部凸面は、丁寧に縦方向

にナデ調整が入る。瓦当面と丸瓦部本体の接合部には、強い指ナデが入る。(14・35・42)

イ B類：立沢瀉

松本藩主・水野氏の家紋である立沢瀉文が入る軒丸瓦は、17点ある。水野氏は、松本藩に、寛永19年～享保10年(1642～1725)の83年間在城した。瓦当面の文様をみると、連珠文が有るもの(B-①類)と無いもの(B-②類)の2種類みられ、連珠文の有るものにも連珠の数により、3パターンみられる。

B-①類：立沢瀉文の周りに連珠文があるものである。連珠文の数が15・16・17個付く3タイプがみられる。

胴部凹部に残る調整は、布目圧痕の残る器面に、タテ方向に強いケズリ状のナデが施されている。すべて叩き調整を省略しており、器厚が厚く歪みも大きい。胴部凹面の側縁・側面は、それぞれ面取りがみられるが、シャープさに欠けるため玉縁状になっているものも多く見られる。

B-②類：瓦当面に連珠文が付かないものである。側面に面取りは見られるが、側縁の面取りがみられない。凹面は布目圧痕とともに模骨(型)の木組みの痕跡が明瞭に残るものが多い。B-①と同様に叩き調整は見られず、強いケズリ状のナデ調整が施されている。また、B類共通で、瓦当面と胴部の接合が粗く、瓦当部と胴部が剥落している資料が多くみられる。

ウ C類：連珠左巻三つ巴文

瓦当面に連珠左巻三つ巴文が入るものをC類とした。C類とした軒丸瓦は32点ある。これらは、叩き調整や側面・側縁の形状で、①～③の3種に分類できる。連珠の数は、3種ともに9個である。以下、3種類の特徴を述べる。

C-①類：22・23など10点が該当する。胴部凹面側縁・側面に面取りがみられるが、側縁の幅が広いものである。胴部凹面の調整痕は、縄目叩きの後に、一部ヨコナデ調整が施されている。釘穴は外側からあけられており、内面に飛び出した粘土塊は処理されずに、そのまま残されている特徴がある。瓦当部と胴部接合部は、かなり粘土を足して接合し、ヨコナデが施されている。

C-②類：50・54など7点が該当する。胴部凹面側縁・側面に面取りがみられるが、側面の幅が広く側縁の幅が狭い。胴部凹面の調整痕は、布目圧痕の残る面に棒状叩きが行われ、一部にヨコナデが入る。棒状叩きは、比較的幅の広い板状の工具痕が残る。瓦当面は、珠文・巴文に布目圧痕が残る。

C-③類：51が該当する。胴部凹面には布目圧痕の器面にヨコナデが入るもので、叩き調整の痕跡は見られない。側縁・側面に面取りがみられ、側縁の幅が狭く、側面の幅が広い。

このほか、瓦当面のみ残存するものが7点みられる。

エ D類：連珠右巻三つ巴文

瓦当面に連珠右巻三つ巴文が入るものをD類とした。D類に分類された軒丸瓦は33点みられる。これらは、叩き調整や側面・側縁の形状などで①～③の3種に分けられた。このうち①と③は、C類の①・③と内面の叩き調整や周縁部の形状が共通する。D類の珠文の数は、すべて12個である。以下、3種類の特徴を述べる。

D-①類：32・37・58など8点があげられる。凹面の叩き調整や側縁・側面の形状などはC-①類と非常に似ている。側縁・側面の面取りは、側縁の幅が広い。凹面の叩きは、布目圧痕の後、縄目叩きの後に一部にヨコナデが施される。

D-②類：31・57など14点が該当する。布目の圧痕が残る器面に、縄目叩きが施されるものである。側縁・側面の面取りの形状は、側面の幅が狭く、側面の幅が広い。ややシャープさに欠けるもので、中には玉縁状になるものもみられる。瓦当面の裏面端部には、指ナデが1周巡る。

D-③類：38(11-31)・30(11-33)の2点が該当する。布目圧痕が残る器面に、タタキ調整の痕跡がみられず、ヨコナデが施されるものである。C-③類と特徴が共通する。側縁・側面に面

取がみられるが、側縁の幅が狭く、側面の幅が広い。瓦当面裏面の端部にナデが1周入る。瓦当面の文様部分にも布目圧痕が残る。

(2) 丸瓦

222点の資料が出土した。これらは軒丸瓦の分類に準じ、凹面の調整と側縁・側面の形状などの特徴を観察した。この結果、軒丸瓦のA～D類の特徴に当てはまるものは踏襲し、軒丸瓦にはみられなかった特徴を持つ一群は新たにE類として分類した。

ア A類

17点確認できる。軒丸瓦分類A類の凹面の調整痕と、側縁・側面の特徴が共通するもの。布目圧痕の後、縄目叩き・棒状叩きが施される特徴をもつ一群である。

イ B類

B-①類は、側縁・側面に面取りもしくは玉縁状になるもので、布目痕に強いタテ方向のナデ調整がされるものである。37点確認できるが、12-121・12-123・12-124の3点は尾部がすぼむ形状である。また、内面に吊り紐痕が残るものが14点みられる。

B-②類は、5点確認できる。側縁のみ面取りされる形状で、布目痕に強いタテ方向のナデ調整が施されるもの。布目には、模骨（型の痕跡）が明瞭に残るものが多い。

ウ C-②類

6点確認できる。凹面の観察で、布目圧痕の器面に棒状叩きが施され、一部にヨコナデ痕が残るものもある。棒状叩きは、やや幅の広い工具と狭い工具の2種類の痕跡が確認できる。

エ D-②類

12点確認できる。布目圧痕が残る器面に、縄目叩きが施されるもの。側縁・側面の面取りの形状は、側面の幅が狭く、側縁の幅が広い。ややシャープさに欠けるもので、中には玉縁状になるものもみられる。

オ CまたはD類

①・③類：2種ともに凹部調整や側縁・側面の形状がC・D類共通なため、瓦当面が残存していなければ断定は難しい。このため、分類はC or D類-①または③とした。

カ E類

瓦当面が残存している軒丸瓦はみられず、丸瓦のみである。丸瓦部凹面の調整は、布目圧痕が残る器面に、縄目叩き、の後に棒状叩きも施され、一部にヨコナデが入るものである。叩き調整が、縄目と棒状の両方が施される丁寧な作りである。側縁・側面ともに面取りがみられるが、側縁の幅が狭く側面の幅が広い。器面のザラツキが顕著で、調整等も古い様相の特徴が看取できる。今回の調査で出土していない五七の桐文がつく可能性も考えられるが、二の丸御殿出土の五七の桐文の凹面の特徴とは異なっている。

(3) 軒平瓦

軒平瓦は12点出土した。軒丸瓦の出土量と比較すると非常に少ない。瓦当面の文様は、中心五花弁唐草文、三葉文唐草文、中心三葉文唐草文の3種類観察される。以下、それぞれの特徴を述べる。

ア I類：中心五花弁唐草文軒平瓦

67の1点が該当する。瓦当上縁部に面取がある。面取り幅は、中央が広く端が狭い。全体的に器面のザラつきが顕著で、胎土中に砂礫が多く含まれる。特に1cm大の礫も混入しており、器面にひび割れが目立つ。瓦当面裏面には、平瓦部との接合部に強いヨコナデが入る。接合部分だけでなく、平瓦部分にも幅の広いヨコナデが施される。

イ II類：三葉文唐草文軒平瓦

7点が該当する。すべて瓦当面上縁の面取は見られない。瓦当裏面の平瓦部との接合部には、明瞭

なヨコナデ調整が残る。胎土中にⅠ類ほどの大きな礫は入らないが、細砂・粗砂が多く含まれ、器面は粗い。72・73は、他の出土瓦より特に大形である。73は、縦55.5cm、幅29.5cmの瓦で、縦横比率0.53と特に縦が長い。72も同様に、縦53.0cm、幅29.5cmで、縦横比率は0.55である。『摂津高槻城』（1984年）の報告では、「平瓦の縦横比0.83が安土・桃山時代までの平瓦と江戸時代以降の平瓦を区別する目安になる」とし、0.83以下即ち縦が長いものは「文禄年間以前の資料」、0.83以上すなわち縦が短いものは「元和年間以後の資料」としている。これに照らし合わせると古い様相となるが、この2点他に出土事例がなく、今後検討を要す資料である。

ウ Ⅲ類：中心文唐草文軒平瓦

2点みられる。瓦当上縁部に面取りがみられる。同じように面取りが入るⅠ類とは異なり、中心部・端部ともに同じ幅である。瓦当顎裏面にヨコナデが入るが、接合部分のみに入っており、平瓦本体部にはナデが及んでいない。胎土は緻密で、器面はツルツルしている。

(4) 平瓦

器面に残る調整等の観察では、はっきりとした分類は困難である。軒平瓦の記述でも記載したが、胎土や器面の特徴で大きく3種に分けられる。

ア類：器面のザラつきが顕著で、胎土中に砂礫が多く含まれる。特に1cm大の礫も混入しており、こうした箇所から発生するひび割れが目立つものである。

イ類：胎土中にア類のような大きな礫は入らないが、細砂・粗砂が多く含まれ、器面は粗くザラザラしているもの。

ウ類：緻密な胎土で、焼き上がりも硬く締まっており、器面はツルツルしているもの。

胎土分析等を踏まえた結果ではないので断定はできないが、軒平瓦との断面・表面観察の比較で、Ⅰ類とア類、Ⅱ類とイ類、Ⅲ類とウ類が類似している。

(5) 刻印・刻書瓦

出土した瓦のうち刻印・刻書のある資料は2点のみで、総量に比して非常に少ない。刻印の押されたものは丸瓦の57の1点、刻書は平瓦71の1点である。

57の丸瓦には、釘穴近くに「㊦」（丸に三）の刻印がみられる。

71の平瓦の凹面には四つ菱形状の刻書がみられる。幅1～2mm程の線刻で模られている。

(6) まとめ

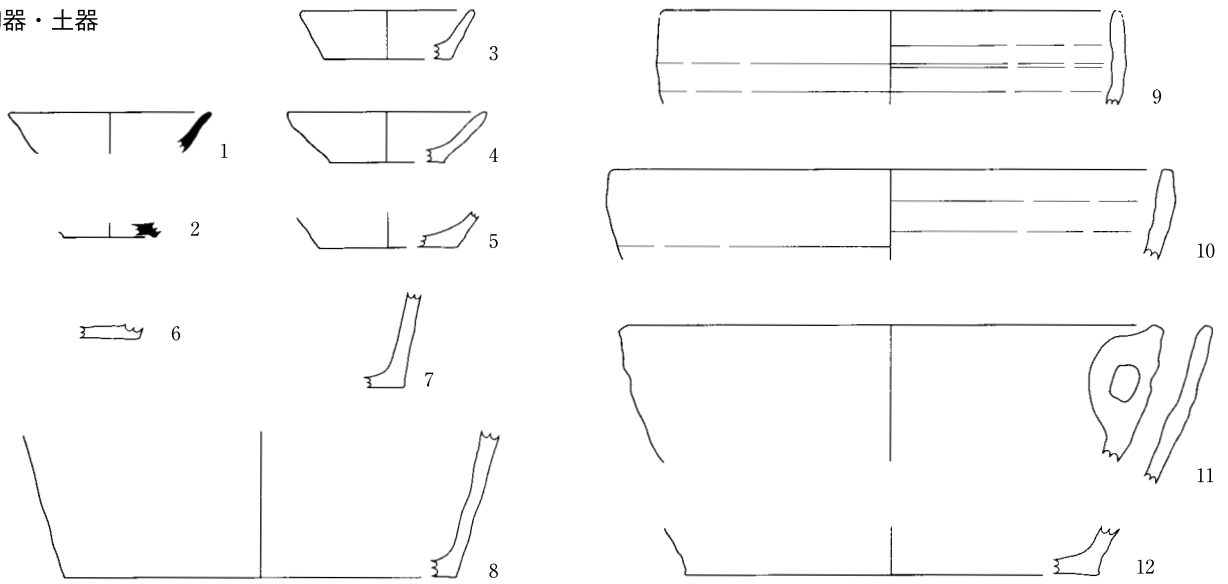
今回の調査で出土した瓦は、藩主・水野氏と戸田氏の家紋の入った軒丸瓦が確認されており、葺かれた年代に時期差が認められた。このことは、瓦を葺き直すような修理が複数回行われてきたことを示すものとして考えられる。出土した瓦のうち、特に軒丸瓦の瓦当面の文様と、凹面の叩き調整痕、側縁・側面の面取りの形状、瓦当面と本体との接合方法などの特徴から5種類に分類した。特に丸瓦凹面に残る叩き調整の痕跡では、明瞭な特徴が観察できた。この違いが時期的な技法の変遷を示すのか、瓦工人の相違を表すのか、その他に理由があるのかは判然としない。今後、今回出土した資料と松本城の他の調査地点から出土したものを比較していきながら、松本城関連の瓦の葺き替えの規模や背景、生産の様相、技法の変遷など、今後検討していく必要がある。

<引用・参考文献>

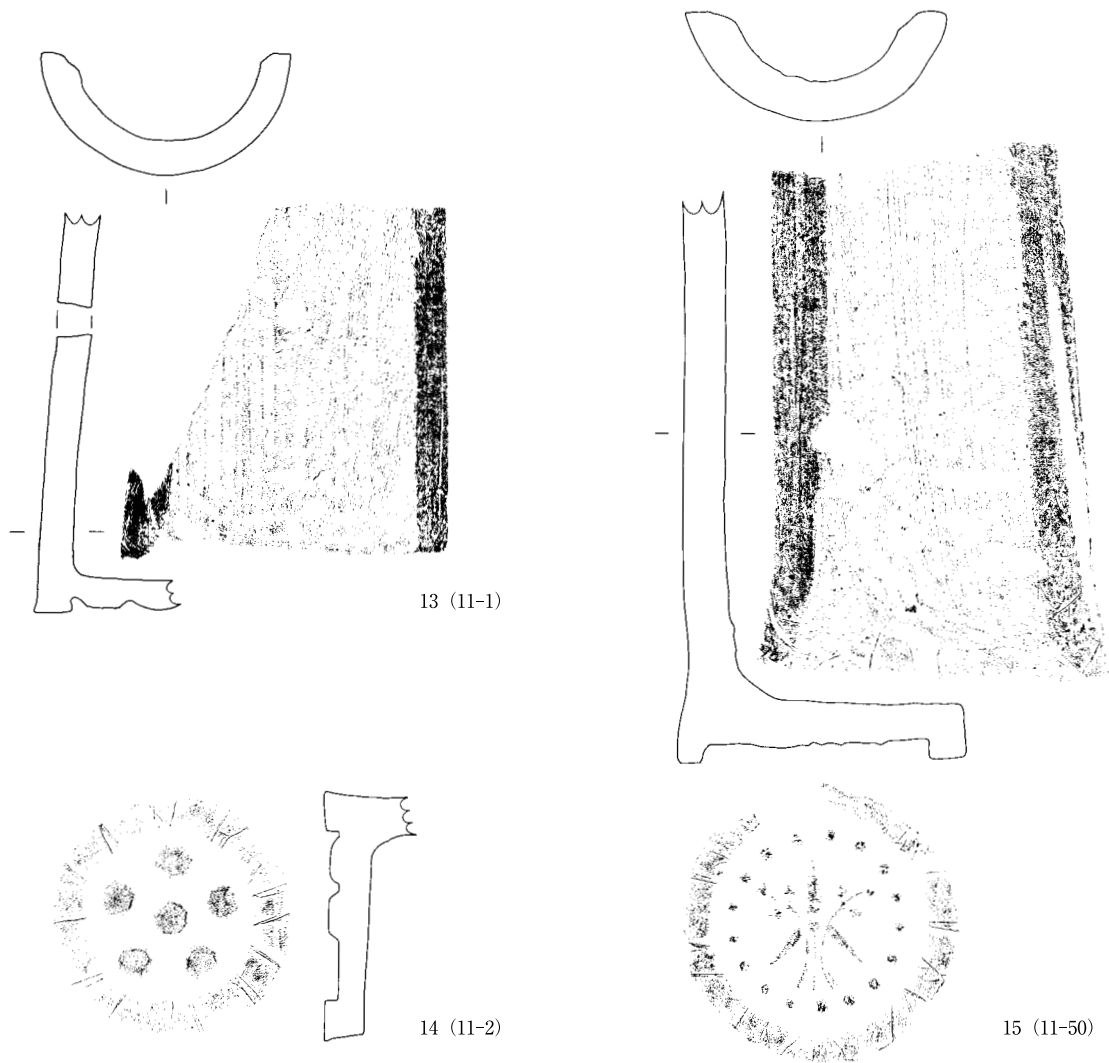
高槻市教育委員会 1984 『摂津 高槻城』

山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

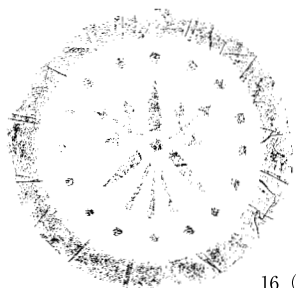
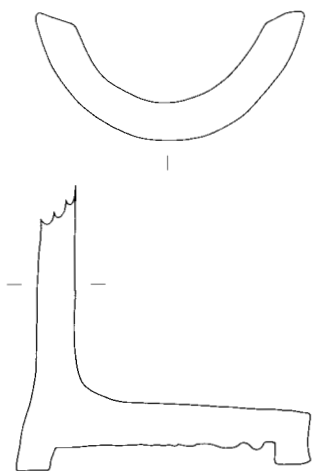
陶器・土器



瓦
軒丸瓦
T1



第16図 陶器・土器・瓦 (1)



16 (11-51)



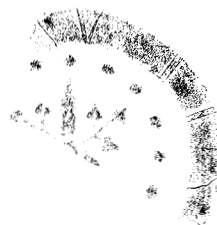
17 (11-52)



20 (11-68)



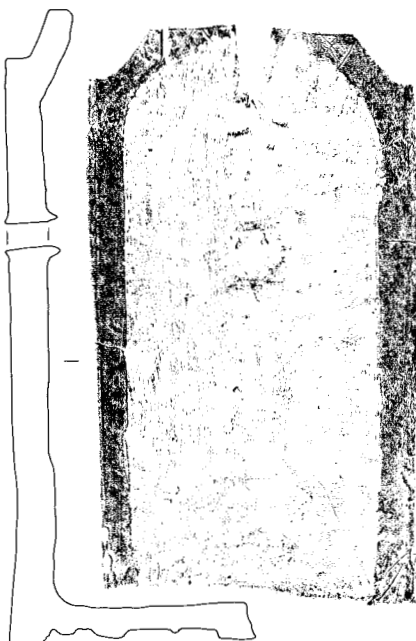
18 (11-59)



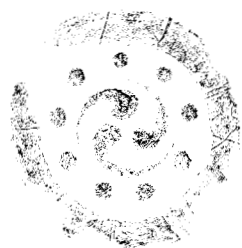
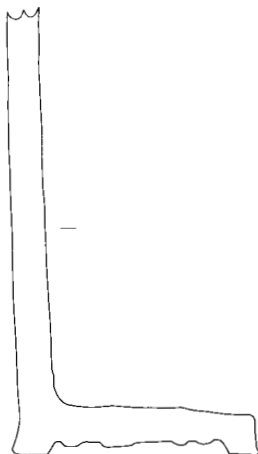
19 (11-61)



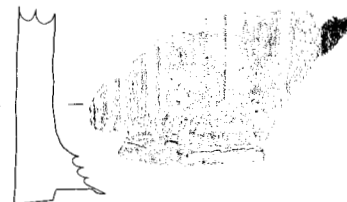
21 (11-67)



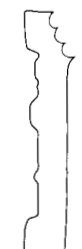
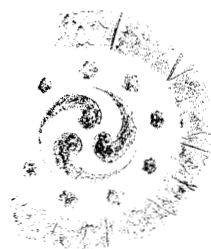
22 (11-11)



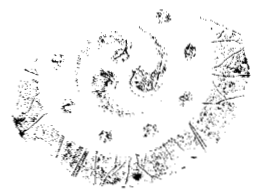
23 (11-12)



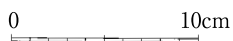
24 (11-23)



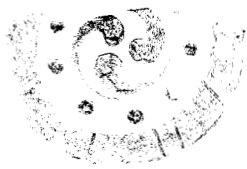
25 (11-10)



26 (11-16)



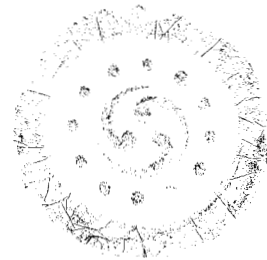
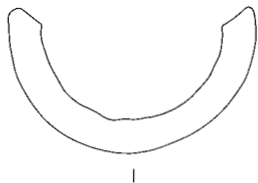
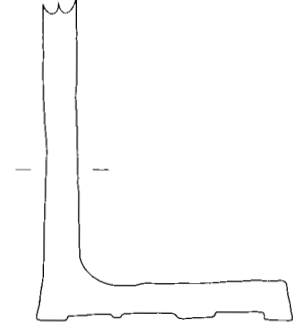
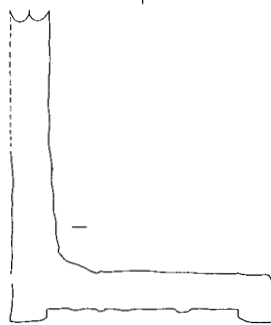
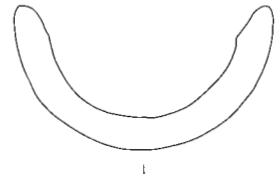
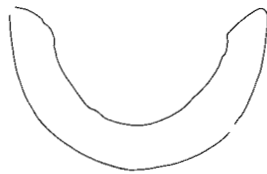
第17图 瓦 (2)



27 (11-18)



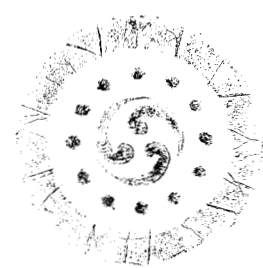
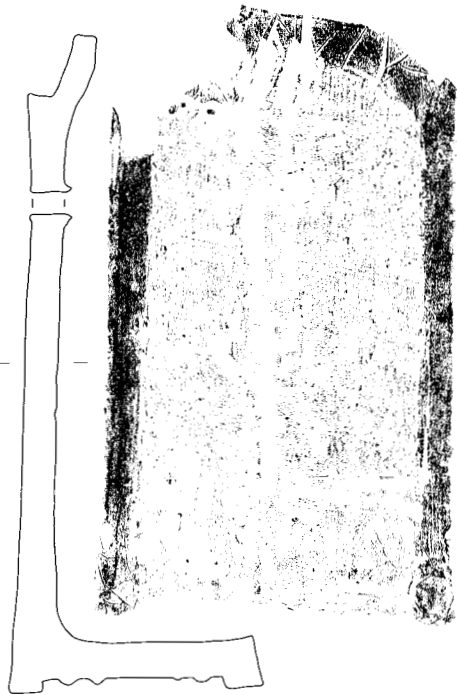
28 (11-15)



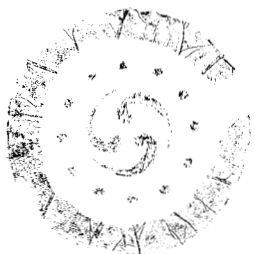
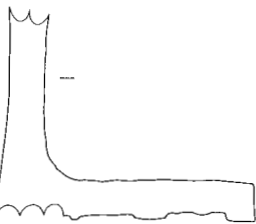
30 (11-33)



31 (11-39)



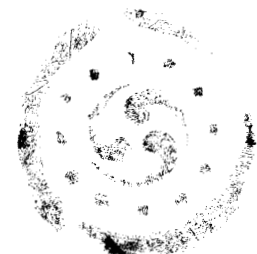
33 (11-45)



29 (11-42)



32 (11-30)

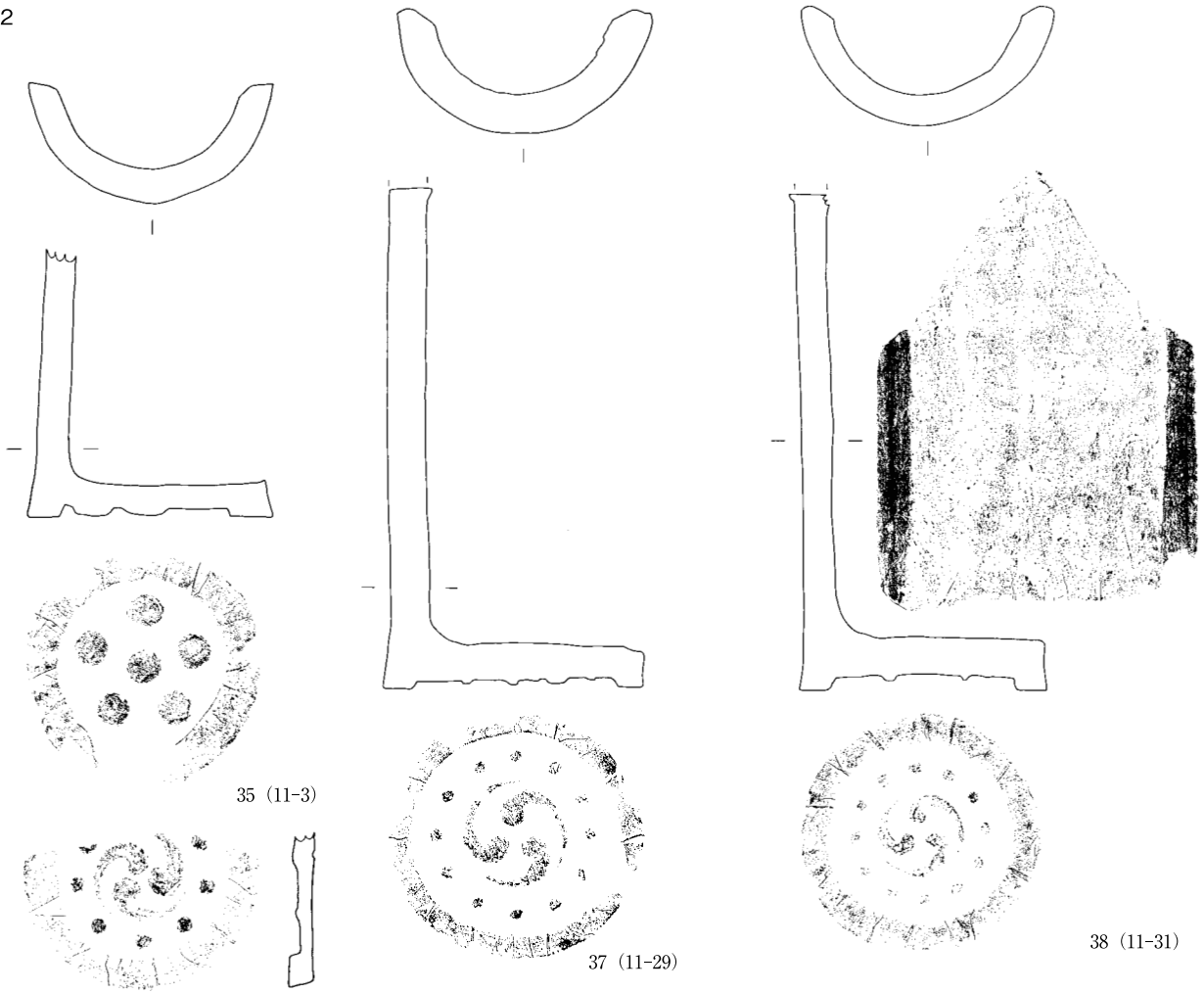


34 (11-38)

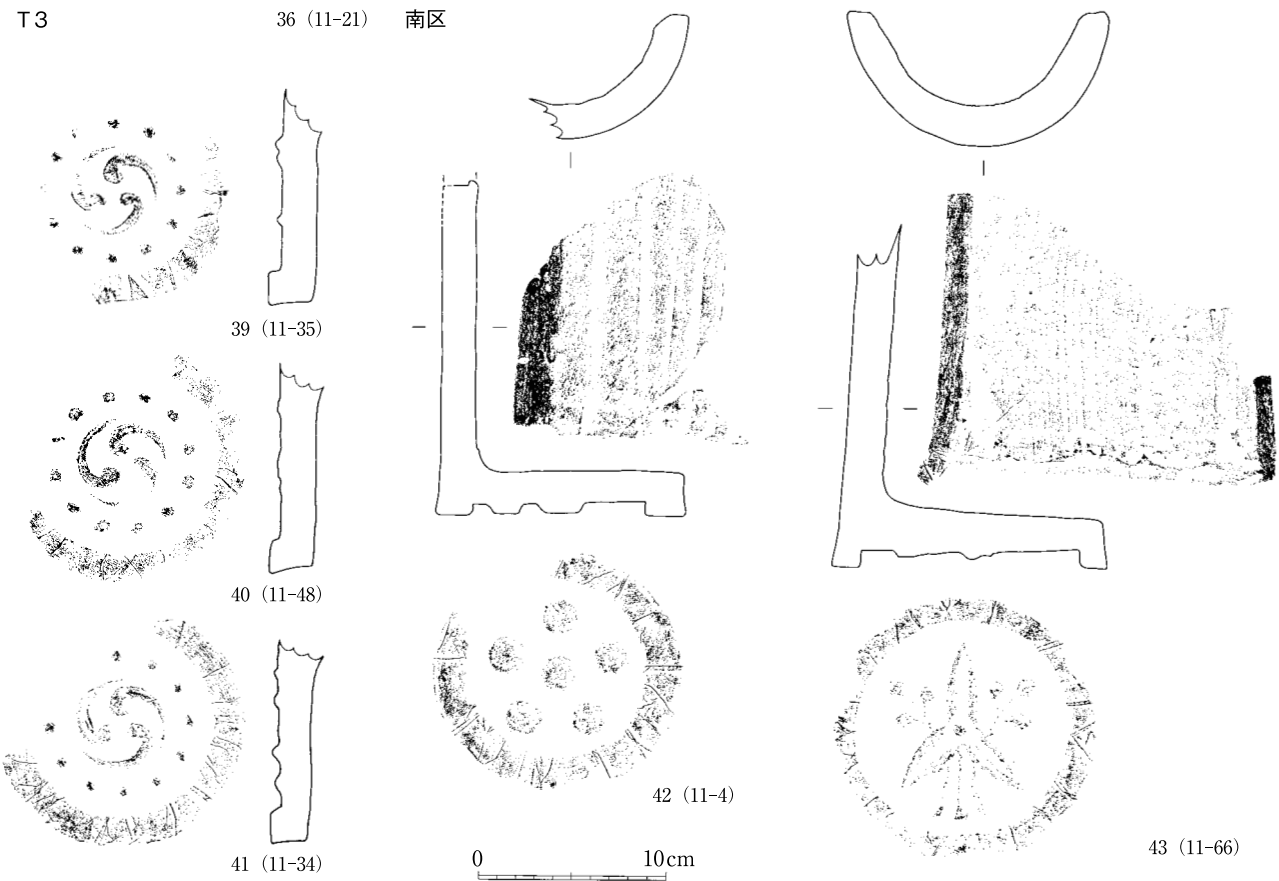
0 10cm

第18图 瓦 (3)

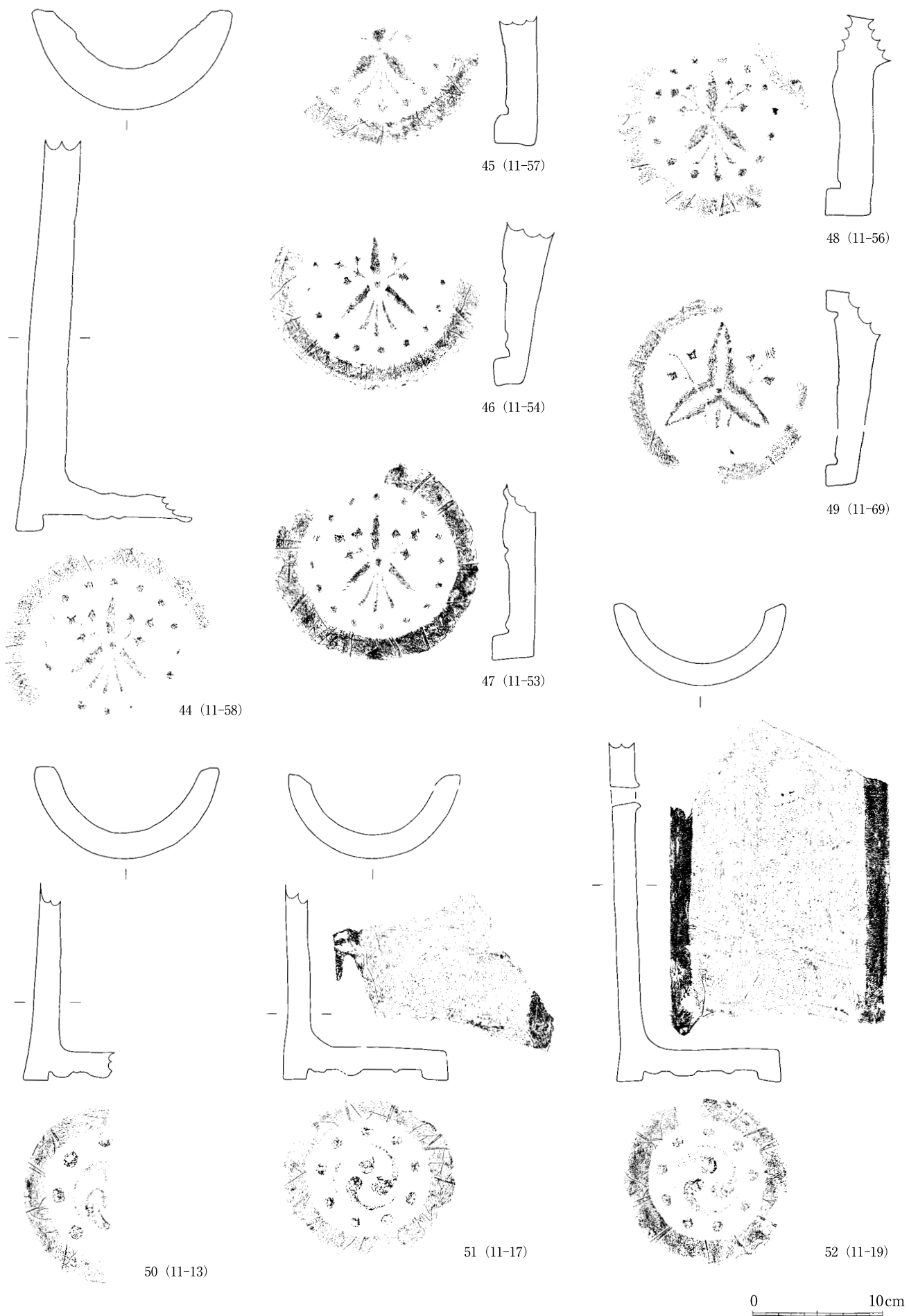
T2



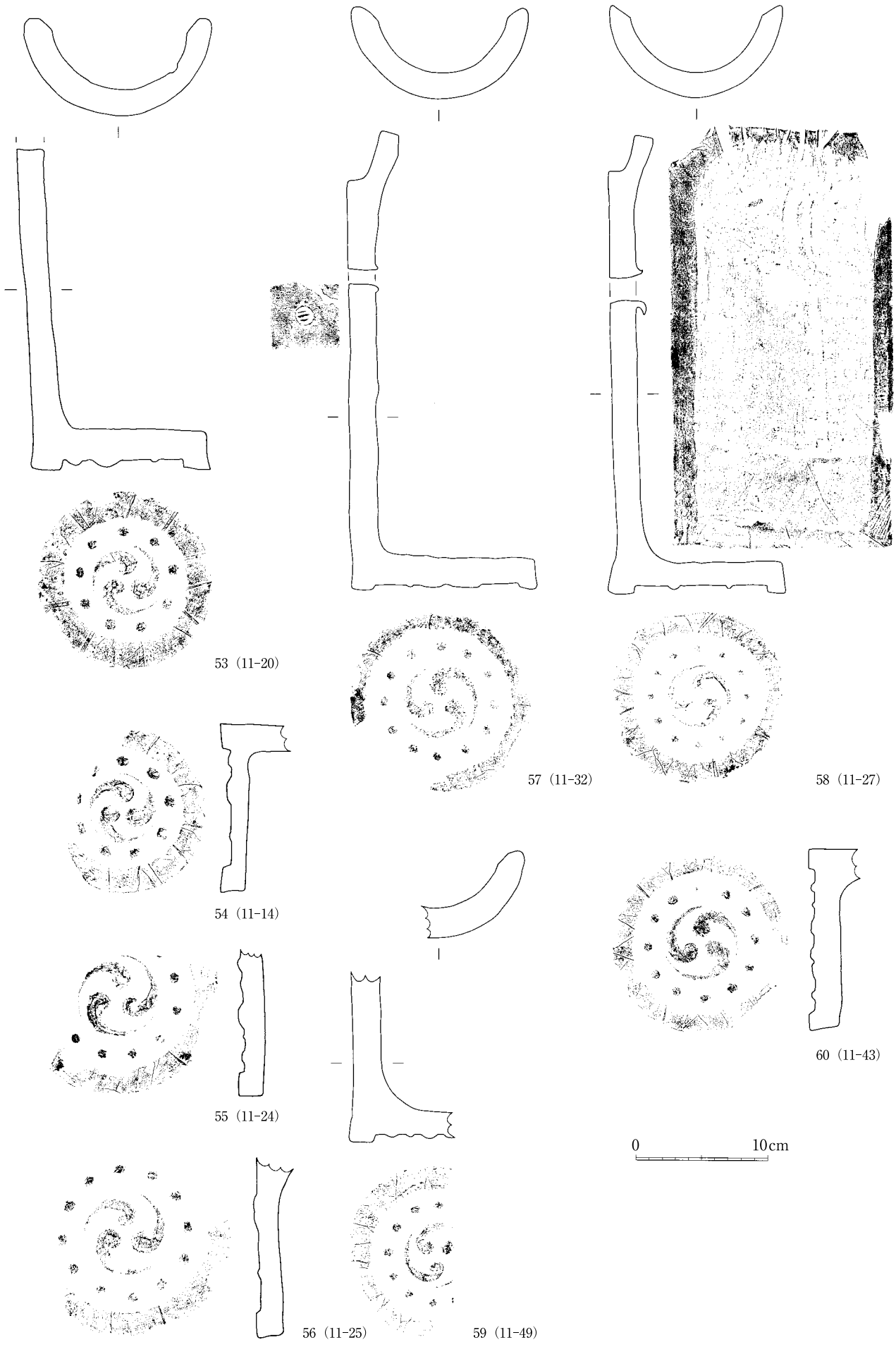
T3



第19图 瓦 (4)

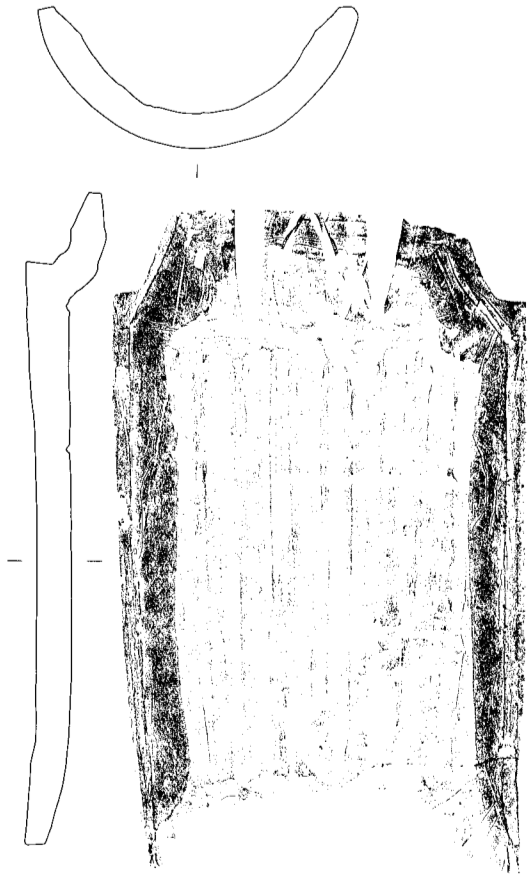


第20図 瓦 (5)



第21图 瓦 (6)

丸瓦
T1



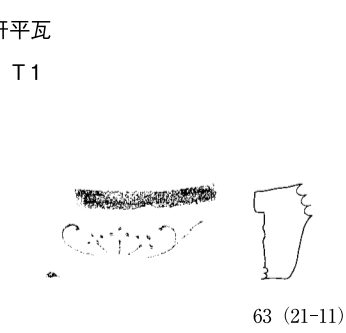
61 (12-20)

南区

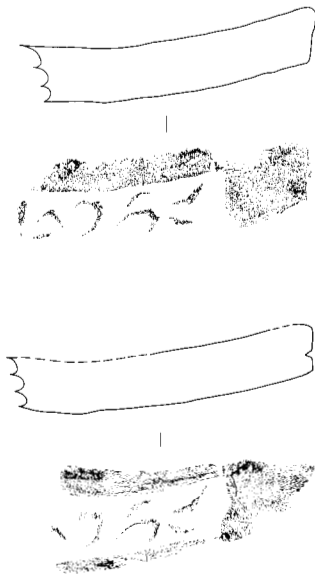


62 (12-18)

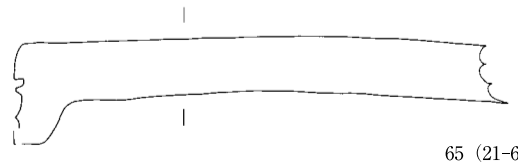
軒平瓦
T1



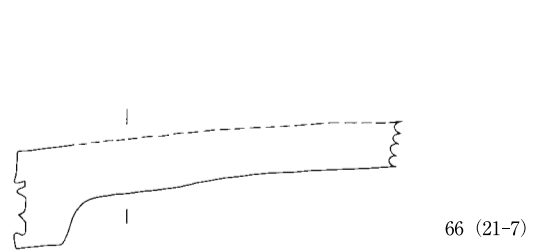
63 (21-11)



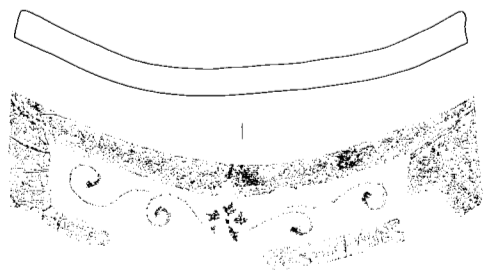
64 (21-5)



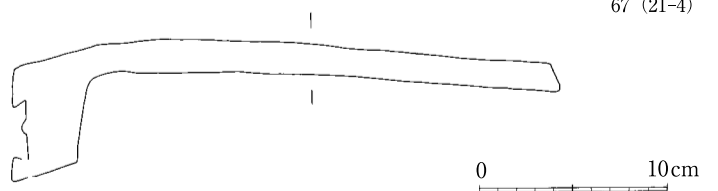
65 (21-6)



66 (21-7)



67 (21-4)



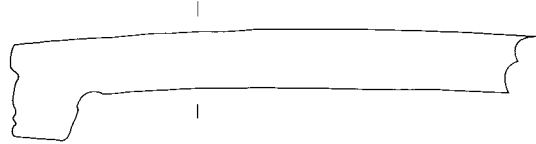
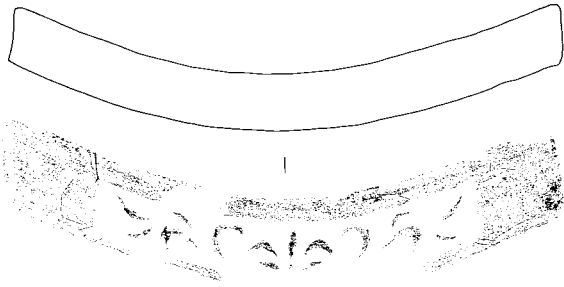
0 10cm

第22图 瓦 (7)

T2

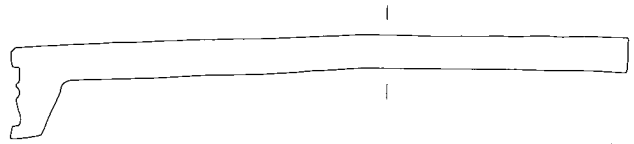
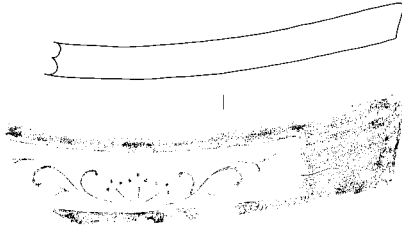


68 (21-10)



69 (21-9)

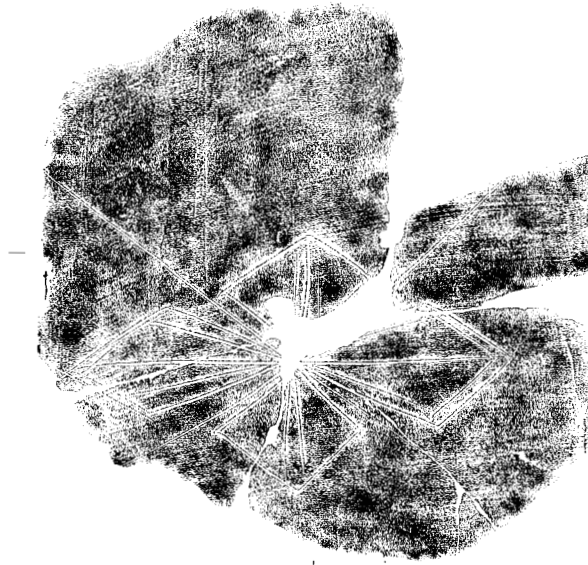
南区



70 (21-8)

平瓦

T2·南区



71 (22-107)

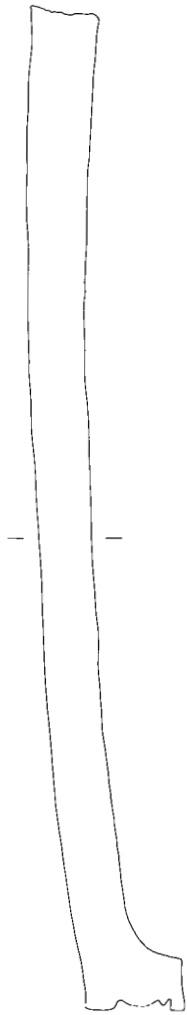
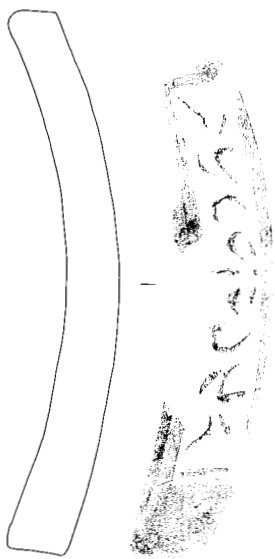


0 10cm

第23图 瓦 (8)

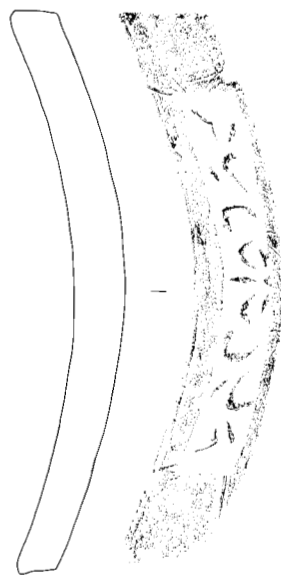
軒平瓦

T2



72 (21-3)

南区



73 (21-1)



第24图 瓦 (9)

第2表 陶器・土器観察表

図No.	実測番号	出土地点	注記	種別	器形	法量		残存度	胎土	技法・形態の特徴	釉調	推定年代	推定産地	
						口径	底径							
1	整-1	T1石垣・石列間	0180 No.198	陶器	小碗	(10.8)		口1/8	灰白	ロクロ調整、下半回転ヘラ削り	灰釉のち透明	18c	京焼	
2	整-2	T1石垣・石列間	0177 No.195	陶器	皿	(4.8)		底1/8	淡黄灰	ロクロ調整、削り出し高台	淡黄灰	16c後半	美濃	
4	整-3	T1	0325 T1-2	土器	皿	(10.5)	(6.1)	2.7	口1/8、底(6/1)	暗灰	ロクロ調整、底部回転糸切	—	19c	在地産
6	整-4	T1	T1 セイ0325 T1-2	土器	内耳鍋			小片	褐	裏面砂目・内面ロクロナデ	—	—	在地産	
5	整-5	T1	0083 No.94	土器	皿		(7.4)	底1/8	褐	ロクロ調整、底部回転糸切	—	—	在地産	
3	整-6	T1石垣前	0092 No.103	土器	皿	(9.0)	(6.8)	(2.6)	口わずか、底1/16	暗褐	ロクロ調整、底部回転糸切	—	—	在地産
10	整-7	T1石垣・石列間	0182 No.200	土器	内耳鍋	(29.1)			口1/16	褐	ヨコナデ	—	—	在地産
9	整-8	T1	0080 No.89	土器	内耳鍋	(24.4)			口わずか	暗褐	ヨコナデ	—	—	在地産
11	整-9	T1	0007 No.7	土器	内耳鍋	(27.8)			口1/10	暗灰褐	ヨコナデ	—	—	在地産
12	整-10	T1石垣・石列間	0178 No.196	土器	内耳鍋		(22.0)		底1/8	暗灰褐	ヨコナデ	—	—	在地産
8	整-11	南区	0461 南区 グリ	土器	内耳鍋		(20.8)		底1/10	暗灰褐	ヨコナデ	—	—	在地産
7	整-12	T1石垣・石列間	0171 No.189	土器	内耳鍋				底わずか	暗灰褐	ヨコナデ	—	—	在地産

第3表 軒丸瓦観察表

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	径(cm)	重量(g)	家紋	珠文の数	内面調整	その他	類型
13	11-1	0045	T1石垣前		13.4	1.8	13.0	1000			縄目タタキ→棒状タタキ	釘穴あり、瓦当面と胴部接合部にユビナデ	A
14	11-2	0030	T1石垣前				13.4	550		不明			
35	11-3	0216	南区		13.4	1.7	13.4	840			縄目タタキ→棒状タタキ	瓦当面胴部接合部にユビナデ	
42	11-4	0248	南区		13.2	1.8	13.4	920			棒状タタキ		
	11-5	0340	T1					60					
	11-6	0093	橋形整地				14.4	100					
	11-7	0078	T1石垣前				12.8	120					
	11-8	0146	T1石垣前				13.4	140					
	11-9	0046	T1石垣前			1.8	13.6	420			ヨコナデ	瓦当面と胴部接合部に強いヨコナデで凹む、側縁・側面は玉縁状	
25	11-10	0098	T1石垣前				12.8	340			不明	瓦当剥落部分に瓦当接合時のクシ目文あり	C(不明)
22	11-11	0018	T1石垣前	33.6	13.2	1.8	13.3	2160			縄目タタキ→一部ヨコナデ	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ、釘穴あり、側縁・側面は玉縁状	C-1
23	11-12	0059	T1石垣前		13.5	1.8	13.6	1360			縄目タタキ、瓦当側一部横ケズリ	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ、側縁・側面は玉縁状	C-1
50	11-13	0208	南区		14.1	1.9	14.2	920			棒状タタキ→ヨコナデ	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ	C-2
54	11-14	0220	南区			1.9	13.2	390			棒状タタキ	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ、側縁・側面は不明	C-2
28	11-15	0069	T1石垣前				13.6	220			不明		C(不明)
26	11-16	0047	T1石垣前				13.6	380			強いヨコナデ	焼成やや不良	C-3
51	11-17	0215	南区			1.8	12.6	820			不明	焼成やや不良	C(不明)
27	11-18	0043	T1石垣前				13.4	270			縄目タタキ→ヨコナデ	焼成やや不良、釘穴あり、側縁・側面は玉縁状	C-1
52	11-19	0051	南区		13.1	1.8	13.4	1590			縄目タタキ→一部ヨコナデ	焼成やや不良、側縁・側面は玉縁状、瓦当面と胴部接合部にヨコナデ	C-1
53	11-20	0224	南区		13.9	1.9	13.6	820			不明		C(不明)
36	11-21	0284	T2				13.4	160			(9) 棒状タタキ		C-2
	11-22	0340	T1				12.4	140			9 布目圧痕→棒状タタキ	吊り紐痕あり	C-2
24	11-23	0054	T1石垣前			1.8	13.6	480			12 不明		C(不明)
55	11-24	0248	南区				15.6	340					C(不明)
56	11-25	0227	南区				16.4	500					C(不明)
	11-26	0063	T1石垣前		15.0	1.7	14.8	540			9 縄目タタキ→ヨコナデ	瓦当面と胴部接合部にナデ、側縁・側面は玉縁状(19と同じ)	C-1
58	11-27	0265	南区	34.5	13.2	2.0	13.3	2240			縄目タタキ→一部ヨコナデ(瓦当面の近くヨコナデ)	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ、釘穴あり、側縁・側面は玉縁状	D-1
	11-28	0244	南区			1.8	13.6	1440			縄目タタキ→一部ヨコナデ(瓦当面の近くヨコナデ)	瓦当面と胴部接合部にヨコナデ、釘穴あり、側縁・側面は玉縁状	D-1
37	11-29	0256	T2		14.2	1.9	14.0	1560			布目圧痕→縄目タタキ	巴文に布目痕、側縁・側面は玉縁状、側縁内上面狭く内面に広い面取、瓦当外縁幅狭い、瓦当裏面の周縁部にナデ	D-1
32	11-30	0032	T1石垣前		13.1	1.9	14.0	1080			縄目タタキ→ヨコナデ	巴文に布目痕、凹面・側縁は玉縁状、釘穴あり、瓦当外縁狭い、瓦当裏面の周縁部にヨコナデ	D-1
38	11-31	0277	T2		13.6	1.8	13.4	1670			12 布目圧痕→ヨコナデ	釘穴を中から外にも開ける、瓦当裏面の周縁部にヨコナデ	D-3
57	11-32	0228	南区	34.6	12.9	1.8	13.6	1980			布目圧痕→縄目タタキ	窯印または釘穴の道具痕残る、文様平坦	D-2
30	11-33	0036	T1石垣前		13.3	2.1	14.0	1100			布目圧痕→ヨコナデ		D-3
41	11-34	0153	T3石垣前				13.4	440			不明	瓦当剥落部分に瓦当接合時のクシ目文あり	D(不明)
11	11-35	0148	T3石垣前				13.6	390					D(不明)
	11-36	0235	南区				13.4	160					D(不明)
	11-37	0245	南区		13.8	1.8	14.0	840			縄目タタキ→ヨコナデ		D-1
34	11-38	0050	T1石垣前				13.6	480			不明	文様平坦(32と同じ)	D(不明)
31	11-39	0057	T1石垣前		13.6	1.7	13.6	1140			布目圧痕→縄目タタキ	文様平坦、側縁玉縁状	D-2
	11-40	0061	T1石垣前	35.4	13.6	1.8	13.6	2220			縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり、成形不良	D-1
	11-41	接合(11-29)	南区					80				0269	接合
29	11-42	0042	T1石垣前	35.0	13.2	1.8	13.4	2410			12 布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり、成形不良	D-1
60	11-43	0465	南区				13.4	530			不明	文様平坦	D(不明)
	11-44	接合(11-29)	T2					1020				0403	接合
33	11-45	0085	T1石垣前				13.5	540			12 不明		D(不明)
	11-46	接合(11-29)	T2					160				0403	接合

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	径(cm)	重量(g)	家紋	珠文の数	内面調整	その他	類型				
40	11-48	0342	T1石垣前				13.0	100	連珠右巻三巴	12	不明		D(不明)				
59	11-49	0241	T3			2.1	13.6	730		(連珠右巻三巴)	12	不明		D-1			
15	11-50	0145	T1		13.6	2.0	15.0	2550	立沢瀉	17	布目圧痕→強いタテナデ		B-1				
16	11-51	0136	T1石垣前		14.0	1.9	15.8	1600		16	布目圧痕→強いタテナデ						
17	11-52	0297	T1				15.8	890		15	不明						
47	11-53	0274	南区				16.0	750		16	不明						
46	11-54	0246	南区				16.6	700		有	不明						
	11-55	0278	T2		13.4	2.6	16.0	1840		有	布目圧痕→強いタテナデ	成形不良					
48	11-56	0225	南区				15.8	1000		15	不明	52と同范					
45	11-57	0207	南区				16.0	430		15か	不明	52と同范					
44	11-58	0465	南区		15.0	2.6	16.4	2960		16	布目圧痕→強いタテナデ	成形不良					
18	11-59	0320	T1				16.0	430		有	不明						
	11-60	0247	南区				16.8	340			不明						
19	11-61	0107	T1石垣前				16.4	610			有	不明					
	11-62	0464	南区				16.6	240									
	11-63	0464	南区				16.4	370									
	11-64	0451	T5				17.4	150									
	11-65	0363	T1				14.4	80									
43	11-66	0226	南区		14.2	2.0	15.0	1440	無		不明	布目圧痕→タテナデ	内面に型(模骨)の木組(段)の痕あり	B-2			
21	11-67	0099	T1石垣前				15.0	350									
20	11-68	0050	T1石垣前				15.2	720								瓦当剥落部分に瓦当接合時のクシ目文あり	
49	11-69	0259	南区				15.0	700									
	11-70	0336	T1石垣前				14.8	100									
	11-71	0279	T2				16.0	160									
	11-72	0464	南区			2.0	13.2	480		連珠左巻三巴		(9)	不明			C-1	
	11-73	0052	T1石垣前				14.0	140		(連珠左巻三巴)		(9)	不明				
	11-74	0095	T1石垣前				14.0	80		連珠左巻三巴		(9)	不明				
	11-75	0340	T1				16.8	100		立沢瀉		有	不明			B-1	
	11-76	0463	南区				13.0	80				有	不明			不明	
	11-77	0192	T5			1.8	12.2	200		有	不明						
	11-78	0096	T1石垣前				14.4	120	(立沢瀉)	不明	不明		B(不明)				
	11-79	0159	T3石垣前				760	立沢瀉	不明	布目圧痕→タテナデ	内面に型(模骨)の木組(段)の痕あり						
	11-80	0041	T1石垣前				320		連珠三巴	不明	ヨコナデ	巴文の巻方向不明	CorD-3				
	11-81	0199	南区				440										
	11-82	0110	T1石垣前		15.0	2.8	840	立沢瀉	不明	布目圧痕→強いタテナデ		B(不明)					
	11-83	0361	T1			2.5	14.8	450	連珠三巴	不明	布目圧痕→棒状タタキか		C-2				
	11-84	0236	南区		14.7	2.8	1100	(立沢瀉)	(無)	布目圧痕→強いヨコナデ	内面に型(模骨)の木組(段)の痕あり	B-2					
	11-85	0215	南区				13.0	130		不明	不明		不明				
	11-86	0337	T1石垣前				13.4	60		不明	不明						
	11-87	0430	T3		14.4	2.1	500	(連珠左巻三巴)	(9)	布目圧痕→棒状タタキ		C-2					
	11-88	0203	南区			1.9	840	(連珠三巴)	不明	強いヨコナデ	巴文の巻方向不明	CorD-3					
	11-89	0086	T1石垣前			2.0	440			細目タタキ		巴文の巻方向不明	CorD-1				
	11-90	0125	T1石垣前		14.7	2.6	1820	立沢瀉	不明	布目圧痕→強いタテナデ	内面に型(模骨)の木組(段)の痕あり	B(不明)					
	11-91	0076	T1石垣前				350	連珠三巴	不明	細目タタキ→ヨコナデ	巴文の巻方向不明	CorD-1					
	11-92	0234	南区			2.4	860	立沢瀉	不明	タテナデ		B(不明)					
	11-93	0221	南区		13.7	1.8	1360	連珠三巴	不明	ヨコナデ	巴文の巻方向不明	CorD-3					
	11-94	0464	南区				350				布目圧痕→細目タタキ、ヨコナデ		巴文の巻方向不明	CorD-1			
	11-95	0214	南区		14	2.3	1060	立沢瀉	不明	強いタテナデ		B(不明)					
	11-96	0248	南区		14	2.6	1060										
	11-97	0123	T1石垣前		14	1.8	1960						(布目圧痕→棒状タタキ→一部ヨコナデ)		C-2		
	11-98	0102	T1石垣前		14	2.6	3580	(連珠左巻三巴)	(9)	布目圧痕→強いヨコナデ	吊り紐痕あり	C-3					
	11-99	0100	T1石垣前		14	1.4	1610	(連珠三巴)	不明	細目タタキ→ヨコナデ	巴文の巻方向不明、しぼった所に細目タタキ	CorD-1					
	11-100	0070	T1石垣前				240			ヨコナデ							
	11-101	0186	T3				300	立沢瀉	不明	タテナデ		B(不明)					

第4表 丸瓦観察表

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										文様	類型
12-1	0259	南区				500	細目タタキ→一部ヨコナデ		釘穴あり(成形不良)	連珠三巴	CorD-1
12-2	0244	南区				360					
12-3	0338	T1石垣前				200	不明			立沢瀉か	Bか
12-4	0270	南区			1.7	550	細目タタキ→一部棒状タタキ			離れ六ツ星	A
12-5	0032	T1石垣前		14.9	1.8	580	布目圧痕→棒状タタキ			連珠左巻三巴	C-2
12-6	0131	T1石垣前				770	不明			立沢瀉	B(不明)
12-7	0105	T1石垣前				240	布目圧痕→棒状タタキか			連珠左巻三巴	C-2
12-8	0216	南区				160	細目タタキ→ヨコナデ			連珠三巴	CorD-1
12-9	0461	南区				240	布目圧痕→細目タタキ				
12-10	接合(12-5)					240	不明	0059		不明	接合
12-11	0048	T1石垣前				540	布目圧痕→細目タタキ→棒状タタキ			離れ六ツ星	A
12-12	0215	南区				250	布目圧痕→細目タタキ→棒状タタキ				
12-13	0202	南区		15.7	1.8	540	(やや幅広の工具)				
12-14	0243	南区				820	布目圧痕→細目タタキ→棒状タタキ				
12-15	0271	南区		14.0	1.9	640					
12-16	0011	T1石垣前				280	布目圧痕→細目タタキ→一部ヨコナデ			連珠三巴	CorD-1
12-17	0294	南区				450					

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										文様	類型
62	12-18	0267	南区	33.3	16.5	2.0	730		釘穴あり		
	12-19	0065	T1石垣前				460	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	釘穴あり(丁寧な処理)	不明	E
61	12-20	0127	T1石垣前	34.6	17.0	1.8	2560		釘穴なし		
	12-21	0129	T1石垣前				600	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-22	0201	南区				120	布目圧痕→縄目タタキ			D-2
	12-23	0342	T1石垣前				220	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-24	0293	T1				560	縄目タタキ→一部ヨコナデ			
	12-25	0058	T1石垣前		13.5	1.8	590	細かい縄目タタキ→一部ヨコナデ	釘穴あり		CorD-1
	12-26	0048	T1石垣前				180				
	12-27	0340	T1				170	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E
	12-28	0143	T1		16.3	2.0	1340	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-29	0294	南区		16.7	1.9	1060	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-30	0191	T5		14.2	1.7	1140	縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり		
	12-31	0034	T1石垣前		13.5	2.0	1880	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-32	0239	南区				840	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ			
	12-33	0021	T1石垣前		17.3	2.4	1600	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	不明	不明	E
	12-34	0240	南区				260				
	12-35	0190	T5		15.5	1.8	860	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ			
	12-36	0019	T1石垣前		17.8	3.1	2550	強いヨコナデ	側縁は幅広の面取	連珠三巴	CorD-3
	12-37	0020	T1石垣前		16.8	2.1	1670	布目圧痕→強いヨコナデ			CorD-1
	12-38	0236	南区		13.5	1.7	1340	縄目タタキ→一部ヨコナデ	側縁は幅広の面取、釘穴あり(成形不良)	連珠三巴	CorD-1
	12-39	0361	T1				600		吊り紐痕あり		
	12-40	0291	T1		17.0	2.2	820	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-41	0015	T1石垣前				800				
	12-42	0287	T1				560	布目圧痕→タタキ(不明)	不明	不明	不明
	12-43	0020	T1石垣前		17.3	2.5	1080	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-44	0115	T1石垣前				240	細かい縄目タタキ→ヨコナデ			CorD-1
	12-45	0064	T1石垣前				860	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E
	12-46	0068	T1石垣前		15.9	2.2	1580	布目圧痕→縄目タタキ		連珠右巻三巴	D-2
	12-47	0209	南区		16.2	2.0	1060	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-48	0048	T1石垣前		14.0	2.0	1040	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	側縁は幅広の面取	不明	E
	12-49	0340	T1				300		側面は幅広の面取	離れ六ツ星	A
	12-50	0464	南区				440	縄目タタキ→ヨコナデ	側縁・側面は玉縁状、釘穴あり	連珠三巴	CorD-1
	12-51	0290	T1				540	布目圧痕→タテナデ	側面平坦、模骨の痕跡明瞭	立沢瀉	B-2
	12-52	0423	T3				640	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E
	12-53	0144	T1		15.8	2.2	1260	布目圧痕→強いヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-54	0466	南区				340	不明	不明	不明	不明
	12-55	0061	T1石垣前				200	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	側面幅広の面取	離れ六ツ星	A
	12-56	0252	T2		14.0	2.0	820	布目圧痕→縄目タタキ	側縁・側面は玉縁状	連珠右巻三巴	D-2
	12-57	0031	T1石垣前	33.3	15.3	2.4	2230	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-58	0035	T1石垣前	33.3	16.3	1.9	1960	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	側縁は幅広の面取	不明	E
	12-59	0069	T1石垣前				280	縄目タタキ→ヨコナデ			
	12-60	0211	南区				560	細かい縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり(成形不良)	連珠三巴	CorD-1
	12-61	0106	T1石垣前			2.0	720	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-62	0288	T1		18.2	1.8	2140	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E
	12-63	0408	T2		16.0	2.0	1420	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-64	0464	南区				240	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-65	0122	T1石垣前				240	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-66	0363	T1			2.0	970	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-67	0430	T3				330				
	12-68	0471	南区				230	不明	不明	不明	不明
	12-69	0228	南区				220	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ		不明	E
	12-70	0228	南区				330	縄目タタキ→ヨコナデ	側縁は幅広の面取	連珠三巴	CorD-1
	12-71	0338	T1石垣前				420	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-72	0341	T1				240	不明	不明	不明	不明
	12-73	0341	T1				320	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-74	0228	南区		14.9	1.9	570	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	釘穴あり、外面ミガキ調整	不明	E
	12-75	0196	南区				500	縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり(成形不良)		CorD-1
	12-76	0424	T3				260	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-77	0247	南区				280	縄目タタキ→ヨコナデ	側縁は幅広の面取	連珠三巴	CorD-1
	12-78	0342	T1石垣前				360		側縁・側面は玉縁状		
	12-79	0196	南区		13.2	1.7	900	布目圧痕→ヨコナデ	釘穴あり		CorD-3
	12-80	0342	T1石垣前				330	粗い縄目タタキ	側縁・側面は玉縁状	連珠右巻三巴	D-2
	12-81	0288	T1				370	ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-82	0430	T3				150				
	12-83	0217	南区			2.0	950	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E
	12-84	0431	T3				140				
	12-85	0408	T2	25.3	13.0	1.8	1340				
	12-86	0408	T2	23.3	14.5	2.0	1160		尾部すばみ形、側縁・側面は玉縁状		
	12-87	0242	南区	24.7	13.1	1.7	1280	細かい縄目タタキ→ヨコナデ			CorD-1
	12-88	0010	T1石垣前	23.8	13.8	1.7	1300		尾部すばみ形、側縁・側面は玉縁状、吊り紐痕か		
	12-89	0212	南区	25.0	13.0	1.7	1060		側縁・側面は玉縁状	連珠三巴	
	12-90	0023	T1石垣前	26.7	13.3	1.7	800	不明	側縁・側面は玉縁状		
	12-91	0338	T1石垣前				180	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-92	0338	T1石垣前				420	縄目タタキ→一部ヨコナデ			
	12-93	0200	南区			1.9	580				CorD-1
	12-94	0056	T1石垣前				600	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ	側縁・側面は玉縁状		
	12-95	0071	T1石垣前		14.3	2.5	1220	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B(不明)
	12-96	0277	T2		15.6	2.0	1370	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	不明	不明	E
	12-97	0128	T1石垣前				850				
	12-98	0079	T2石垣前				500	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										文様	類型
	12-99	0228	南区			2.1	730	強いタテナデ	側縁・側面は玉縁状	立沢瀉	B-1
	12-100	0109	T1石垣前			2.2	740	強いヨコナデ			CorD-3
	12-101	0149	T3石垣前				720	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-102	0249	南区			1.7	560	棒状タタキ→一部ヨコナデ (やや幅広いの工具と狭い棒状工具の2種類の痕跡あり)		連珠左巻三巴	C-2
	12-103	0342	T1石垣前				150	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-104	0261	南区			1.9	680	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-105	0070	T1石垣前				240	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-106	0037	T1石垣前	12.5	2.0		1020	布目圧痕→縄目タタキ		連珠右巻三巴	D-2
	12-107	0072	T1石垣前				330	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-108	0210	南区	12.9	1.5		560	縄目タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E
	12-109	0072	T1石垣前	15.5	2.0		1000	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-110	0206	南区			1.6	520	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E
	12-111	0228	南区	13.0	1.5		700	縄目タタキ→ヨコナデ			
	12-112	0199	南区			1.4	500	縄目タタキ→ヨコナデ			CorD-1
	12-113	0060	T1石垣前			1.9	440	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-114	0464	南区			2.0	630	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-115	0268	南区				550	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-116	0094	T1石垣前				440	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-1
	12-117	0024	T1石垣前			2.0	520	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ	側縁・側面は玉縁状	不明	不明
	12-118	0338	T1石垣前				140	不明	不明	不明	不明
	12-119	0218	南区	13.3	2.1		1600	布目圧痕→強いタテナデ	釘穴あり (成形不良)、吊り紐痕あり	立沢瀉	B-1
	12-120	0230	南区	13.1	2.1		830	布目圧痕→強いタテナデ	釘穴あり、吊り紐痕あり		
	12-121	0218	南区	13.2	2.3		740	布目圧痕→タテナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-122	0052	T1石垣前	13.8	1.8		420	縄目タタキ→ヨコナデ	尾部すぼみ形、吊り紐痕あり		
	12-123	0196	南区	8.6	1.6		90	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-124	0298	南区	13.1	2.8		420	布目圧痕→タテナデ			
	12-125	0232	南区				250	縄目タタキ→ヨコナデ	尾部すぼみ形	連珠三巴	CorD-1
	12-126	0053	T1石垣前				340	布目圧痕→ヨコナデ			
	12-127	0062	T1石垣前				200	布目圧痕→ヨコナデ		連珠右巻三巴	D-3
	12-128	0165	T3石垣前				220	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり	立沢瀉	B-1
	12-129	0261	南区	13.6	2.5		690	布目圧痕→タテナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-130	0238	南区	13.0	1.8		760	縄目タタキ→ヨコナデ	尾部すぼみ形		
	12-131	0207	南区	13.9	1.7		730	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-132	0423	T3				180	布目圧痕→タテナデ			
	12-133	0097	T1石垣前				250	縄目タタキ→ヨコナデ	尾部すぼみ形	連珠三巴	CorD-1
	12-134	0430	T3			1.7	450	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり		
	12-135	0055	T1石垣前			1.8	570	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり、吊り紐痕あり		
	12-136	0155	T3石垣前				360	タテナデ	釘穴あり	立沢瀉	B-1
	12-137	0464	南区				350	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり、吊り紐痕あり		
	12-138	0022	T1石垣前			1.6	500	縄目タタキ→ヨコナデ	釘穴あり	連珠三巴	CorD-1
	12-139	0054	T1石垣前	13.9	1.7		690	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり、吊り紐痕あり		
	12-140	0219	南区	13.5	2.1		610	タテナデ	釘穴あり	立沢瀉	B-1
	12-141	0266	南区	14.2	2.3		1150	布目圧痕→タテナデ	釘穴あり		
	12-142	0464	南区			1.9	480	タテナデ	吊り紐痕あり		
	12-143	0337	T1石垣前				120	細かい縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-144	0268	南区				120	タテナデ	吊り紐痕あり	立沢瀉	B-1
	12-145	0124	T1石垣前	13.6	2.8		680	布目圧痕→縄目タタキ			
	12-146	0189	T5	15.2	2.1		1110	布目圧痕→縄目タタキ		連珠右巻三巴	D-2
	12-147	0342	T1石垣前				200	布目圧痕→タテナデ			
	12-148	0257	T2	14.8	2.1		1240	布目圧痕→タテナデ			
	12-149	0025	T1石垣前				380	布目圧痕→縄目タタキ		立沢瀉	B(不明)
	12-150	0430	T3				110	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-151	0431	T3				270	布目圧痕→タテナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-152	0430	T3				330	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠左巻三巴	C-2
	12-153	0340	T1				230	棒状タタキ→ヨコナデ		立沢瀉	B-1
	12-154	0430	T3				250	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり		
	12-155	0431	T3				90	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E
	12-156	0336	T1石垣前				110	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-157	0464	南区				230	布目圧痕→棒状タタキ (一部幅広いの板状)→ヨコナデ		連珠左巻三巴	C-2
	12-158	0044	T1石垣前			2.0	480	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-159	0247	南区				140	布目圧痕→縄目タタキ		連珠右巻三巴	D-2
	12-160	0338	T1石垣前				90	不明			B-1
	12-161	0338	T1石垣前				200	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-2
	12-162	0339	T1				200	布目圧痕→タテナデ	楔骨の痕跡明瞭		
	12-163	0461	南区				350	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E
	12-164	0336	T1				150	不明		立沢瀉	B-1
	12-165	0147	T1				260	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-166	0431	T3				140	細かい縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-167	0431	T3				250	タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-168	0431	T3				260	布目圧痕→棒状タタキ (一部幅広いの板状)		連珠左巻三巴	C-2
	12-169	0342	T1石垣前				180	細かい縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-170	0061	T1石垣前	15.0	3.1		1080	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり	立沢瀉	B-1
	12-171	0263	南区				220	布目圧痕→縄目タタキ→一部棒状タタキ			
	12-172	0466	南区				200	布目圧痕→縄目タタキ		離れ六ツ星	A
	12-173	0342	T1石垣前				150	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ			
	12-174	0342	T1石垣前				280	縄目タタキ→一部ヨコナデ			
	12-175	0069	T1石垣前				180	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-176	0341	T1				180	布目圧痕→ヨコナデ			CorD-3
	12-177	0471	南区			2.5	630	縄目タタキ→ヨコナデ			CorD-1
	12-178	0211	南区				230	布目圧痕→タテナデ			
	12-179	0232	南区				510	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-180	0294	南区			2.5	650	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり		
	12-181	0044	T1石垣前			1.8	470	布目圧痕→縄目タタキ		連珠三巴	CorD-1

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										文様	類型
	12-182	0092	T1石垣前				290	布目圧痕→縄目タタキ→一部ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-183	0073	T1石垣前		15.0	2.4	1050	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり	立沢瀉	B-1
	12-184	0073	T1石垣前				160	布目圧痕→縄目タタキ→一部棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-185	0361	T1				150	縄目タタキ→ヨコナデ	吊り紐痕あり		
	12-186	0204	南区				380		釘穴あり	連珠三巴	CorD-1
	12-187	0052	T1石垣前				330	縄目タタキ→一部ヨコナデ			
	12-188	0201	南区				300	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E
	12-189	0255	T2				400	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-190	0069	T1石垣前				170	布目圧痕→縄目タタキ→一部棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-191	0247	南区				150	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-192	0247	南区		12.3	2.2	790	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり、外面に格子状の痕跡(被熱か)	立沢瀉	B-1
	12-193	0185	T3				580		吊り紐痕あり、模骨の痕跡明瞭		
	12-194	0431	T3				150	縄目タタキ→ヨコナデ	吊り紐痕あり、釘穴あり	連珠三巴	CorD-1
	12-195	0423	T3				40	不明	不明	不明	不明
	12-196	0121	T1石垣前				180	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-197	0183	T1石垣・石列間			2.4	590				
	12-198	0257	T2				250	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-199	0464	南区				610	布目圧痕→縄目タタキ→一部棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-200	0408	T2		13.5	2.7	1400		吊り紐痕あり		
	12-201	0464	南区			2.3	500	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり、模骨の痕跡明瞭、釘穴あり	立沢瀉	B-1
	12-202	0251	T2		13.3	2.2	820				
	12-203	0261	南区				150	縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-204	0464	南区				200	布目圧痕→タテナデ	模骨の痕跡明瞭、釘穴あり	立沢瀉	B-1
	12-205	0205	南区				290	布目圧痕→縄目タタキ→一部棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-206	0292	T1				410	布目圧痕→タテナデ		立沢瀉	B-1
	12-207	0464	南区				290				
	12-208	0113	T1石垣前			1.7	430	布目圧痕→縄目タタキ→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-1
	12-209	0076	T1石垣前				220				
	12-210	0430	T3				230	布目圧痕→縄目タタキ→棒状タタキ		離れ六ツ星	A
	12-211	0089	T1石垣前				100	布目圧痕→ヨコナデ		連珠三巴	CorD-3
	12-212	0291	T1			3.1	460	布目圧痕→タテナデ	吊り紐痕あり	立沢瀉	B-1
	12-213	0263	南区		13.3	2.6	870				
	12-214	0026	T1石垣前		17.0	1.8	950	縄目タタキ→一部ヨコナデ			
	12-215	0074	T1石垣前				210			連珠三巴	CorD-1
	12-216	0466	南区				200	縄目タタキ→ヨコナデ			
	12-217	0257	T2				350	布目圧痕→縄目タタキ		連珠右巻三巴	D-2
	12-218	0464	南区				180				
	12-219	0464	南区				210		模骨の痕跡明瞭	立沢瀉	B-2
	12-220	0451	T5				260	布目圧痕→タテナデ			
	12-221	0279	T2				330				B-1
	12-222	0232	南区				370				

第5表 軒平瓦観察表

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	文様	特徴・調整等
73	21-1	0240	南区	55.5	29.5	2.8	6460	三葉文唐草文	縦横比率0.53(縦長)、瓦当上縁の面取なし、瓦当裏面の平瓦接合部のヨコナデ顕著、平瓦部もナデ、胎土に砂粒を多く含む(ザラついている、大きな礫は入らない)
	21-2	0240	南区			2.1	380	文様不明	左側端部のみ残存
72	21-3	0282	T2	53.0	29.5	3.8	8370	三葉文唐草文	縦横比率0.55(縦長)、瓦当上縁の面取なし、瓦当裏面の平瓦接合部のヨコナデ顕著、平瓦部もナデ、胎土に砂粒を多く含む(ザラついている、大きな礫は入らない)
67	21-4	0116	T1石垣前	29.0	25.5	1.5	2460	中心五花弁唐草文	瓦当上縁に面取あり(中央部の幅広く、端部の幅狭い)、瓦当面表面の両端に面取あり、瓦当裏面の平瓦接合部に強いヨコナデ、平瓦部もナデ、器面のザラつき顕著(砂粒・礫の混入)、1cm大の礫混入し器面にヒビ割れが生じる調整技法や文様などから出土中最古の軒平瓦(石川氏の段階か)
64	21-5	0338	T1				370		
65	21-6	0114	T1石垣前			3.0	1930	三葉文唐草文	瓦当上縁の面取なし、瓦当裏面の平瓦接合部のヨコナデ顕著、平瓦部もナデ、胎土に砂粒を多く含む(ザラついている、大きな礫は入らない)
66	21-7	0142	T1石垣前			2.9	1280		
70	21-8	0272	南区	32.8		2.0	2200	中心三葉文唐草文	瓦当上縁部に等間隔の面取あり、瓦当裏面と平瓦接合部にヨコナデ、平瓦部はほとんどナデなし、胎土焼成堅く緻密、器面は滑らか
69	21-9	0280	T2		30.0	3.0	3700	三葉文唐草文	瓦当上縁の面取なし、瓦当裏面の平瓦接合部のヨコナデ顕著、平瓦部もナデ、胎土に砂粒を多く含む(ザラついている、大きな礫は入らない)
68	21-10	0408	T2			2.7	560		
63	21-11	0345	T1				150	中心三葉文唐草文	瓦当中央部のみ残存、瓦当上縁部に等間隔の面取あり、胎土焼成堅く緻密、器面は滑らか
	21-12	0341	T1				200	文様不明	右側端部のみ残存

第6表 平瓦観察表

図 No.	ID 番号	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土の特徴	分類	
	22-1	0231	南区	27.3		2.0	1100			
	22-2	0231	南区				420			
	22-3	0264	南区				180			
	22-4	0112	T1 石垣前			1.8	660	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-5	0233	南区			2.0	580			
	22-6	0118	T1 石垣前			1.9	460			
	22-7	0108	T1 石垣前				360			
	22-8	0103	T1 石垣前			1.8	300			
	22-9	0117	T1 石垣前				400			
	22-10	0111	T1 石垣前		2.4	720	器面のザラつき顕著 (砂礫を多く含む)、1cm大の礫が混入し器面のヒビ割れが目立つ			ア
	22-11	0104	T1 石垣前			1.8				
	22-12	0247	南区			3.1	820	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-13	0423	T3			1.8	340			
	22-14	0340	T1				360	器面のザラつき顕著 (砂礫を多く含む)、1cm大の礫が混入し器面のヒビ割れが目立つ	ア	
	22-15	0238	南区			1.8	500			
	22-16	0287	T1				680	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-17	0237	南区			2.4	820			
	22-18	0141	T1 石垣前				840			
	22-19	0340	T1				340			
	22-20	0423	T3				300			
	22-21	0163	T3 石垣前				620			
	22-22	0049	T1 石垣前	28.1		2.0	1030			
	22-23	0423	T3				630			
	22-24	0027	T1 石垣前	26.2		2.4	1080	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-25	0285	T1	31.0		2.4	1720	器面のザラつき顕著 (砂礫を多く含む)、1cm大の礫が混入し器面のヒビ割れが目立つ	ア	
	22-26	0087	T1 石垣前				610	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-27	0285	T1		24.0	2.0	1400			
	22-28	0043	T1 石垣前				540			
	22-29	0229	南区	28.8		2.0	980			
	22-30	0132	T1 石垣前				820			
	22-31	0268	南区				340			
	22-32	0229	南区			2.0	760			
	22-33	0052	T1 石垣前				600			
	22-34	0135	T1 石垣前				560			
	22-35	0281	T2			2.7	1090			
	22-36	0046	T1 石垣前				370			
	22-37	0269	南区	28.2		2.0	1160			
	22-38	0012	T1 石垣前				620			
	22-39	0016	T1 石垣前	27.7		1.8	1090			
	22-40	0046	T1 石垣前				360			
	22-41	0428	T3				310			
	22-42	0126	T1 石垣前			1.8	700	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-43	0014	T1 石垣前	28.1		2.2	1320	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-44	0198	南区				340			
	22-45	0033	T1 石垣前			2.0	980			
	22-46	0017	T1 石垣前	29.0		2.1	1190			
	22-47	0295	南区	29.6		2.0	1370			
	22-48	0300	南区				430			
	22-49	0038	T1 石垣前			2.0	1190			
	22-50	0299	南区			2.0	770			
	22-51	0461	南区				320			
	22-52	0461	南区				400			
	22-53	0292	T1				620	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む、凹部に横方向の明瞭なナデあり	イ	
	22-54	0039	T1 石垣前	28.0		2.2	1000	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-55	0461	南区				260			
	22-56	0461	南区				320			
	22-57	0463	南区				420	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-58	0253	T2				240	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-59	0253	T2			2.6	970	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-60	0253	T2				230	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-61	0296	南区			1.7	620	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-62	0223	南区			1.9	690			
	22-63	0295	南区				250			
	22-64	0223	南区	30.4		2.0	1090			
	22-65	0342	T1				350			
	22-66	0013	T1 石垣前			2.1	1320			
	22-67	0342	T1				270			
	22-68	0247	南区			2.0	680			
	22-69	0335	T1				450			
	22-70	0335	T1			1.9	710	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-71	0275	T2	31.6		1.7	1350	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-72	0276	T2	27.6		2.2	1180			
	22-73	0244	南区				500			
	22-74	0130	T1 石垣前			2.0	720	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-75	0137	T1 石垣前				900	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ	
	22-76	0011	T1 石垣前			1.8	600			
	22-77	0193	T5				360			
	22-78	0161	T3 石垣前				480			
	22-79	0283	T2	28.7		2.0	1460			
	22-80	0067	T1 石垣前				370			
	22-81	0066	T1 石垣前			2.0	920			
	22-82	0284	T2				370			
	22-83	0284	T2				520			
	22-84	0140	T1 石垣前				1130	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ	

図 No.	ID 番号	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土の特徴	分類
	22-85	0286	T1				360	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	
	22-86	0134	T1 石垣前	29.0		2.0	960	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-87	0028	T1 石垣前	28.0		1.5	800		
	22-88	0029	T1 石垣前				590		
	22-89	0260	南区	28.0		2.0	930		
	22-90	0139	T1 石垣前			1.9	590		
	22-91	0429	T3				520	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-92	0289	T1				960	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-93	0006	T1				380	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-94	0289	T1				610		
	22-95	0254	T2			1.8	1050		
	22-96	0040	T1 石垣前			2.3	930		
	22-97	0119	T1 石垣前				460		
	22-98	0120	T1 石垣前				660		
	22-99	0222	南区			1.9	940		
	22-100	0222	南区				440		
	22-101	0222	南区			1.6	770		
	22-102	0222	南区				450		
	22-103	0250	T2	28.2		2.0	1050		
	22-104	0250	T2				190		
	22-105	0408	T2				480		
	22-106	0408	T2				420		
71	22-107	0280/0258	T2/南区	29.3		2.6	3020		
	22-108	0280	T2				150	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	
	22-109	0408	T2				770		
	22-110	0240	南区	31.8		2.0	1660		
	22-111	0240	南区				1000		
	22-112	0240	南区				630		
	22-113	0068	T1 石垣前				520		
	22-114	0424	T3				490		
	22-115	0424	T3				200	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-116	0424	T3				260	器面のザラつき顕著 (砂礫を多く含む)、1cm大の礫が混入し器面のヒビ割れが目立つ	ア
	22-117	0424	T3				150		
	22-118	0228	南区				420	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-119	0228	南区			1.6	630		
	22-120	0205	南区				580		
	22-121	0293	T1				320	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-122	0408	T2			3.0	670		
	22-123	0341	T1				450	器面のザラつき顕著 (砂礫を多く含む)、1cm大の礫が混入し器面のヒビ割れが目立つ、凸面にヨコナデあり	ア
	22-124	0341	T1				450	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-125	0217	南区				410		
	22-126	0279	T2			2.0	700		
	22-127	0279	T2			2.3	730	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-128	0464	南区				400	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-129	0464	南区				120	不明	不明
	22-130	0279	T2			3.0	440	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-131	0464	南区				350		
	22-132	0464	南区				420		
	22-133	0465	南区				570		
	22-134	0465	南区	28.4		2.0	3230	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-135	0280	T2				500		
	22-136	0280	T2				250		
	22-137	0280	T2			1.9	800		
	22-138	0213	南区				550	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-139	0213	南区				370		
	22-140	0258	南区				400		
	22-141	0258	南区				580	器面はザラついている、胎土中に砂粒を多く含む	イ
	22-142	0213	南区			2.0	810	胎土焼成ともに緻密で堅い、器面は滑らか	ウ
	22-143	0443	T4				280		
	22-144	0425	T3				470		
	22-145	0425	T3				250		

3 石器・石製品（第25図、第7表）

合計6点の石器・石製品が出土した。内訳は、硯1点、砥石2点、敲石1点、二次加工ある剥片1点、石核1点がある。このうち近世ないし近代に帰属する可能性のあるものを中心に3点を図示した。

1は、粘板岩製の硯で、墨池部が欠損し、全体的に鉄分が付着している。平面形は、外・内両側とも長方形を呈す。陸部中央の窪みは使用によるものと考えられる。2は、緑色凝灰岩製の砥石である。砥面は1面あり、使用により若干内湾している。裏面は、幅0.4mm程度のノミ痕が多数観察される。また、側面にはノコギリによる切断痕と思われる細かい線状痕が観察され、未使用面である。石材から仕上げ砥であろう。3は、頁岩製の砥石である。長軸に半分折れているが、砥面が4面に渡ることが確認できる。小口面には円盤ノコギリによる切断痕と思われる線状痕がみられる。

第7表 石器・石製品一覧表

図No.	ID	出土地点		器種	石材	寸法			重量(g)	破損状況	備考
		トレンチ	地点			最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)			
1	1	T1	攪乱	硯	粘板岩	(10.70)	7.84	2.55	330.3	墨池部折れ	墨堂部窪む、縁辺付近に墨汁残存
2	2	T1	攪乱	砥石	緑色凝灰岩	(17.60)	7.04	3.32	727.8	両端折れ	砥面1面、裏面ノミ整形痕あり(ノミ幅約0.4mm)、側面切断痕有
4	T1	攪乱	敲石	砂岩	(13.77)	6.07	5.37	572.1	下半折れ	敲部1端	
5	T2	攪乱	RF	チャート	2.07	1.99	0.53	1.7		2側縁に二次加工	
3	3		排土	砥石	頁岩?	(7.24)	5.52	3.64	263.8	上半折れ	砥面4面、小口円盤ノコギリ切断痕?有
6			排土	石核	チャート	7.32	4.84	2.31	83.7		打面3面

※寸法欄の()は現存値をあらわす。

4 金属製品（第25図、第8表）

金属製品は18点出土している。種別は釘、小柄、煙管、銭貨、滓、不明品がある。このうち、層位や出土地点から近世に帰属する可能性のあるものを中心に、10点を図化した。銭貨については残存状態が悪く、図化提示はできなかった。

瓦釘 1・2は長さが20cm以上あり、頭部が鍵状になっているもので、瓦を固定するために使用したのと考えられる。1は、瓦に刺さった状態で出土している。

釘 3～8は角釘で頭巻釘である。いずれも板材に刺さった状態で出土した。7は湾曲した状態で出土しており、釘抜きによって湾曲した可能性が考えられる。

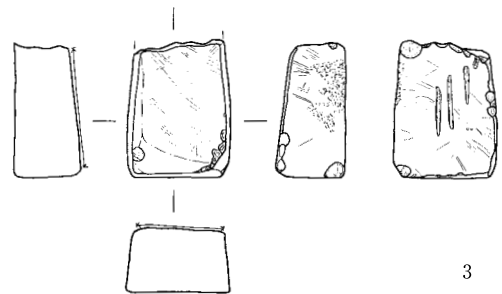
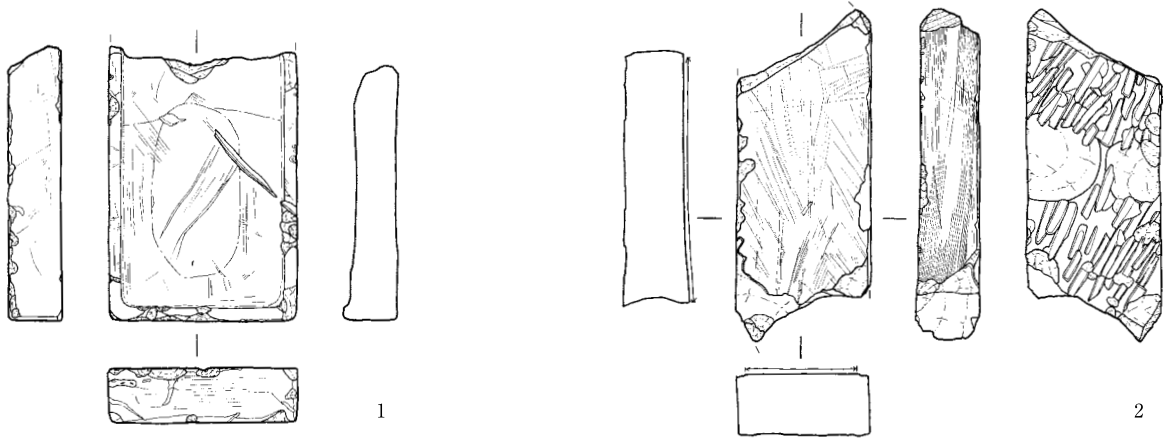
小柄 1点(9)が出土した。柄部分には、金鍍金が施されており、草花の装飾が見られる。刃部の残存長さは10.4cmである。

煙管 10は煙管の雁首部分であるが、火皿が欠損している。材質は銅とみられ、わずかに金鍍金が残存している。

銭貨 3点出土した。銭種は熙寧元宝、開元通宝、元豊通宝である。

第8表 金属製品一覧表

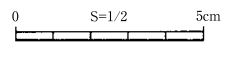
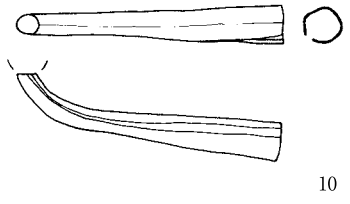
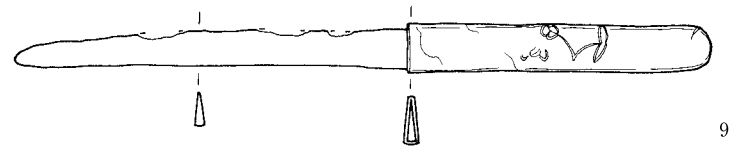
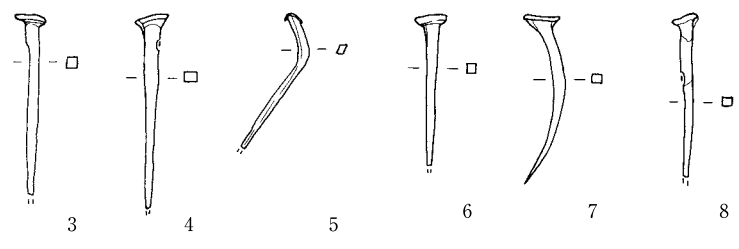
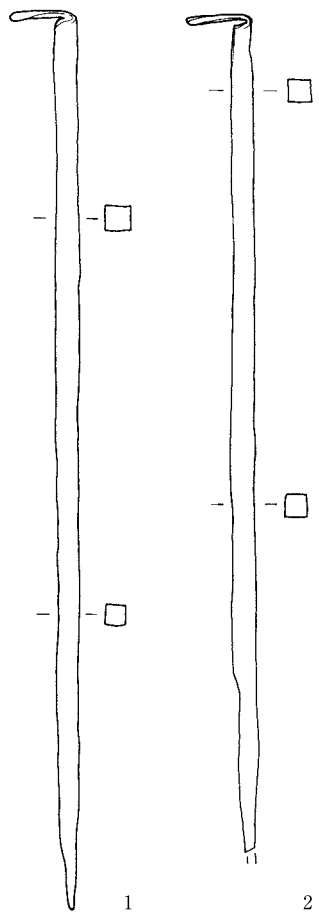
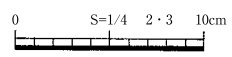
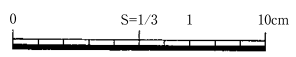
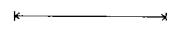
図No.	ID	トレンチ	地点	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	金属種別	備考
1	11	南区	石垣前	瓦釘	238.5	7.1	7.0	57.8	Fe	
2	14	T2	石垣前	瓦釘	222.2	7.0	6.4	59.1	Fe	
3	2	T1	石垣前	釘	48.2	4.5	3.1	1.3	Fe	
4	3	T1	石垣前	釘	52.2	3.5	3.1	2.0	Fe	頭巻釘
5	4	T1	石垣前	釘	40.7	2.2	2.2	1.4	Fe	頭巻釘 湾曲している
6	5	T1	石垣前	釘	40.0	3.0	2.8	1.7	Fe	頭巻釘 脚部先端欠損
7	6	T1	石垣前	釘	46.3	2.7	2.4	1.7	Fe	頭巻釘 湾曲している
8	7	T1	石垣前	釘	43.8	3.3	2.3	1.1	Fe	頭巻釘が潰れているように見える
9	10	T3	石垣根固め	小柄	184.3	12.7	4.2	24.1	Fe・Cu	
10	15	T3	裏込め上層	煙管	71.4	10.7	9.8	5.9	Cu	雁首
	9	T1	枅形・整地層	熙寧元宝	23.4	23.3	1.0	2.3	Cu	
	12	T1	整地層	開元通宝	23.3	23.1	1.0	2.3	Cu	
	13	T1	整地層	滓	-	-	-	47.0	Fe	
	8	T1	石垣前	元豊通宝	24.3	24.3	1.3	3.7	Cu	
	17	T1	石垣前	不明	81.2	13.0	7.2	11.9	Cu	
	18	T1	石垣前	不明	10.6	10.3	0.6	0.1	Cu	
	1	T2	整地層	不明	47.7	14.5	6.8	11.7	不明	桶蓋と共に出土
	16	T3	裏込め上層	釘?	78.2	2.9	2.9	2.8	Fe	丸釘か



附着物



紙面範囲



第25図 石器・石製品、金属製品

5 木製品・植物繊維製品（第26・27図、第9表）

今回の調査では、55点の木製品と1点の植物繊維製品が出土した。そのうち、完形品や用途が明瞭であるものを中心21点図化し、概要を記す。以外のもの一覧表を参照されたい。木製品は、層位から近世末～現代に廃棄されたと考えられるが、大半は製作時期は不明である。これらのうち、総堀の埋め土からの出土量は45点で、木製品全体の81.8%を占める。残りの10点は近代の建物基礎～現代造成土から出土している。

漆器（1・2） 1は、内面に朱漆、外面から底面にかけて黒漆が塗られている椀である。底部が厚く、口縁にむけて薄くなっていく。2は、内外面に朱漆が塗られている椀蓋である。

曲物（3） 3は、側板のみ残存し、両面に黒漆が塗られている。接合部に樺皮が残る。

円板（4～7） 曲物または桶・樽の底板と考えられるものを総称して円板とした。4・5は直径9～11cmの曲物の底板である。4は、カキゾコ状を呈しているが、釘孔や樺皮綴じ孔はみられない。5は、クレゾコで樺皮綴じ孔はみられるものの、釘孔は確認できない。6は、湾曲してない方の側面に竹釘が残る、接合式の円板である。片面に墨書がみられ、もう片面には削り調整が確認できる。7は、両面に墨書がみられ、中央付近に指頭圧痕と考えられる痕跡がある。側面等に釘孔等はみられない。

桶（8） 結桶の側板が1枚出土した。厚さ1.1cmの湾曲した板材で、内外面に加工痕が観察される。表面に線状痕が確認できる。

栓（9） 9は、削り出しによって截頭円錐形状に製作された栓である。

差歯下駄（10） 10は、前部が欠損しており、鼻緒孔がわずかに残る。台部形状は長円形を呈し、幅が6.0cmと狭く、後歯は後歯より前にある。台裏に柄孔がみられないことから、陰卵下駄であると思われる。

箸（11～14） 11～13は竹製である。削り調整はほとんどみられない。断面形はいずれも長方形に近い。14は白木箸で、やや粗めに削り出されている。断面形は六角形である。

木札（15） 一方の端部は剣先状に削られている。片面のみに削り調整が施されている。墨書は確認できなかった。

短冊状木製品（16～18） 16～18は、片面あるいは両面に削り調整が施されている。16は5cm前後の間隔で3か所に木釘もしくは釘孔が観察される。

刷毛（第27図19） 刷毛の幅は6.8cm（2寸5分幅）あり、平面形は筋違い形である。刷毛固定部の中央付近には木釘が残存し、朱色顔料の付着が確認できる。また、柄の下半に指頭圧痕が何か所もみられるため、比較的よく使い込まれたものと推測される。

その他木製品（種別不明品）（20・21） 20は、厚さ2.2cmの板材で、中央に直径2.6～2.8cmの孔が削り貫かされている。孔の内側に釘が刺さっており、孔周辺は鉄分が付着していることから、鉄製のものが孔に差し込まれていた可能性が考えられる。21は、上端から下端までの径がほぼ同じで、円柱状を呈する。両端ともに面取り加工が施されている。

草鞋か T1の整地土から鼻緒履物が1点出土した。取り上げに関しては、形状を保持し取り上げることが困難であったため、周辺の土ごと採取した。その後、（株）文化財ユニオンに委託し、保存処理を行った。処理手順は、①表面のクリーニング、②劣化防止などのため薬品を塗布含浸、③取り上げの際に生じた割れを接合、クラック部を擬土で補填、④擬土部分の補彩である。図化が困難であるため、写真のみ掲載をした。腐食がかなり進み、観察が困難であったため、詳細は判然としない。台部の寸法は長さ25.5cm、幅12.2cmを測る。台部の下部と側部から紐状痕跡が確認できることから、草鞋類を想定できる。また、踵部分のカエシや着装のための乳は不明である。

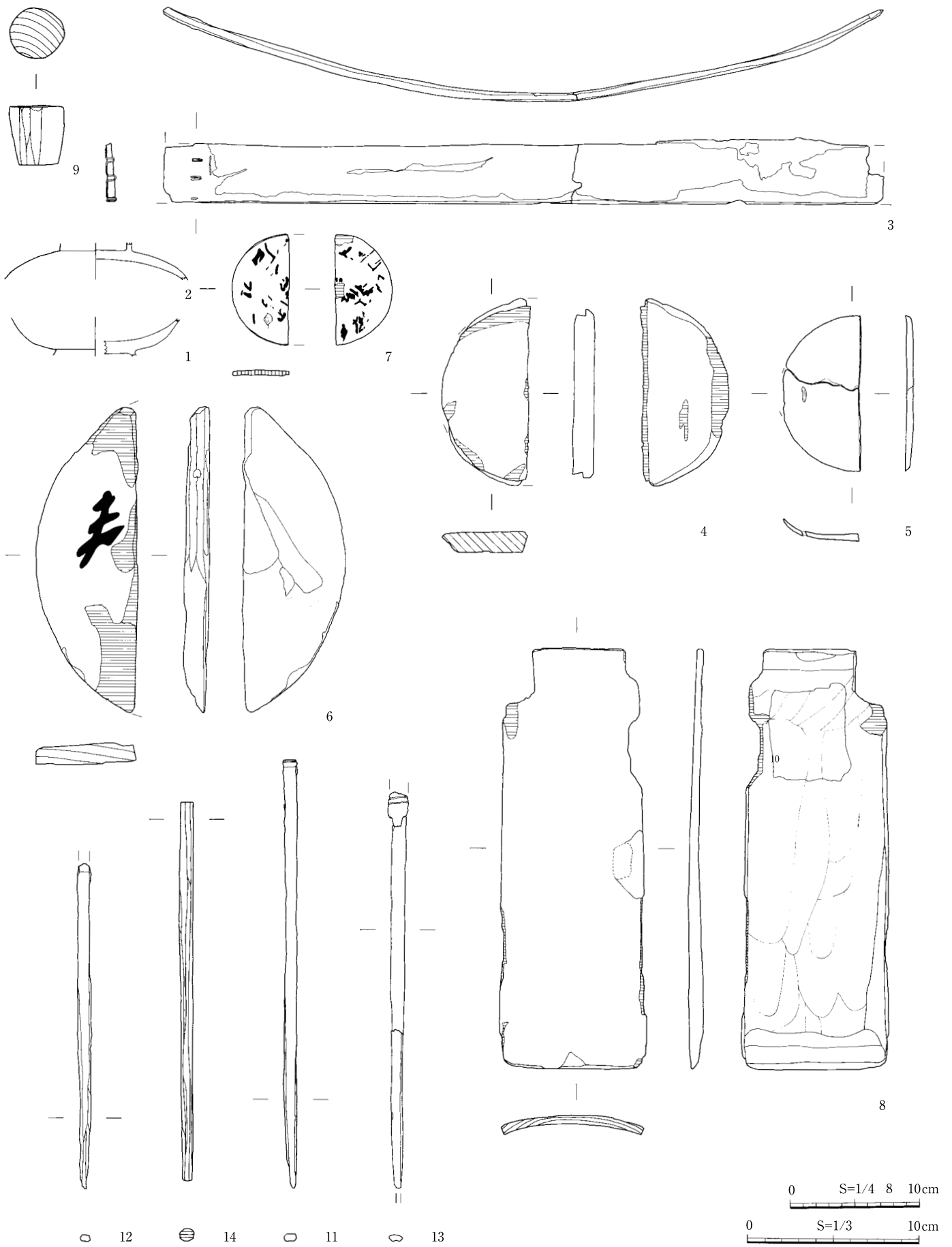
<参考文献>

江戸遺跡研究会 [編] 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』

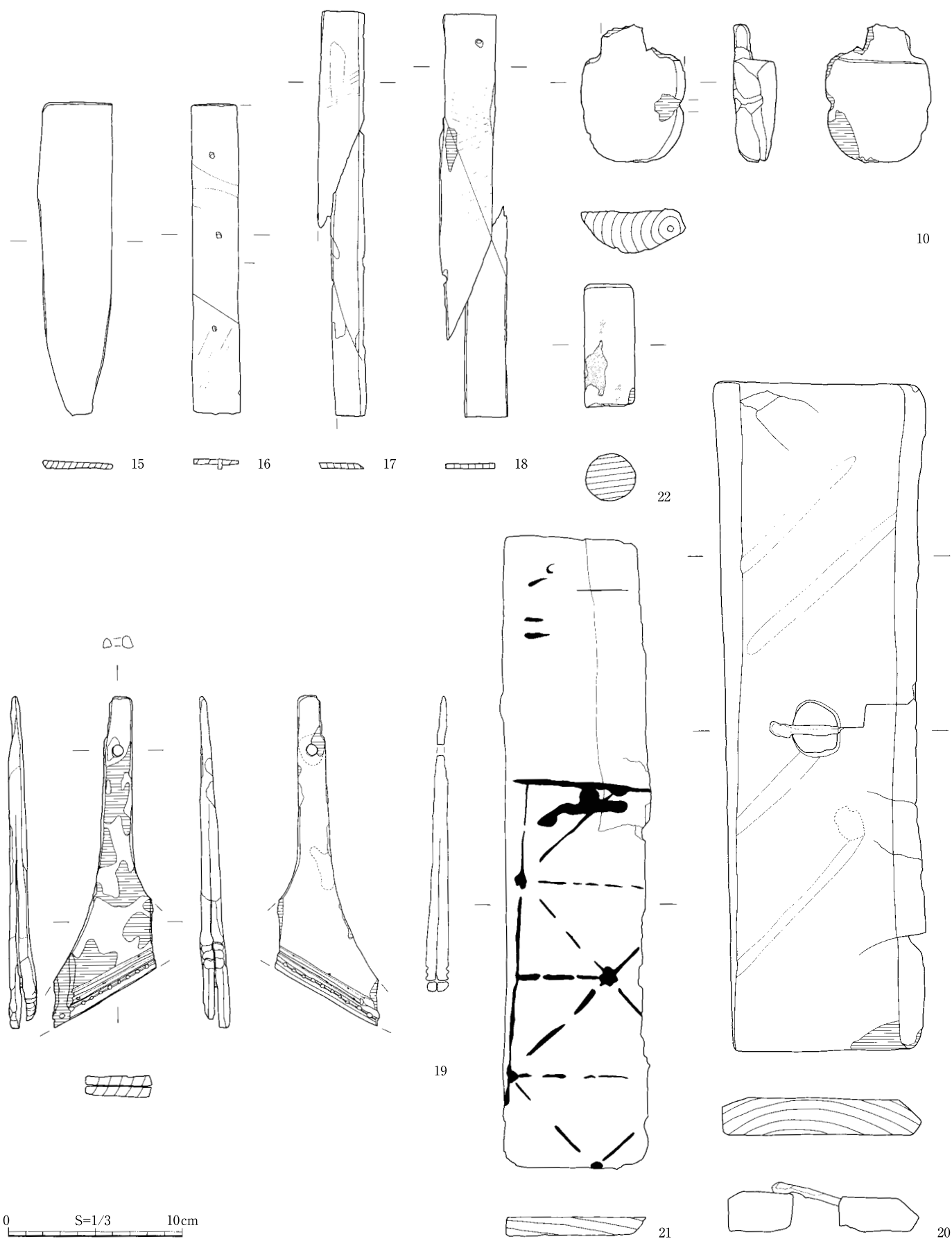
第9表 木製品・植物繊維製品観察表

図No.	ID	トレンチ/地区	地点	器種	手法	長・口径 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	破損状況	備考
1	18	T1	堀埋土	漆碗	挽物	高台径 (4.6)		高 (2.2)	2/3 欠損	内面赤漆 外面黒漆
6	1	T1	堀埋土 No.114	円板 (蓋?)	板材 (板目)	(17.8)	(6.0)	1.4	2/3 欠損	木表に墨書あり
8	31	T1	堀埋土	桶側板	板材 (板目)	32.7	11.5	1.1	一部欠損	木表に指頭圧痕 表面に線状痕あり 断面はやや湾曲し
9	2	T1	堀埋土	栓	丸木削り出し	頭部径 3.0		高 3.5	一部欠損	
10	3	T1	堀埋土	差歯下駄	板材 (板目)	(8.0)	6.0	2.3	前部欠損	緒孔あり 歯なし 台部形状は長円形
11	13	T1	堀埋土	箸 (竹)	縦ざき	25.0	0.8	0.5	表面一部剥落	断面形は長方形
12	15	T1	堀埋土	箸 (竹)	縦ざき	(18.9)	0.8	0.5	両端欠損	一部削り出し 断面形は長方形
13	16	T1	堀埋土	箸 (竹)	縦ざき	(23.0)	0.8	0.3	両端欠損	3つに割れ 断面形は長方形
15	7	T1	堀埋土	木札	板材 (板目)	18.0	4.3	0.5	完形	下端やや剣先状に整形
19	9	T1	堀埋土	刷毛の柄	板材 (板目)	(18.9)	(6.0)	1.3	一部欠損	刷毛装着部に木釘が3本残る 表面に指頭圧痕?あり 刷毛装着部と表面の一部に朱色顔料付着
20	32	T1	堀埋土	不明	板材 (板目)	38.4	12.3	2.2	完形	中央に孔があり釘がささる 孔部周辺は鉄分付し 木端に向かって鍵状に切り込みあり
20	T1	堀埋土	箸	棒材 (削り出し)	(13.5)	0.8	0.6	木口欠損	先端切り落とし	
21	T1	堀埋土	箸 (竹)	縦ざき	(16.6)	0.9	0.8	木口両側欠損		
22	T1	堀埋土	不明	角材 (板目)	3.6	3.1	2.5	完形		
23	T1	堀埋土	楔か	角材 (板目)	14.0	2.4	2.3	完形	片木口が薄くなるよう斜めにカット	
41	T1	堀埋土	端材	角材? (板目)	21.2	(2.6)	(1.8)	木端欠損		
42	T1	堀埋土	端材?	板材 (板目)	8.8	3.7	0.8			
43	T1	堀埋土	不明	板材 (板目)	(13.7)	(3.1)	0.8	木端欠損	木表・隅に木釘うちこまれている 木裏は段が付き薄く削られる・表面被熱	
44	T1	堀埋土	箸	棒材 (削り出し)	(9.8)	0.7	0.6	木口欠損		
45	T1	堀埋土	漆碗?	挽物	底径 (4.0)		底厚 (1.5)		内面赤漆・外面黒漆 3個体に割れ、うち2個体接合	
46	T1		杭	角材 (削り出し)	(22.5)	4.0	2.4		先端は削り出し・潰れ 加工痕あり	
47	T1		杭	角材 (削り出し)	(14.5)	3.7	4.2		先端部のみ残 加工痕あり	
48	T1		杭	角材 (削り出し)	(11.2)	3.9	2.4		先端部のみ残 加工痕あり 先端潰れ	
49	T1		杭	角材 (削り出し)	(9.2)	3.7	2.5		先端部のみ残 加工痕あり 腐食が進行	
50	T1		杭	角材 (削り出し)	(13.7)	4.1	2.4		先端部のみ残 加工痕あり	
51	T1		杭	角材 (削り出し)	(8.7)	(2.6)	(1.9)		先端部のみ残 加工痕あり	
52	T1		杭	角材 (削り出し)	(16.4)	2.5	2.3	木端欠損	先端部のみ残 加工痕あり	
3	17	T2	整地土	曲物側板	板材 (板目)	(43.5)	(3.9)	(0.6)	木端欠損	木表・裏黒漆 接合部に華皮残る
5	12	T2	堀埋土	曲物底板	板材 (板目)	9.1	(4.5)	0.4	1/2 欠損	クレゾコ 樺皮縦じ孔あり 2つに割れ
21	33	T2	堀埋土		板材 (板目)	36.3	(8.4)	1.2	片側欠損	木表に墨書あり、木口切り落とし 木端切り落とし 木表加工調整あり 木裏割りっぱなし
53	T2	堀埋土	杭	丸木 (芯持)	(29.8)	(7.2)	(4.2)		先端部のみ残 加工痕あり 欠損か割れか不明	
56	T2	整地土	円板 (桶蓋?)	板材 (板目)	41.8	(29.5)	1.1	1/3 欠損	6個体に割れ接合する 中央部被熱 (コケ)	
58	T2	整地土	曲物 (側板)	板材 (板目)					細片のため固化不可	
4	11	T3		曲物底板	板材 (板目)	11.0	(5.0)	1.1	半分欠損	カギゾコ
2	19	南区		漆碗の蓋	挽物	高台径 (4.2)		高 (2.0)	口縁欠損	両面赤漆
14	14	南区		箸	棒材 (削り出し)	22.1	0.8	0.7	完形	断面形は垂楕円形
40	検出面	東		箸?	棒材 (削り出し)	(6.2)	0.8	0.6		木口上切り折り (欠損ではない)
7	8	検出面	北東隅	円板	板材 (板目)	6.5	(3.3)	0.3	1/2 欠損	両面ともに墨書あり 片面中央に指頭圧痕?あり
16	24	検出面	東	短冊状木製品	板材 (板目)	17.8	2.6	0.3	完形	木釘2本・釘孔1か所あり
17	25	検出面	東	短冊状木製品	板材 (板目)	23.2	2.6	0.3	木端一部欠損	2つに切り割りされている
18	26	検出面	東	短冊状木製品	板材 (板目)	23.1	(3.8)	0.3	木端一部欠損	1/3で割れる
28	検出面	東	短冊状木製品	板材 (板目)	14.3	4.0	0.4		端に孔あり	
54	検出面	北東隅	短冊状木製品	板材 (板目)	23.0	(10.0)	0.3	木端片側欠損		
27	検出面	東	棒状木製品	丸木 (芯持ち)	(22.8)	0.8	0.8		樹皮が残る	
39	検出面	東	端材 (建築材?)	板材 (板目)	(15.1)	(5.2)	1.9			
30	検出面	東	端材	板材 (板目)	2.0	10.6	0.9	木端欠損	木表に刃物による加工痕多数あり	
34	検出面	東	端材	板材 (板目)	3.8	(5.6)	0.9	木端欠損	木表加工痕あり	
35	検出面	東	端材	板材 (板目)	(6.2)	2.2	1.1	木口一部欠損	全面割りっぱなし 木口切り折り	
36	検出面	東	端材	板材 (板目)	10.1	(2.6)	1.8	一部欠損	木表に鋸の切り込みと刃物による無数の傷	
37	検出面	東	削りくず	板材 (追板目)	(9.4)	4.3	(1.2)	木口と木表の一部欠損	平面削りで切り折り 木表一部被熱 (コケ)	
22	10	検出面	東	不明	丸木削り出し	径 2.7	2.9	高 7.1	完形	樹皮が一部残る 表面に線状痕あり 上下端に面取り加工
29	検出面	東	不明	棒材 (削り出し)	(16.3)	0.4	0.4	木口両方欠損	削り加工 (粗い) あり 表面に朱漆? 断面形は多角形	
38	検出面	東	不明	棒材 (板目)	(14.0)	2.9	0.8	木口欠損	全面割りっぱなし 木表に刃物痕あり	
55	検出面	北東隅	不明	板材 (板目)	9.8	(1.4)	0.4	木端片側欠損	赤紫の被膜で覆われている	
57	検出面	東	不明	角材? (板目)	15.2	(11.2)	5.5		全体的に被熱強い	
59	T1	整地土	鼻緒履物		台部長さ 25.5	台部幅 12.2	0.8		草鞋か	

※ () 内数値は残存値を表す



第26図 木製品 (1)



第27図 木製品 (2)

6 松本城大手門枡形跡出土骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

松本城は、安土桃山時代末期～江戸時代初期の建造とされており、天守が現存する城跡である。今回の発掘調査が行われた大手門枡形跡では近代と考えられる堀埋土が確認され、その埋土中からは骨が出土している。

本報告では、これらの出土骨の種類について明らかとし、当時の動物利用に関する情報を得ることを目的として、骨同定を実施した。

(2) 試料

大手門枡形跡のT1-1～4、T2-2、T2-2（拡）、T3北端より出土した骨13試料で、それぞれ試料IDが付されている（ID1-1～13）。大半の試料は1試料1点であるが、ID4,7,11は複数の試料が認められる。

出土骨は、多くが近代の堀埋土からの出土とされるが、近世整地層あるいは攪乱層等から出土した骨もある。試料の詳細は、結果とともに第10表に示す。

(3) 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。また、一部の骨については一般工作用接着剤で復元を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、骨格各部の名称については、ニホンジカを例として第28図に示した。

(4) 結果

骨13試料からは、腹足綱1種類（マルタニシ）、爬虫綱1種類（イシガメ）、鳥類1種類（ニワトリ）、哺乳綱5種類（ネコ、イヌ、ウマ、イノシシ属、ニホンジカ）が確認される（第10表）。同定結果を第11表に示す。以下、種類毎に結果を記す。

・マルタニシ

ID1-13で検出される。破片となるが螺塔の一部が残る。

・イシガメ

ID1-7で左中腹骨板が検出される。ほぼ完存する。

・ニワトリ

ID1-7で頭蓋と右上腕骨が検出される。頭蓋は、いわゆる嘴部が欠損し、頭頂骨～後頭骨部が復元したものの破損した状態であった。また、前頭骨には、解体に伴うと思われるカットマークが認められる。右上腕骨は、遠位端が欠損する。近位端側にカットマークがみられ、また一部切断される。

・ネコ

ID1-11で左橈骨と左脛骨が検出される。いずれもほぼ完存する。左橈骨は、全長83.19mm、近位端幅6.32mm、遠位端幅10.34mmを測る。左脛骨は、全長99.90mm、近位端幅16.10mm、近位端矢状径15.47mm、骨体中央横径6.48mm、骨体中央矢状径5.64mm、遠位端幅12.53mm、遠位端矢状径7.95mmを測る。

第10表. 検出動物分類群の一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前鰓亜綱	Subclass Prosobranchia
中腹足目	Order Mesogastropoda
タニシ科	Family Vivipariidae
マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
爬虫綱	Class Reptilia
カメ目	Order Testudines
イシガメ科	Family Geoemydidae
イシガメ	<i>Mauremys japonica</i>
鳥綱	Class Aves
キジ目	Order Galliformes
キジ科	Family Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus gallus var. domesticus</i>
哺乳綱	Class Mammalia
ネコ目(食肉目)	Order Carnivora
ネコ亜目	Suborder Fissipedia
ネコ科	Family Felidae
ネコ	<i>Felis catus</i>
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ウマ目(奇蹄目)	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ属	Genus <i>Sus</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

・イヌ

ID1-4に左第3中足骨・左第4中足骨、ID1-6に腰椎、ID1-7に肋骨、ID1-8に肋骨・右大腿骨が認められた。保存状態は非常によく、ID1-7を除きほぼ完存する。左第3中足骨は全長70.39mm、左第4中足骨は72.00mmを測る。また腰椎は、椎体長27.03mm、椎体径20.46mmを測る。右大腿骨は両端が未化骨で外れる。

・ウマ

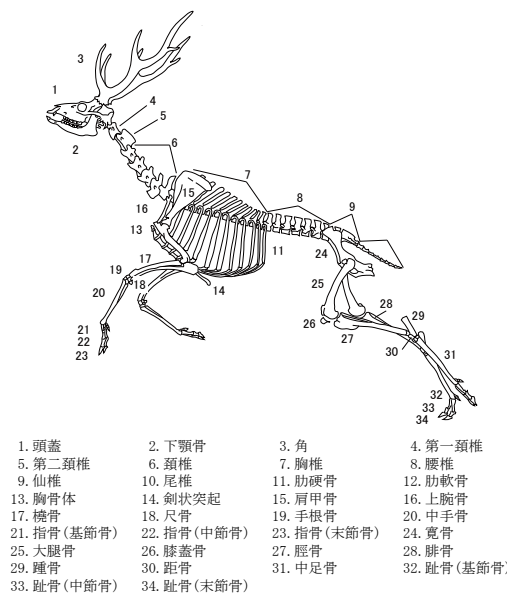
ID1-2でほぼ完存する基節骨（後肢）が検出される。全長69.25mmを測る。

・イノシシ属

イノシシ属はブタの可能性はあるが、イノシシとの区別が不可能であったため、イノシシ属にとどめている。ID1-7に右肋骨、ID1-9に左肩甲骨、ID1-12に右橈骨が核にされる。左肩甲骨は、頸部最小幅34.54mm、頸部厚14.92mm、下部幅40.31mm、関節窩長31.34mm、関節窩幅27.82mmを測る。関節窩付近において、やや幅広の傷跡が多数みられる。右橈骨は、近位端のみが残存し、近位端幅28.59mmを測る。また、骨体にはカットマークがみられる。

・ニホンジカ

ID1-1に左下顎骨、ID1-3に右上腕骨、ID1-5に右肋骨、ID1-10に左寛骨が検出される。左下顎骨は破片であり、第3後臼歯が植立し、下顎枝部が切断される。右上腕骨は、遠位端が残る。ID1-10の左寛骨は、ほぼ完存する。



第28図. ニホンジカの骨格(八谷・大森司, 1994を改変)

・獣類

ID1-7で部位不明破片が検出される。

(5) 考察

検出された種類の中でマルタニシは、北海道南部～九州・沖縄諸島に分布し、田や沼に最も普通にみられるとされることから（奥谷編著,2004など）、堀内などに生育していた可能性もある。また、食用としての利用も可能である。

イシガメは、河川・湖沼・池・湿原・水田等に生息しやや流れのある流水域を好むとされる。このことから、堀内に棲息していた可能性がある。本資料は、部分的な検出であり解体痕も認められなかったため、利用状況については不明である。

哺乳綱では、ネコ、イヌ、ウマ、イノシシ属、ニホンジカが検出される。ネコは、ほぼ完存する左橈骨と左脛骨が見られる程度である。同一の試料内に検出されることから、同一個体に由来するとみられるが、検出数が少ないため詳細不明である。イヌは、重複する部位がないものの、出土位置がT3北端、T1-3、T1-4と異なっているため、同一個体に由来する資料であるがは不明である。ウマは、後肢基節骨が検出される。

一方、ニワトリ、イノシシ属、ニホンジカは、遺構内に廃棄された食料残滓と考えられる。ニワトリでは、頭蓋と右上腕骨にカットマークがみられ、右上腕骨近位端部には切断された痕跡もみられる。イノシシ属は右橈骨にカットマークが認められる。イノシシ属の右橈骨遠位端側、ニホンジカは右上腕骨の近位端側に認められる割れ口は、丸みを帯びることから当時の痕跡と考えられる。また、ニホンジカの左下顎は下顎枝部を欠損するが、比較的直線的な状態であることから、当時の切断による可能性がある。

これらの痕跡は、解体時あるいは調理時につけられた痕跡とみられる。ニホンジカは、検出される骨の大きさからみて、いずれも成獣であったと考えられ、後背山地で狩猟されていたとみられる。左下顎骨が検出される点を考慮すると、狩猟地で解体されたものでなく、消費地で解体されたことも考えられる。イノシシ属は、左肩甲骨が成獣、右橈骨が幼獣～亜成獣程度と推定され、山野での狩猟も考えられるが、ブタであるならば飼育されていた可能性もある。

<引用文献>

奥谷喬司編著 2004 改訂新版 世界文化生物大図鑑 貝類.株式会社世界文化社.399p.

八谷 昇・大秦司 紀之 1994 骨格標本作製法.北海道大学図書刊行会,129p.

表11表 骨同定結果

試料ID	出土地点	層位	記載事項	種類	部位	左右	状態等	数量	CM	計測値	備考
1-1	T1-1	(仮)馬出後整地土	No.215	ニホンジカ	下顎骨	左	破片	1			M3植立,下顎枝部切断
1-2	T1-1	近世整地土	No.202	ウマ	基節骨(後肢)		ほぼ完存	1		全長:69.25	
1-3	T1-2	整地土~カク乱	石垣背面	ニホンジカ	上腕骨	右	遠位端	1			遠位端破損
1-4	T3北端	近世?根固内	石垣(築石)前	イヌ	第3中足骨	左	ほぼ完存	1		全長:70.39	
1-5	T1-4	近代・掘埋土	No.12	ニホンジカ	第4中足骨	左	ほぼ完存	1		全長:72.00	
1-6	T1-3	近代・掘埋土	No.13	イヌ	肋骨	右	破片	1			
1-7	T1-4	近代・掘埋土	暗オリーブ褐色土層	イシガメ	腰椎		ほぼ完存	1		椎体長:27.03 椎体径:20.46	
1-8	T1-3	近代・掘埋土	石垣前・瓦面① 暗オリーブ褐色土層	イヌ	中腹骨板	左	ほぼ完存	1			
1-9	T1-4	近代・掘埋土	暗オリーブ褐色土層	イノシシ属	頭蓋	左	破損	1	○		
1-10	T2-2(拡)	近代・掘埋土	No.88	ニホンジカ	上腕骨	右	遠位端欠	1	○		切断
1-11	T2-2(拡)	近代・掘埋土	暗オリーブ灰色層	ネコ	肋骨	右	破片	1			
1-12	T2-2	近代・掘埋土	暗オリーブシルト層	イノシシ属	肋骨	右	ほぼ完存	3			
1-13	T1-3	近代・掘埋土	北壁際 石垣1段目~2段目 ブロック多量粘土質土 礫面直上	マルタニシ	大腿骨	右	ほぼ完存	1			両端未化石外れ
M3:第3後臼歯											

写真19 出土骨



- | | | |
|------------------------|------------------------|-------------------------|
| 1. マルタニシ 殻 (ID1-13) | 2. イシガメ 左中腹骨板 (ID1-7) | 3. ニワトリ 頭蓋 (ID1-7) |
| 4. ニワトリ 右上腕骨 (ID1-7) | 5. ネコ 左橈骨 (ID1-11) | 6. ネコ 左脛骨 (ID1-11) |
| 7. イヌ 腰椎 (ID1-6) | 8. イヌ 肋骨 (ID1-8) | 9. イヌ 肋骨 (ID1-8) |
| 10. イヌ 肋骨 (ID1-8) | 11. イヌ 肋骨 (ID1-7) | 12. イヌ 右大腿骨 (ID1-8) |
| 13. イヌ 左第3中足骨 (ID1-4) | 14. イヌ 左第4中足骨 (ID1-4) | 15. ウマ 基節骨 (後肢) (ID1-2) |
| 16. イノシシ属 右肋骨 (ID1-7) | 17. イノシシ属 左肩甲骨 (ID1-9) | 18. イノシシ属 右橈骨 (ID1-12) |
| 19. ニホンジカ 左下顎骨 (ID1-1) | 20. ニホンジカ 右肋骨 (ID1-5) | 21. ニホンジカ 右上腕骨 (ID1-3) |
| 22. ニホンジカ 左寛骨 (ID1-10) | | |

第Ⅳ章 調査のまとめ

第1節 調査成果の総括

今回、松本城大手門枡形跡として、初めて発掘調査を実施した。松本城の重要な施設である大手門枡形遺構と総堀の残存状況や構造を明らかにするため、保存を前提とした発掘調査を実施した。ここでは発掘調査によって得られた情報を整理し、明らかになった事柄についてあらためて総括する。

1 大手門枡形跡の遺構について

- (1) 南北 19 m にわたって発見された石垣は、絵図等の資料と照合すると、大手門枡形跡の東縁の石垣列と考えられる。
- (2) 石垣西側に確認された石列は、枡形跡を区画する土塀の内側の石列と考えられる。ただし、石列の裏込め内からは 18 世紀代の陶器が出土しているため、18 世紀代以降に改修された可能性が考えられる。
- (3) 石垣東側の落ち込みは、総堀の掘り方と考えられる。
- (4) 石垣と石列の残存部分の間隔は、5.5 m を測る。約 3 間幅で、絵図から推測すると、この上部に土塀があったと考えられる。
- (5) 石垣前で確認された瓦・建築材の包含層と割り石層は、明治 4 年頃に行われた大手門の破却の際に、投棄されたものと考えられる。
- (6) 石垣の構造については、次のように考えられる。
 - ① 胴木の上に根石を置き、その下部は根固め用のグリ石（円礫）で充填している。
 - ② 根石の上には築石を積み、築石の石間には破碎された礫を用いた間詰石が入れられていた。
 - ③ 築石の背面には、破碎礫を用いた裏込めが詰められていた。
- (7) 石垣前には、地盤を強固にするためとみられる捨て杭が打たれていた。
- (8) 石垣は、間詰石を伴う野面積の手法で積まれていたため、古い様相がみられる。
- (9) 石垣を構築する築石や間詰石の石材は、玢岩（閃緑斑岩）系が主体で、天守や太鼓門の石材とも類似している。また裏込石として用いられた礫は、安山岩・緑色凝灰岩・玢岩などがみられ、こうした石材は付近を流れる女鳥羽川や薄川に多くみられるものである。

2 出土遺物について

- (1) 今回の調査で最も多量に出土した瓦は、藩主・水野氏と戸田氏の家紋の入った軒丸瓦が確認されており、ある程度の時間幅が考えられる。これにより、瓦を葺き直すような修理が複数回行われてきた可能性が考えられる。
- (2) 出土した瓦は、瓦当面に残る文様と、内面に残る叩き調整痕、側縁・側面の形状などの特徴で、丸瓦は 5 種類、軒平瓦は 3 種類に分類される。
- (3) 石列の裏込めから出土した陶器は 18 世紀後半のものである。このため、18 世紀後半以降に枡形内側の石列が修理された可能性が考えられる。



第29図 絵図にみる調査位置 (推定)
享保十三年秋改松本城下絵図 (郭内部分・松本城管理事務所蔵)

第2節 大手門枳形の破却について

今回の調査では、石垣際の総堀内に破却の様子が窺える遺物出土状況が観察された。明治維新後、どのように大手門枳形が破却され、総堀が埋められていったのかについて、概略を記したい。

(1) 破却前の俯瞰図

「松本城見取図」には、天守・太鼓門などのほか、大手門枳形の様子が描かれており、明治維新直後の様子が窺える。

(2) 大手門の破却

松本藩士樋口充造の明治5年（1872）正月元旦の日記には「一 旧冬御城櫓、南御門、東御門、北御門、太鼓門等取り払い入札にて取り毀ち相いなりそうろうて、・・・」とあり、明治4年12月には「南御門」すなわち「大手門」は破却されたことがわかる（文献1）。

(3) 門台の破却と千歳橋・緑橋の架設

明治6年（1873）には、博覧会が開催されるが、「筑摩県博覧会錦絵」をみると、門が破却された大手門の門台が描かれている。この時、女鳥羽川にかかる大手橋は、木製の橋である。

大手門台の石垣は、大手橋が石橋へ架け替えられるために石垣が転用され、破却された。その様子は、「信府統記追捕」（大岩昌藏）に次のように記載されている。

「明治9年12月女鳥羽川石橋なる。命じて千歳橋という 同月廿四日渡り初の式を行ふ
此橋は旧城追手前より南深志に通する往来にして、古へより板橋なりしを、今度大手橋跡升形の石垣を崩し其石を用ひ架設せしものにて、是吾が信濃に石橋を造れる魁にして、実に不朽の事業千歳の橋名空しからず、蓋し、大手橋を千歳橋と改めとなえしは是より前一年にあり」

千歳橋の架設は明治9年9月に着手し、12月に竣工した。設計監督は南深志戸長の河野百壽（このひゃくす）、石工は久保田兼太郎であった。橋には大手門の門台石垣が利用されるとともに、橋の手すりの欄干には諏訪の鉄平石が用いられた。この橋は、東京神田の万世橋の規模になったため、橋の名もこれにならい、千歳橋とした。

明治11年11月には、大手門の門台石垣を使用し、緑橋（旧名：袖留橋）が架設された。

「南深志一番町・二番町の境なる長沢川へ石橋架設 12年1月なる。名付けて緑橋という。」



写真20 「筑摩県博覧会錦絵」明治6年 （松本市立博物館所蔵）

(4) 神道本社の設立と南総堀の埋め立て

明治7年(1874)2月、大教院神道事務本局の松本分院が宮村町長松院跡に開設された。明治11年、現・四柱神社の場所に移され、本殿・事務局が新築された。この時に、総堀の一部が埋め立てられた。

「神道中教院は南深志七番丁に在りしを、明治8年大教院廃止せられしの際、神道事務分局と改称なし、同十一年十月三日旧松本城追手枅形より東繩手堀北岸土手とも（敷地反別九反式拾歩一厘六毛、招魂社地反別壹反九畝十六歩）に払下げ許可成る、同年十一月濠水を落し埋立に着手す、土方人足ハ諸講中各村等の寄付する所なり、十二年五月埋め立て成る、同月十五日地祭を行ひ兩日（十五・十六）角力を興行す、同十三年六月宮殿並事務所普請落成、同月十七日棟上式を行ふ。」

(明治11年10月3日東繩手堀北岸土壘ともに払下げの許可が下り、11月より埋め立てを始め、明治12年(1879)5月に埋め立てが終了した。5月15日には地鎮祭を行い、明治13年6月宮殿と事務所が落成し、同月17日棟上式が行われた。)

現在も残る四柱神社は、明治12年に神道事務分局に隣接して創建された。

(5) 御幸橋の架設

「明治十三年六月神道本社前に石橋を架設する。初めて鸞輿を渡し奉るにより、名付けて行幸橋（みゆきばし）といふ。六月廿四日松本へ明治天皇巡幸あり。」

明治13年6月24日、明治天皇の行幸で、行在所（新築された神道事務分局）に向かうため、行幸橋（みゆきばし、現在は御幸橋の字をあてる）を渡り初めした。千歳橋と同様に、大手門の門台石垣が利用された。設計は河野百壽、橋の両側に刻まれる御幸橋の文字は、ときの裁判所長・判事であった脇屋菊外の筆によるものである。



写真21 明治13年6月 御巡幸松本御通図（松本市立博物館所蔵）

(6) 明治13年以降の大手門枅形跡

大手門枅形跡付近には、西側に警察署が設置され、南総堀西側は埋め立てられ本願寺別院の敷地の一部になっている。大手門枅形の東側の南総堀は、僅かに南側に堀の一部が残されるまでに埋められ、神道事務分局などが造られていた。六九の北側の旧・預所役所は郡役所となり、通りの南側東端には郵便局（電信局）があった。

明治期から大正期にかけての大手門枅形跡付近は、繩手東の市役所とあわせ、郵便・消防・警察・測候が集まる行政の中核の場所となった。



写真22 明治42年(1909)頃の千歳橋(大手門門台石垣が転用された石橋)を写した絵葉書。右側木の奥の建物は松本郵便局(明治22年施工)、橋の奥には開智学校が見える。両建物ともに立石清重の設計・施工である。(文献2)



写真23 明治43年頃の御幸橋を写した絵葉書。大手門の門台石垣が利用された。(文献2)



写真24 大正時代末から昭和初期頃の大手門枅形跡(調査地付近)
火の見櫓の奥に、まだ総堀の一部が埋められずに残っている。右側は縄手通り。(文献2)

第3節 災害等による修理と瓦

今回の発掘調査において、松本城主の水野氏や戸田氏の家紋や巴紋が入る軒丸瓦をはじめ、多くの瓦類が出土した。出土遺物の項でも記載した通り、これらには同紋であっても複数の范型が存在することや、丸瓦凹面や瓦当面周辺の調整方法が異なるなどの特徴が見られる。これらの特徴が生じる背景としては、複数回にわたり門の普請事業が行われてきたことが考えられる。こうした普請を行う原因としては、①政治的な意図、②老朽化による修復、③災害などの外的要因による補修など、様々な原因が考えられる。

このうち、明らかな政治的意図をもつ普請としては、松平直政（寛永10年・1633～寛永15年・1638）による整備事業がそれにあたる。松平直政の従兄弟である將軍徳川家光が、上洛の帰路に松本城へ立寄るとの連絡があったため、「此時天守並に門々修復アリ 本城ノ東ケ輪渡り櫓ハ此時出来タリト言ヒ伝ヘリ」と『信府統記』では記している（文献3）。この時、辰巳付櫓と月見櫓が造られたと言われている。

信府統記の記述をみると「門々修復アリ」とあるので、天守だけではなく大手門も修復された可能性は十分考えられる。

しかし、城普請についての記録のほとんどが断片的であるため、老朽化や政治的な背景に係わらず、直接大手門の修理につながる記録はほとんど残されていない。

そこで、③の災害などの外的要因、つまり地震や火事などの被災の記録を取り上げ、修復について推察してみたい。以下、本稿では可能な限り、江戸時代における松本城下での災害記録と発掘調査地である大手門付近での普請記録を集成し、災害修復と瓦の葺き替えとの関連について考察を試みる。

1 大手門に関連する災害記録（第12表）

(1) 地震による被害

文書に残る地震の記録では、江戸時代に大小含め13度の地震が松本城下を襲ったとある。しかし、被災記録がほとんどなく、詳細な状況は不明である。したがって、大手門についての震災状況を記した記録についても見つかっていない。しかしながら、宝永4年（1707）、弘化4年（1847）・嘉永7年（1854）・安政元年（1855）に発生した地震は、特に大地震と呼ばれるもので、松本城にも大きな被害が出たと思われる。この時の記録は、柳沢吉保の公用日記『楽只堂年録』、松代藩月番家老・河原綱徳の記した『むしくら日記』に見ることができる。

江戸時代、城普請を行う際には、たとえ災害などが原因であっても、その修復箇所と内容を記した絵図を幕府に届け出を行い、許可をとる必要があった。柳沢吉保の公用日記『楽只堂年録』は、そうした届出の記録から作成されたものである。『むしくら日記』によれば、松本城下にも大きな被害が出たため、松代藩の使節が松本に派遣され、被害状況の調査を実施したとある。

ア 水野氏時代の地震記録

宝永4年に発生した地震は、東海以西および日本海沿岸、信濃地域など広範囲に大きな被害をもたらした。これにより、松本城下では櫓や塀、門などが破損し、藩は幕府に補修の許可を届け出ている（『楽只堂年録』）。被災場所や補修箇所の詳細については不明だが、規模の大きさから、この時大手門付近にも甚大な損害が生じたと思われる。

一方で昭和8年（1933）刊行の『松本市史 上巻』は以下のように記している。
「宝永四年十月四日晝八ッ時地震古來始めての強震と云ふ。中町飯田町博勞町人家損害を蒙る、川北は左程にも無し、翌月迄小震續く。」

これによると、被害があったのは町人町の人家で、女鳥羽川以北への影響は少なかったと記され、上述の記録と異なる。この記述からすれば大手門に関する修復工事が行われた可能性は極めて低いが、引用元が明

らかでないため、参考程度に留めておく。

また、この地震によって各藩から被害報告と城内の補修の届出が幕府へ相次ぎ、松代藩、諏訪藩が石垣などの補修を幕府へ願い出たとある（『楽只堂年録』ほか）。この状況からすると、松本藩も同程度の被害を受け、城内の補修が行われたことも十分考えられる。

今回の調査では、水野氏家紋「立沢瀉文」の記された軒丸瓦が多数出土した。宝永4年の地震に起因する門の修復の可能性も考えられるが、現時点では判然としない。

イ 戸田氏時代の地震記録

戸田氏が松本藩主の頃の享保11～明治4年（1726-1871）に発生した大地震の被害記録は2点ある。まず、弘化4年の善光寺平を震源とした善光寺地震があげられる。この地震については、松代藩による調査記録が残っている。

松本候御知らせ左のごとし

丹波守様御領分信州筑摩郡・安曇郡、去ル三月廿四日夜四時此地震強、其後折々震有之、破損所等有之、左之通、

- 一 御城内要害之外、所々屋根損壁瓦損
- 一 侍屋敷並土蔵所々壁落
- 一 城下町潰土蔵二ヶ所（以下略）

（『信濃史料叢書第9巻』むしくら日記P351）

また、安政元年に起きた大地震による城内への被害について松代藩は以下のように記している。しかし、この記述は引用の文献以外では確認できず、また諸文献によって地震発生日が異なっている。おそらくは前年の嘉永7年から安政元年にかけて立て続けに日本各地で大地震が多発したことや、それに伴い改元が行われたことに加え、その安政年号の始点を、遡る嘉永7年の1月1日からとする解釈も行われたため、記録の混乱が生じたと考えられる。

当四日朝五ッ半時頃、松本御城下大地震、其上大火之由、内穿鑿被二仰渡一左ニ申上候。

- 一 御城内二之丸石垣二十間程大崩、御櫓二ヶ所大破、御家中十七八ヶ所程も潰、其外大潰も御座候得共、駈と不二相分一、取調中之由、御家中死失・怪我無二御座一由。（以下略）

（『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』P1191）

上記によれば、城内外の石垣、屋根、壁が大きく崩れ、櫓、武家屋敷、土蔵などが半壊あるいは全壊したとあり、規模の大きさからみても大手門にも同様に何らかの損害が及んだと考えられる。この震災を受けて藩が行った普請と考えられるものに、弘化4年の「角櫓普請」、安政2年（1855）の「古山地普請」、同3年（1856）の「御殿向き所々普請・辰巳御殿普請・古山地普請」があるが、「角櫓」（隅櫓）の位置や工事の詳細は不明である。このように、記録の上では城内の北側の普請が多くみられ、大手門付近の被災の程度は明らかではない。したがって、これらの地震による普請と今回の大手門から出土した戸田家家紋「離れ六つ星文」の入る丸瓦やそれに属する瓦類との相関性を明示することは難しいが、今後城内で出土する瓦と、城内に影響した地震災害との関わりを考察する上での一例にはなり得る。

(2) 火災による被害

火災は、密集した人家を形成する城下において頻繁に発生し、延焼が広域にわたるものが多く、安永5年(1776)、享和3年(1803)、慶応元年(1865)の大火では、松本城下の家屋1000軒以上を焼失する大きな被害が出た。以下、大手門に係わりが考えられる火災記録をあげていく。

享保12年(1727)に本丸御殿が焼失したが、この時は門櫓や二の丸、三の丸などには被害はなかったとしている(文献5)。

安永5年(1776)12月の火災については、『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』によると「松本城内も火にかこまれたが、土蔵4ヶ所、外囲いの櫓9ヶ所、大手門屋根・東門屋根を少々焼き、(中略)結局城内は八丁四面が焼失し・・・(以下略)」とある。この火災によって、城内の土蔵、総堀を囲う櫓、そして大手門・東門の屋根が焼け、延焼規模は城域のおよそ半面以上に至ったことがわかる。

また、昭和8年刊行の『松本市史』の記述によると、「大手門・東門既に危き所漸く防ぎ止む。」とあり、城門を焼いた被害は相当であったことがうかがえる。そしてこの翌年、当時の松本藩主である戸田氏が新御殿や石垣などの修復工事に加え「南門並櫓普請」を行なった記録が残っていることから、この大火を原因として即普請を必要とする被害を受けたことがわかる。この大火が起きたのは12月であるから、松本藩は、翌年にすぐさま補修に取り掛かれるよう発生後ただちに幕府へ普請を願い出たことがうかがえる。

この火災記録から、大手門にかなりの被害が生じ、瓦を載せる修理が生じたことが考えられる。したがって、今回の調査で出土した戸田家家紋の入る瓦については、安永5年の火災を受けての修復事業に伴って葺かれた可能性が高いと考えられる。

このほか、大手門に直接関わるものではないが、水野期の火災に関する興味深い記録がある。明暦2年(1656)、火災により当時大手橋西の女鳥羽川南岸にあった極楽寺が焼失した。その頃の藩主であった水野忠職は、記録によると、当時北馬場にあった瓦屋が手狭となったため、水汲へ職人を移して天守の瓦や鯨を新たに作り、取り替えるという大普請を行っている。元来、鯨などの鴟尾飾りは、火除けのまじないを意味する。魚が水面から飛び上がり尾を水面上に出した姿をし、屋根上面を水面、そしてその水面下に建物があるので燃えないと考えられていた。また、一説には、鯨が口から水を吐き出し火を止めるためともいわれる。

これらが相互関係にあるとすれば、おそらく忠職はこの極楽寺の大火事を受け、より良い瓦を大量に生産し、より良い精度の鯨を天守へ葺き、防火対策をとったことが想像できる。水野氏の家紋の入った瓦については、これらの記録との関連が十分に考えられる。水野氏時代の生産の様相については今後の課題となる。

(3) その他の修理記録

地震・火災記録でこれまで述べたほかに、大手門付近における災害修復作業の事例は、慶応元年(1865)の水害で埋没した南総堀の浚渫が確認されている。

また、大手門に関しての明確な普請記録については、宝暦14年(1764)の「大手櫓普請」をはじめ文化13年(1816)の「南門修復」、そして国立公文書館の有する『信濃国松本城絵図慶応三年 松平丹波守』にみえる大手門石垣と土塁の修理に至る計7度の記録が確認されているが、そのほとんどの史料において、修復の箇所や内容について明らかでない。城普請事業は幕府の命や許可のもとで行われていたため、冒頭で述べたように普請理由は天災を受けての修復ほか新しい施設の増築、時代を経るにつれ生じる傷みや歪みの修繕など、原因や規模も様々でありその回数も多い。その中でも特に災禍が頻発したために、多くの藩が補修のための城普請を幕府へ願い出たとされ、松本藩も被災による再普請を幾度となく行なったと思われる。

2 まとめ

以上、大手門に関する地震や火災の事例記録をあげて今回の大手門跡出土瓦との関係を述べてきたが、参考とする諸史料について、災害の復旧事業に関する詳細記録が少ないことや、記載内容に相違のある箇所、不明瞭なものがみられた。しかしながら、火災の発生後における事業については、諸書の文献が良く合致し、大手門での瓦の葺き替え作業との関係が大いに推察しうる成果を得たといえる。

今回の発掘調査で出土した瓦について、その成形技法が様々であり、同紋を有する同瓦においてもその内部の調整法はいくつかに分類される。各地の瓦師がそれぞれ成形を行ったことによる工法の差、あるいは生産時期と並行するもの、あるいは複合的な理由によるものなのかは明らかでないが、瓦を大量に生産する原因の1つには災害による普請が大きく作用しているといえる。そして、当時の瓦生産について、その生産体制、原材料の粘土の採取地、また被災によって破損した瓦の廃棄なども、今後検討していく必要がある。



写真25 参考資料:明治45年の火災の被害を伝える絵葉書
かたは
片端付近の様子(文献2)

<参考・引用文献>

- 1 青木教司 2011 「資料 松本城大手門枳形の歴史の変遷」 松本城管理事務所
- 2 窪田雅之監修 2009 『信州松本絵葉書集成』 書肆 秋櫻舎
- 3 松本市史編さん室 1995 『松本市史』 第二巻歴史編Ⅱ近世 松本市
- 4 郷土資料編纂会 1968 『東筑摩郡 松本市 塩尻市 誌』 第二巻下
- 5 長野県史刊行会 1974 『長野県史』 近世史料編 第5巻(三)

第 12 表 災害と普請の記録

年（西暦）	災害	普請記録			城主
		櫓	門	その他普請	
明暦 2 年 (1656)	[火災] 極楽寺焼失				水野忠職
宝永 4 年 (1707)	[地震] 櫓、塀、門破損	記録あり	記録あり		水野忠直
宝暦 14 年 (1764)		大手櫓普請	黒門普請		戸田光和
明和 7 年 (1770)		大手櫓普請		古山地屋根普請	〃
安永 5 年 (1776)	[火災] 土蔵・櫓・大手門、 東門屋根被災				戸田光悌
安永 6 年 (1777)			南門並櫓普請	新御殿修復、古山地普請、花畑修 復	〃
寛政 3 年 (1791)	[地震]本丸高塀 30 間倒壊、 土蔵壁破損			囲普請	戸田光行
寛政 4 年 (1792)			大手普請	古山地井戸普請、太鼓門石垣普請	〃
享和 3 年 (1803)	[火災] 家中屋敷など、 2027 軒余焼失				戸田光年
文化元年 (1804)			南門西不明門 普請	新御殿所々普請、花畑囲普請、裏 御門脇高塀、花畑高塀御涼所	〃
文化 13 年 (1816)			太鼓門修復 南門修復	古山地普請	〃
弘化 4 年 (1847)	[地震] 城内の屋根壁瓦損壊、武家 屋敷・土蔵壁崩落	隅櫓普請			戸田光則
嘉永 7 年 (1854)	[地震] 本丸北側石壁 50 余間崩壊				〃
安政元年 (1855)	[地震] 二の丸石垣 20 間、 櫓 2 ヶ所、武家屋敷崩壊				〃
～安政 3 年 (1856)				古山地普請、御殿向き所々普請、 辰巳御殿普請	〃
慶応元年 (1865)	[水害] 南総堀まで川水流れ込む			南総堀浚渫	〃
慶応 3 年 (1867)			大手門普請	辰巳御殿普請	〃

表. 文中に示した災害と大手門に関わる普請記録の関係（松本城管理事務所 後藤芳孝氏資料を引用一部改変）

写真図版



発掘調査団

松本城周辺の空中写真
写真中央下端が調査地



ビル解体前の調査地
南側の千歳橋より撮影



解体中のビル
(旧鶴林堂ビル・旧ノセビル)





調査区全景（空中写真）

調査区北半部
T1・T2・T4
(空中写真)



T2 遺物出土状況
(空中写真)



南区
(空中写真)





T1 全景 (東から)



T1 全景 (西から)



T1・T4 石列検出状況 (北から)

T1 石垣（東から）



T1 石垣前面瓦出土状況
（東から）



T1 南壁（北から）





T1 小礫面検出状況(東から)



T1 小礫面立沢瀉文瓦
出土状況



T1 小礫面立沢瀉文瓦
出土状況



T2 瓦出土状況（北から）



T2 瓦出土状況（東から）



T2 礫(根固め)検出状況
（東から）



T3 根石・胴木検出状況
(東から)



T3 胴木検出状況



T3 小柄出土状況

T4 全景・石列検出状況
(西から)



T4 石列検出状況
(北西から)



草鞋出土状況
(T1 整地土出土)





南区北端
石垣前の瓦出土状況
(東から)



南区北端 瓦出土状況
(東から)



南区北端
石垣・根固め礫検出状況
(東から)

T2 北壁土層



現地見学会



作業風景





埋め戻し状況



埋め戻し状況



松本城大手門枳形跡広場の整備状況

※写真右下番号は実測図掲載No.



陶器



内耳鍋



碗



砥石



砥石



煙管



小柄



小柄 (拡大)



1 2 3



4 5 6

釘



8 7

瓦釘



13 (11-1) 軒丸瓦 (離れ六つ星文・瓦当面) A類



13 (11-1) 軒丸瓦凹面



35 (11-3) 軒丸瓦 (離れ六つ星文・瓦当面) A類



35 (11-3) 軒丸瓦凹面



13 (11-1) 軒丸瓦凹面拡大



35 (11-3) 軒丸瓦凹面拡大



14 (11-2) 軒丸瓦 (離れ六つ星文・瓦当面) A類



42 (11-4) 軒丸瓦 (離れ六つ星文・瓦当面) A類



17(11-52) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文15)B-1類



48(11-56) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文15)B-1類



16(11-51) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文16)B-1類



16 (11-51) 軒丸瓦凹面



44 (11-58) 軒丸瓦 (立沢瀉文・連珠文16) B-1類



44 (11-58) 軒丸瓦凹面



15 (11-50) 軒丸瓦 (立沢瀉文・連珠文17) B-1類



15 (11-50) 軒丸瓦凹面



11-55 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-1類



11-55 軒丸瓦凹面 B-1類



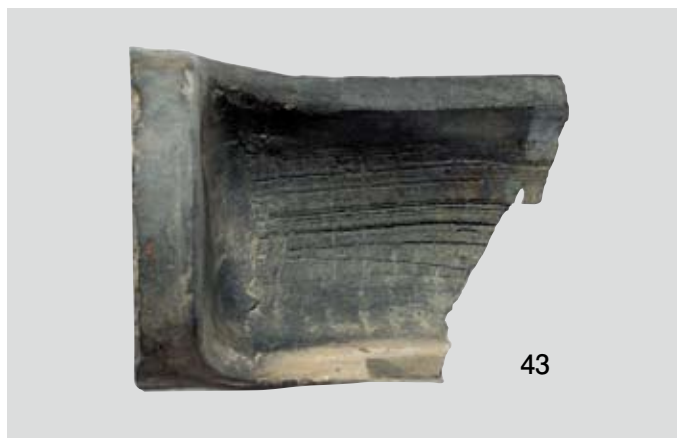
15 (11-50) 軒丸瓦凹面拡大 B-1類



44 (11-58) 軒丸瓦凹面拡大 B-1類



43 (11-66) 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-2類



43 (11-66) 軒丸瓦凹面 B-2類



20 (11-68) 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-2類



43 (11-66) 軒丸瓦凹面拡大 B-2類



52 (11-19) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



52 (11-19) 軒丸瓦凹面



53 (11-20) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



53 (11-20) 軒丸瓦凹面



22 (11-11) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



22 (11-11) 軒丸瓦凹面



52 (11-19) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



53 (11-20) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



22 (11-11) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



23(11-12) 軒丸瓦(連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



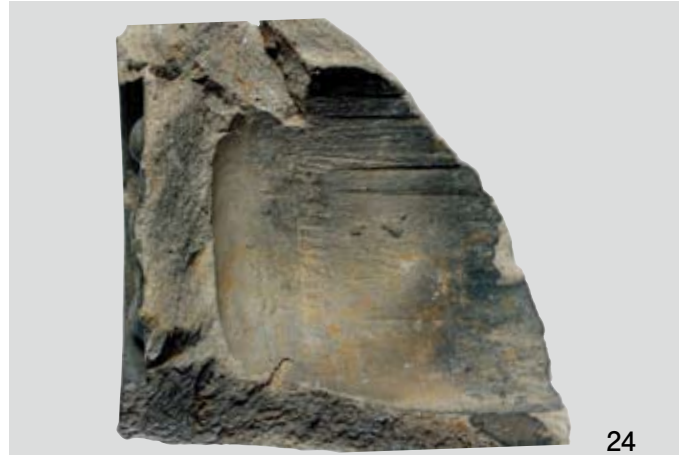
51(11-17) 軒丸瓦(連珠左卷三巴文・瓦当面) C-3類



51 (11-17) 軒丸瓦凹面



51 (11-17) 軒丸瓦凹面拡大 C-3類



24 (11-23) 軒丸瓦凹面拡大 C-2類



58(11-27) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面) D-1類



58 (11-27) 軒丸瓦凹面



37

37 (11-29) 軒丸瓦 (連珠右卷三巴文・瓦当面) D-1類



37

37 (11-29) 軒丸瓦凹面



57

57(11-32) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面)D-2類



57

57 (11-32) 軒丸瓦凹面



57

57 (11-32) 軒丸瓦凸面刻印㊦



33

33 (11-45) 軒丸瓦 (連珠右卷三巴文・瓦当面) D類



38

38(11-31) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面)D-3類



38

38 (11-31) 軒丸瓦凹面



37 (11-29) 軒丸瓦凹面拡大 D-1類



29 (11-42) 軒丸瓦凹面拡大 D-1類



57 (11-32) 軒丸瓦凹面拡大 D-2類



38 (11-31) 軒丸瓦凹面拡大 D-3類



61 (12-20) 丸瓦凸面・E類



61 (12-20) 丸瓦凹面



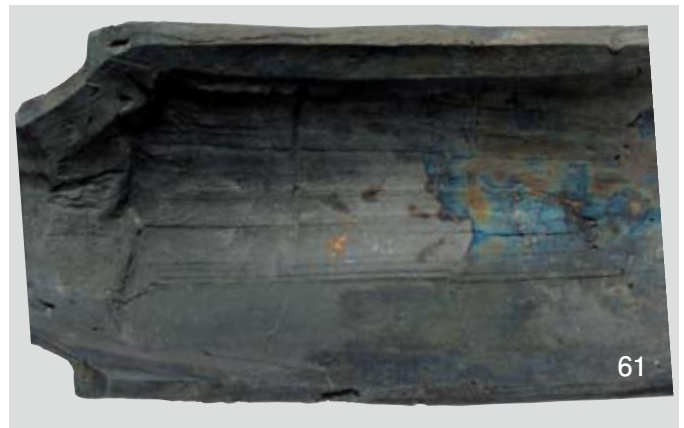
62 (12-18) 丸瓦凸面・E類



62 (12-18) 丸瓦凹面



62 (12-18) 丸瓦凹面拡大・E類



61 (12-20) 丸瓦凹面拡大・E類



67 (21-4) 軒平瓦 (中心五花卉唐草文)



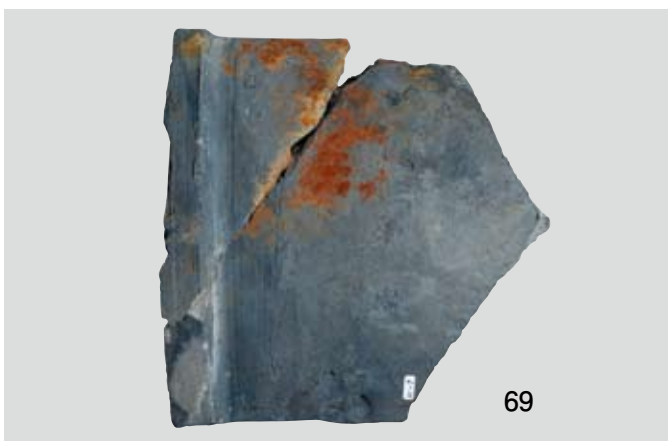
67 (21-4) 軒平瓦凸面



67 (21-4) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



69 (21-9) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



69 (21-9) 軒平瓦凸面



69 (21-9) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



73

73 (21-1) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



73

73 (21-1) 軒平瓦凸面



73

73 (21-1) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



72

72 (21-3) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



72

72 (21-3) 軒平瓦凸面



72

72 (21-3) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



66

66 (21-7) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



65

65 (21-6) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



64

64 (21-5) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



68

68 (21-10) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



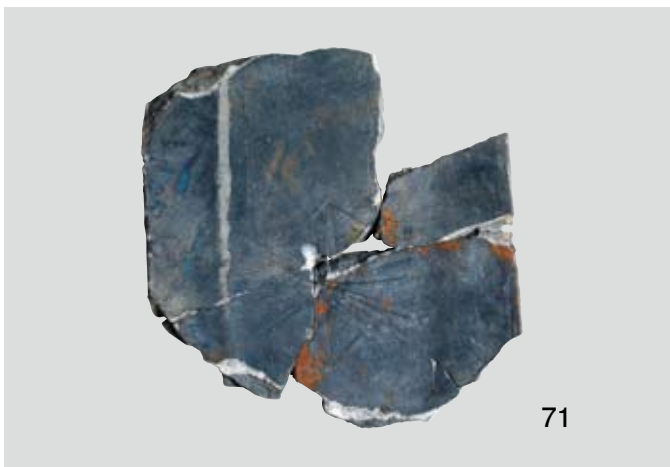
70

70 (21-8) 軒平瓦 (中心三葉文唐草文)



70

70 (21-8) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



71

71 (22-107) 刻書平瓦 (凹面)



71

71 (22-107) 刻書平瓦 (拡大)



瓦整理作業風景



瓦整理作業風景



1

漆碗



2

漆碗の蓋



4

曲物底板



5

曲物底板



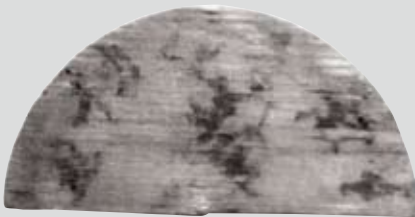
6

曲物円板・墨書 (赤外線撮影)



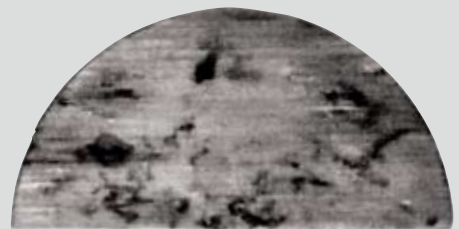
9

栓



7

曲物円板 (表) 墨書 (赤外線撮影)



7

曲物円板 (裏) 墨書 (赤外線撮影)



15

木札



16

短冊状木製品



21

墨書板材 (赤外線撮影)



19

刷毛 (表)



19

刷毛 (裏)



20

板材

長野県松本市 松本城大手門枡形跡 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうおおてもんますがたあと はくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城大手門枡形跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.219							
編著者名	竹内靖長、原田健司、山田梨恵、鈴木仁美							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2015 (平成 27) 年3月30日 (平成 26 年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつもとじょうあと 松本城跡 (おおもんすがたあと) (大手門枡形跡)	ながのけんまつもとし 長野県松本市大手3丁目 67-10 他	20202	494	36 度 14 分 5 秒	137 度 58 分 11 秒	2012. 07. 30～ 2012. 12. 28	215.5 m ²	将来的な遺跡保存を前提とした松本城大手門枡形跡広場(多目的歴史広場)整備に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
まつもとじょうあと 松本城跡 (おおもんすがたあと) (大手門枡形跡)	城館	近世	石垣 1列 石列 1列 堀跡、枡形内の整地層	土器・陶器 瓦 石製品 金属製品 木製品 植物繊維製品 獣骨類			松本城大手門枡形跡東縁の石垣・総堀・枡形内の整地層を確認した。石垣の構造や位置などを確認することができた。	
要約	<p>調査地は、松本城大手門枡形跡にあたる。将来的な遺跡保存を前提とした枡形遺構・総堀跡の残存状況、位置、構造などを確認するため、調査を実施した。調査の結果、枡形東縁部の石垣や石列の基底部、総堀の落ち込み、枡形内の整地層(地形層)を確認した。石垣は野面積で積まれており、古い様相が観察された。総堀内の石垣前面部分では、明治期の枡形破却時に投棄されたと考えられる瓦・建築材などの遺物が集中して出土した。また、枡形内石列の裏込め部分からは、18世紀代の陶器が出土しているため、江戸時代後半に改修されていた可能性が高い。出土した瓦にはいくつかの特徴がみられたため、形状や成形技法などから分類した。</p>							

松本市文化財調査報告No219

長野県松本市

松本城大手門枡形跡

—発掘調査報告書—

発行日 平成 27 年 3 月 30 日

発行 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 アサカワ印刷
